叛旗派・武装闘争小史

＜増補・改訂版＞

小山 健

神津 陽・会沢伸憲・菅 秀美

1970.7.17 首都労学政治集会、大衆的に叛旗派登場
「<党・大衆>構造の止揚へ！」
神津陽＋発言 吉本隆明

表紙写真
高橋克行壮行会・叛旗派互助会 1977 年西山温泉
（3 列右端が高槻修さん、左下が小山健）

叛旗派・武装闘争小史

<増補改訂版>

目　次

高槻さんの思い出から　小山 健　2

1　武装闘争 ---------- 3
2　いわゆる三上治問題 ---------- 13
3　叛旗解体 ---------- 25
4　解体以降　註記：学会・解放派・赤軍派 -- 30
5　叛旗派とは何だったのか＋叛旗派のシルエット ---------- 44

<付録>

1）高槻修秘話　神津 陽　75
2）高槻とともに戦った中大時代　会沢伸憲　79
3）李健裕死去　菅 秀実　87
4）叛旗派関連年表　小山 健＋神津 陽　90

高槻さんの思い出から

小山健

もし、レーニンがこの原則(労働者たちの階級という世界統一性が、国家と国家の間の障壁を超えて形成されるはずだし、されなくてはならないという原則)を、この最初期から固執しなかったとしたら、社会主義はマルクスがパリ・コミューンを見てつくりあげた、小さな知識人サークルで掲げられただけのユートピア画像で終わったはずであった。そして歴史がロシアで実現したものは理念としても現実としても、共に修正資本主義の別名にすぎなかったろう。けれどレーニンは少なくとも最初期において、ほとんどロシア社会民主労働党の崩壊を支払うほどの弾圧をこうむりながら、この原則を固執しようとした。そのために社会主義は、その最初期において、理念としてレーニンを通過しながら、わずかな期間だが確実に現実と被膜を接した機会を獲得したのである」(吉本隆明)

はじめに

本篇考察は叛旗派の中心活動家として結成から解体時まで苦楽を共にした、高槻修さんが亡くなった2009年8月に開始した。仕事の合間に思い出と戦いの軌跡、ときどきの政治・思想判断をご遺族や関係者に伝えたいという思いで書きつづった。

高槻さんや私のように茨の人生の小道を歩いたもの、人生の峠を越えてたそがれに近づいている者、「人間だけにある差別」と戦ってきた者、武装闘争の観客ではなく登場人物であった者は、他人に同じような道を歩めと強いる権利はないが、ちょっと話を聞いてくれという程度の権利はあるように思う。

好悪は別として四十年ほど前にはこんな時代があったのか、こんな闘争をしていたのか、自己解体した叛旗派という党派もあったのかと、読む人の参考にでもなれば私は満足である。

第1章　武装闘争

２００９年８月１８日早朝４時に高槻修さんが亡くなった。組織名、仲代文人(中大ブントのもじりです)が死んだ。もっとはっきり分かりやすく言えば、私たち叛旗派にとっての唐牛健太郎(安保全学連委員長)が死んだのだ。

私が高槻さんと初めて会ったのは高槻さんが亡くなる４０年前の、1969年4.２８沖縄闘争の前々夜だった。大阪の藤井寺出身（注１）で、創価学会の関西の高校部長を経て関西ブントに関わっていた私は、上野勝輝(京大・後の赤軍派)からRG(共産主義突撃隊)の一員として上京せよとの連絡を受け、大阪からナップザックひとつで中大ブントを訪ねて中央大学学生会館に行った。

しかし、当時中大がロックアウトで学生会館は閉まっており、明治大に亡命しているとのことで、すぐ近くの明大自治会のボックスに向かった。そこで詰襟姿の学生服を着て、一人で謄写版に向かい、ビラを作成している、大人しそうな学生に出会った。みんな信じられないかも知れぬが、その大人しそうな生真面目な学生が高槻修さんだった。

初めての東京で途方に暮れていた私に高槻さんは生協でごちそうをしてくれ、明大の学館でこれから総決起集会が始まるから参加するように言った。久保井拓三・三派全学連副委員長のアジ演説の後、部隊は東京医科歯科大学を占拠し、

２８日当日機動隊の壁を突破し、秋葉原から新橋へ霞が関占拠へと向かった。

これが私の東京デビュ - であり、最初に東京のブント活動家で知り合ったのが高槻修さんであった。再び、高槻さんと出会ったのは、６９年６月の伊豆半島の伊東市でのアスパック粉砕闘争 (注２) であった。

さて６９年春に、三多摩の立川市にあった都立商科短大 (現在は日野市の首都大学東京に編入されたとのこと) に入学した私は、大学で事務職員のアルバイトであった神津さんの奥さんの文さんと知り合い、その後第二次ブント三多摩地区委員会の傘下で活動していた。

当時すでに赤軍フラクと分裂状態にあった第二次ブントにあって、三多摩の部隊は、中大の代々木寮で中大の部隊と合流し、伊東へ向かった。総括集会中になだれ込んできた機動隊に三多摩の責任者の神津さんが逮捕され、脱ぎ捨てられた中核派の白ヘルメットを高槻さんと一緒にたくさん袋詰めして赤ヘルメットに塗り替えた思い出もある。

そして、７月のブント分裂のきっかけになった明治和泉校舎へ、神津さんの指示で高橋良彦（後の情況派）の防衛隊に行ったら、高槻さんが先にいて、「塩見 (一向健　後に赤軍派議長) が来ない」ということで、みんなでタバコの自販機を壊したりしていた。

その後、私は関西から上京した上野の再オルグにより夏休みから大菩薩事件の直前までの３ヶ月間は赤軍派に参加していた。この経緯は (注３)に示しておく。

１１・１７の戦闘団による蒲田決戦で高槻さんが逮捕された同時期には、自治会委員長と全闘委委員長を兼務していた私は、全学バリストの責任者として昭島署で最初の逮捕・留置生活を送っていた。１２月昭島署を出て、学校に戻ると神津さんが来て、「三多摩も軍事組織を作ったから戻ってこい」と言われ、三多摩ブントに戻った。

翌７０年６月の叛旗派結成後には叛旗遊撃隊の一員として戦旗派との内ゲバに明け暮れたが、高槻さんと再会したのは翌７１年６月頃の砂川闘争であった。「おう、久しぶり」と言った高槻さんは、６９年のうぶな学生ではなく、拘置所生活が人間を変えたのかもしれないが、ずぶとく頼もしい革命家に変身していた。

７１年夏　私は都立商短・立短自衛隊進駐阻止闘争委員会を組織し、大衆団体の一員として、阻止共闘会議の行動隊長を務め、自衛隊の飛行機を飛ばせないように反戦鉄塔を建設していた。

高槻さんも上原（山森・中大）らと一緒に鉄塔建設作業によく来てくれた。９月砂川反戦鉄塔も出来上がり、当時叛旗派の組織部門の責任者であった立花薫氏 (福井・電通大) より、三里塚第二次収用阻止闘争の部隊指揮をとるように指示され、９月１２日頃三里塚の地に向かい、９・１６東峰十字路戦闘に向かい、三警官の死に出くわした。

当時の東峰十字路参加部隊の全員は大きく動揺した。日本革命運動史上一挙に三人もの警察官が殺害され、５０名近い警察官が失明や重傷を負った事件は明治初期の秩父困民党以来のことであったからだ。

不慣れで動揺気味の指揮者の私に、急いで現地に来た三上治（味岡）氏から「健よ、歴史は１人の個人の頑張りによって突破できることもある」と言われ、私は再度９．２０公団焼き打ち闘争も指揮継続した。

三警官死亡に関わったと思われていた９．・１６闘争参加部隊を入れ替える判断となり、代わりに当時叛旗派の最精鋭部隊 (中大・三多摩中心) を率いて三里塚へやってきたのは高槻さんであった。闘争後、私は無期懲役か死刑を覚悟した。

＜三里塚東峰十字路闘争ドキュメント＞

９・１６東峰十字路闘争は、三里塚青年行動隊という現地農民青年組織と結びついている俗に「青行フラク」と呼ばれる党派やノンセクトで戦われた。闘争数日前から何度も代表者会議 (注 11) があり、叛旗派では私と沼尾君が出席していた。9.16 当日も真夜中から全部隊が動きはじめ、警察に我々が何処にいるか分らなくさせるという方針であった。

東峰十字路に機動隊３００名がいるという警察無線の傍受と斥候からの現地報告により、みゆき畑で緊急代表者会議を開き包囲せん滅する方針が決まった。

全部隊千余名のうち、先発隊は青年行動隊５０名・日中４０名・人民連帯１０名・プロ学同１００名・叛旗派１００名・付いてきた情況派１０名の計３６０余名が、まず北側から攻撃した。時間差で西側から解放派２００名・フロント１５０名・労学連２００名・京学連１００名計６５０名が攻撃する二段構えであった。

この方針は部隊の質に良く合致していた。青年行動隊は別にして、三里塚では、日中・人民連帯・プロ学同左派の３派は毛沢東系統であり、若くして死んだプロ学同で赤色戦線の戸田徹が現地に常駐していた。かつての構改派のダラダ

ラ組織の面影が全くなくなり、毛沢東流の人民戦争をやると言った本気モードに変わっていた。叛旗派とも仲がよかった。

先発３６０名の気力はヘルメットにも示されていた。日中系三派の日中・人民連帯・プロ学同は、事前にヘルメットの党派色を消していた。叛旗派は打ち合わせた訳ではないが、せん滅戦方針を前日に聞いて、叛のヘルメットの上に全員が白タオルを巻くことにした。

後続部隊は６５０名と数は多かったが部隊の質は、先発部隊より弱かったように感じた。後で述べるように気力はイマイチだったのだ。たとえば解放派は青ヘルのまま、フロントも緑ヘルのままの一般闘争のスタイルで、この武装闘争に参加していた。

戦闘は日中部隊が最初に竹藪から道路へ飛び出すと、全く襲撃を予想もしていない機動隊３０名程度がいたらしい。道側がちょっとした崖になっており、一度に道路へ飛び出せる人数は１～２人であり、大部隊はなかなか動きづらい地形であった。彼らは北へ逃げる機動隊を追いかけたとのことであるが、後方にいた私たちには全く見えず、ただ歓声を聞き、あわてて東峰十字路へ向かわなくてはと焦ったことだけは覚えている。

叛旗派の先頭で飛び出した私がまず見たのは、北側で煙が上がり、南側の東峰十字路で２００名ほどの機動隊と激しく戦っているプロ学同の部隊であった。彼らは火炎瓶を使い切っており、「叛旗。叛旗」と叫んで、部隊の真ん中を開けてくれた。すぐ後ろにいた私たちは、全速力で機動隊に火炎瓶を投げつけて、アカシアの木で作った強いゲバ棒で猛然と機動隊をせん滅して進んだ。そこで機動隊は総崩れとなり、さらに西側から解放派・フロント等の大部隊が突っ込んで来たものだから、機動隊は南と東に逃亡した。

叛旗派は２つに別れることにし、南は沼尾君が東は私が指揮して機動隊を追跡した。その先の東峰十字路の真ん中では、機動隊総指揮者の堀田大隊長が白い旗を掲げて、どこかの戦争映画みたいに手を挙げて降服していた。だが機動隊の悪行を知っている攻撃部隊は、今までの仇討ちだとばかりに無慈悲にみんなで機動隊を袋ただきにしていた。後の裁判では機動隊側は、武士の情けもない攻撃隊に酷い仕打ちにあったと怒っていた。

道路の両端にはせん滅された機動隊がボロボロぼろになって倒れていた。誰がしたのか分らないが、何人もが素っ裸にされたり、逆手錠をかけられ、全員

が命乞いをしていた。

長年の三里塚闘争の末の機動隊への憎しみはすさまじく、各党派の指揮者が部隊のテロ・リンチ行為を止めるのが大変だった。私は警察官が何人死んだのかと愕然とした。

再結集地点の丹波山で私たちはラジオで機動隊員の死を聞いた。最初１人という報道にはヤッターと歓声も上がったが、２人・３人と増えるにつれ、みんなの顔は沈痛な表情に変わった。緊急の代表者会議が開かれ、証拠隠滅と退却が確認された。私たちはすぐ叛旗派の辺田小屋に戻り、現闘の責任者である垣内氏の指揮により血で染まったアカシヤのゲバ棒などの武器類や警察官から強奪した警察手帳等をすべて焼却処分した。

９・１６戦闘後に動揺したフロントは指揮者が叛旗の辺田の小屋に来て、「怖いよ。どうすればいいか」と泣き出す始末であった。「夜、分散して、八日市場駅とかの遠方の駅から三里塚の現地を脱出するようにすればいいのではないか」とアドバイスをした記憶がある。解放派も今じゃ信じられないが、女・子供主体のザル組織となっていて 9.16 戦闘にびっくりし、全員すぐに逃げた。労学連・京学連もノンセクトらしく慌てて逃走した。

９・２０公団焼き討ち闘争は、大木よね宅への代執行に怒り狂った日中のＨ氏と三里塚青年行動隊のＹ氏が中心となって方針が提起された模様である。間をおいて２０日に公団や建設現場の飯場を焼き尽くすという過激方針だった。

結局、９・１６後も残った党派は先発隊だった叛旗とプロ学同だけだった。すでに内部分解の様相を呈していたが戸田の率いるプロ学同残留赤色戦線は、断固やるという決意を示した。叛旗派も青年行動隊を見捨てることは出来ないという理由で、９・２０に参加することに決めた。

叛旗派の緊急会議で、部隊は９・１６の参加部隊と取り替えるが、指揮者は私と副指揮は沼尾のままでやることになった。いま指揮者を取り替えると部隊の動揺や他党派、青行フラクとの信頼関係が危うくなるという理由からであった。

事件後、相当時間が経過してから「三警官の死に叛旗派は直接関わっていないのではないか」ということが分かってきた。だが三里塚裁判の当初は、そんな状況ではなかった。三人の警察官殺しと現住建造物放火罪の罪では、渋谷暴動で警察官一名が死んだ先例があるだけだった（現在もまだ、冤罪なのに中核派の星野君が無期懲役となり下獄中である）。また三里塚 9.20 でもその日に現

住建造物放火罪で逮捕された中核派の石井君は10年の長期刑となっていた。

以上の概要で９・１６指揮者で９・２０日も指揮者だった叛旗派の私と沼尾君が、ここで人生を賭けるしかないと決意した理由は分かってもらえると思う。実際、他党派も青年行動隊の被告も人生を賭けたのだ。その結果が青年行動隊・三ノ宮君の自殺、叛旗派の松山商科大の津田君の自殺、労学連の江口君の自殺などにつながったのだ。

９．２０夜半、青年行動隊・日中・人民連帯・プロ学同・叛旗派の３００名の部隊は、木の根・千代田の空港公団、建設現場の飯場を一斉に火炎瓶で攻撃し、焼き尽くした。　焼き討ちした空港建設作業員の飯場には、女・子供までがたくさん寝ていたそうである。焼き討ちによりそのうちの１人でも死んでいたら量刑はどうなっていたのか、焼き討ち当時の方針にはそのような配慮はなかったし、行動した私らも考えたくもなかった。

三里塚闘争後の９月２８日に、別件で早くも私に逮捕状（東峰十字路の現場に血染めのタオルが落ちていて、そのタオルが狭山市の某のものだという報道が日経新聞に出た。その結果、叛旗活動家のＡ子さんが浮上しその直接の指導者である私が現場に関係していると警察はつかんだと思われる。ちなみにそのＡ子さんは２年後私の妻になる）が出され、学校・自宅にガサ入れがあった。だが私は、間一髪の差で電通大寮に逃げ込んだ。しかし、電通大寮にも何度もガサ入れがあり、その都度、寮の屋根裏などに隠れていた。

その後私たちは万全を期して、７２年１月に寮全体が要塞化している中大代々木寮に主要メンバーは逃げ込むことになった。そこで高槻さんと上原と私の一年以上にわたる地下生活が始まる。そのころ７１年１１・１９新宿交番焼き打ちで叛旗派に大量の逮捕者が出たが、他にも逮捕状が出ていて、合流メンバーも多かった。

代々木寮での地下生活を思い出すと「楽しかった」の一言に尽きる。三人で風呂に行き、食事し、毎晩中大や三多摩、南部の諸君もきて、酒盛りをしたり、歌を歌ったりの生活が続いた。特に高槻さんの赤木圭一郎の「男の怒りをぶちまけろ」は一番人気であった。

もちろん地下生活の目的は宴会ではない。機動隊のガサ入れは、朝方５時頃なので、毎晩朝５時に大丈夫だと確認して就寝し、１２時頃起きだし、三人共、

それぞれの地区学対だったので、毎日組織活動に出動していた。高槻さんと上原は中部地区へ、私は西部・北部・埼玉地区へという分担だった。私がその頃に担当していたのは早稲田・学習院・埼玉大・立教大・駒沢・武蔵工日大文理・東大駒場等々と数多かった。

叛旗派は逃亡中の地下生活が閉じられ、妄想化していくことを危惧した。そこで活動し続けながら逃亡するという「半地下生活」方針を決めていたので、逃亡生活もその頃の他党派にくらべて特段に明るかったと思う。

なかでも、「自分らがしたことはすべて引き受ける」という高槻さんの明るく、楽しく、革命運動にけれん味のない、確信に満ちた活動家としての存在と生活態度は、私たちにどれだけの勇気と自信を与えてくれたか分からない。とりわけ上原・今井・藤原等の中大ブントの末裔達に対する高槻さんのカリスマ的影響力は際立っていた。

代々木寮での高槻さんとの思い出はきりがないが、二つだけエピソードを挙げておこう。

１つ目は、高槻さんと上原、藤原などと代々木寮の食堂で朝食をとっているとき、中大理工学部の解放派が近くに来て「高槻。お前ブントで偉くなったらしいなぁ」とからかった。　高槻さんは頭に来て、その３人を「みんな手足をもっとけ」といって、ボコボコにし、血ヘどを吐かせた。私は「高槻さん、死んじゃうからやめましょう」といって必至で止めた記憶がある。その夜から中大代々木寮にいた解放派は、全員が東大駒場へ逃亡した。

次に７２年２月あさま山荘事件の時である。高槻さんと上原と私は劇研の島村の部屋でテレビに釘付けであった。特に高槻さんは銃撃戦に注目し「何で俺たちはここでテレビを見ていて、あっち側にいないんだ」と繰り返し自問していた。

高槻さんは叛旗派だが、赤軍派にも幻想があった。特に古武士の風情があった早稲田の花園氏に対して畏敬の念があったように思える。

だが私は元赤軍派で、彼らの大言壮語、内部関係の出鱈目さ、大衆運動の指導部からの召還、革命の昂揚期という誤った時代判断等々が、体験的に十分に分かっていたので全く幻想がなかった。

しかし中大では最左派を自認していた高槻さんは私とは少し感覚が違ったようで、クリアするのに時間がかかったようだ。その後お互いに逮捕され、東京

拘置所にいた頃には、何度かすれ違った。高槻さんはふてぶてしく、ヤクザのように看守を従えて、その度に「おう」と声をかけてくれた。

私は７２年９月に分倍河原でも逮捕され、千葉刑務所に収監されていた。翌７３年４月、出獄後には、７２年１１月２０日の川口君リンチ殺害事件で始まる、早大対カクマル戦闘が激化していた。

早稲田学対に復帰した私は、代々木寮で毎日のようにまだ逮捕される前の高槻さんと一緒に部隊のゲバルト訓練を行っていた。翌７３年の６月１４日の早大解放闘争で、私を含む叛旗の最精鋭部隊６４人が逮捕された。だがそれが叛旗らしい最後の大衆的武装闘争となるとは、当時の私は夢にも思わなかった。

＜73年早大解放闘争のエピソード＞

７３・６・１４早稲田闘争では、私は解放派との連絡のため、部隊と一緒に行動していなかった。叛旗派部隊の総指揮は上原が取っており、私と会沢さん、坂田氏は部隊が早稲田の商学部１４号館で機動隊に包囲された時は外にいた。

私は４月に千葉刑務所から出たばかりで、第一子が５月２７日に生まれたばかりであったが、会沢さんに「こんなことになって、みんなに会わせる顔がない。会沢さんは残ってくれ。俺は中に行くよ」と言って、機動隊の包囲を「すみません。ちょっと通して下さい。」と言ってわざわざ捕まりに入った。後から考えればなんて馬鹿なことと思うが、私はそうすることが自然に思えた。

私は１９１７年ロシア革命の渦中で、７月事件と呼ばれるアナキストに引きずられたボリシェビキの中途半端な蜂起時に、トロッキーは歌舞伎みたいにかっこよく逮捕された。だがレーニンはフィンランドに逃走した事を知っていた。闘争継続のためには学対の私は逃げるべきだったかも知れない。

だが私は史記の項羽の最後、烏江の渡しの場面を思い出して、捕まった。

「天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡ることを為さん。且つ籍江東の子弟八千人と、江を渡りて西す。今一人の還るもの無し。縦ひ江東の父兄憐れみて我を王とすとも、我何の面目ありて之に見えん。縦ひ彼言はずとも、籍独り心に愧ぢざらんや。」。６・１４闘争のあの場で、私一人がおめおめと帰るわけにはいかないという倫理が勝ったのだ。

14号館の中に入り、「上原。どうする。完全に包囲されているぞ」というと、指揮者の上原は冷静で「武器を捨てさせる。抵抗もしない。だったら公務執行妨害と凶器準備集合ではなく、建造物不法侵入程度の罪だけでどうってことない」としっかりした判断だった。私たちは部隊に鉄パイプ等の武器を捨てさせ、天地真理の「若葉のささやき」を歌いながら、私を含めて全員が逮捕された。

と思ったら、あの厳重と思えた包囲網を逃げ切った者が、東大の荒瀬・東(田村)・桑原や明治学院のデロを中心に２０名以上もいたらしいと後で聞いた。結果、私だけ一番長く半年以上拘置されたが、起訴者は８名程度で済んだ。私は、６・１４最終局面での上原のとっさの判断は、センスのブントらしく素晴らしかったと今でも思っている。　。

73年１１月中旬に千葉刑務所から再度出獄した私は、その足で中大代々木寮に駆け付けた。後で示す「神田川」の替え歌にもある「２４人の突撃隊」に挨拶するためであった。麻布の圭（中村)、力丸・三多摩のエンちゃん(水落)・節男(高橋)・トロさん(山口)・明学のデロ(菅野)等々。指揮は中大の上原と青学の横目(菅原)がとるとのことだった。　今から考えれば、それは戦艦大和の特攻みたいなものであった。

叛旗派結成後わずか３年の戦いで、組織の中枢メンバーのうち、神津・三上氏の二大指導者と年長の救対の比留間先生以外は殆ど逮捕か保釈中だった。それらの動けないメンバーは秀人(鈴木)、克っちゃん(高橋)、立花、石井、柳、深沢、譲二(梅村)、高槻、私、上原、春地(砂田)、エンちゃん、武田、備前、沼尾・山崎・岡田・岡本・松田・田中・今井・天野等々がいた。

叛旗派はこのように主要活動メンバーのほとんどが心身ともに万身創痍状態であり、私などは早大・三里塚・学園闘争等で３つの裁判をかけもちしていた。

さて中大代々木寮の叛旗残存精鋭部隊の前で私は「叛旗派はWAC(早大学生行動委員会)と生死を共にして、再び最前線に立って、カクマルの左翼官僚支配からの早大解放闘争を戦い抜こう」と訴えた。夜半になって、叛旗は11月早稲田図書館闘争に突っ込まないことにしたと上原と横目から告げられた、どうも上のブントが渋っているようだった。

逮捕されてもいいブントの指導部と言えば、電通大の垣内・坂田(生島)・中大の会沢、三多摩のハルチ、事務局の氷山(筒井)ぐらいしか残っていなかったが、会沢さんは消耗していて、ハルチは「もう一人ブントから出てくれ」といい、筒井・垣内・坂田氏はいやがっている等々の話があった。後で聞いたが、神津

さんが「俺がいく」と主張したらしいが、三上氏が残る誰が組織維持するのだと大反対したとのことだった。

上記の真相は当事者しか分らない。だが私は図書館闘争の前日に中止決定を聞いて、指揮者予定だった上原と横目に「最後まで叛旗を信じてくれたWACを見捨てるのか」と激しく詰め寄ったことを記憶している。このときほど、私は獄中にいた高槻さんが側に居てくれればと思ったことはない。高槻さんがもし代々木寮にいたら、この局面でも必ず私と合意して突撃方針が通った筈だと考えたからだ。

当時の叛旗派の一部には早稲田が焦点だといっても一大学の問題ではないか。党派の政治生命を賭けるのはおかしいといった意見もあったようだ。また私が早稲田担当の学対であったので、それで一人で突っ込めと頑張っているというと受け止める人もいた。だが私はそれらの戦わぬ理由は、大衆運動の大道を歩む時代感覚から外れた雑音に聞こえた。

実際にその後の叛旗派の全歴史を見れば、早稲田解放闘争の最終局面の73年11月19日の図書館突入闘争への不参加決定は重大問題だった。カクマルによる72年１１月の川口君虐殺事件から関わり続けた早稲田解放闘争の最終決戦を自党派内事情で回避し、いわばWACを見殺しにした時点で叛旗派の生命は実質的に終わったと私は考える。

私が下獄中に、上原と節男君が呑みながら作詞した替え歌を、記しておこう。

「神田川」替え歌歌詞

あなたはもう忘れたかしら　２４人の突撃隊を
あなたが書いた早稲田の方針　いつもちっとも　煮詰まらないの
窓の下には　猪俣はん（叛旗担当の公安刑事）が　６畳１間の全国動員
あなたは私の指先見つめ　できるかいいって聞いたのよ
若かったあの頃　何も怖くなかった　ただブントのやさしさが怖かった

第２章　いわゆる三上治問題

早大闘争が終わった後の、１９７４年から７６年暮れの叛旗解体までの３年間は記憶に残る大闘争も少なく、祝祭の後始末と微かな大衆運動の可能性を探る日々であった。

７３年秋に千葉刑務所から出獄した私の最初の仕事は、上原と娘（尚ちゃん・中大））と一緒に消耗している会沢さんを組織に復帰するように説得することであった。

そして翌１９７４年春には、71年の１１．１９新宿交番焼き討ち闘争で下獄している高槻さんを東京拘置所へ上原と迎えに行った。長い下獄生活で高槻さんの足腰は相当弱っており、山手通りかどこか忘れたが、信号を渡り切れずふらつく高槻さんを抱えて渡った記憶がある。

新大久保の新しい蒼氓社を見た高槻さんは、以前の大久保プロダクション・東京バレー劇場の木造２階の建物ではなく、鉄筋でエレベーターもある新事務所を見て、「我が同盟も着々と組織建設が前進しているなぁ」と冗談を言って笑わせた。

７４年以降思い出す闘いは、ハルチが隊長を務めた反インフレ闘争団、上原の指揮で三菱商事に突入した反インフレ闘争、上原・千代治（保坂）・大川らが関わった東北大学の戦い、千代治が指導した慶応大学の戦い、青山学院大の処分撤回闘争、明治学院大学の戦い等々しか思い浮かばない。三里塚闘争は、戸村一作選挙出馬に反対したことによって反対同盟から追放され、現闘団も解散した。辛うじて９・１６、２０東峰十字路被告団の関係で三里塚現地とは繋がっていた。

７３年秋の早稲田闘争の終焉後、古参のブント活動家が大量に組織を離れ、組織の再編成が進行した。なかでも鮮明に印象に残っているのは、７４年暮れのブント大会だ。

その叛旗派ブント大会で、無記名秘密投票による中央委員選挙が実施され、三上・神津・立花・高槻・坂田・高橋克ちゃん・石井・横目・私の９名の新中央委員と、同候補が選出された。私は新中央委員メンバーの中では、最年少であった。

三上・神津両氏が叛旗編集委員会、編集局が立花・横目・垣内・山崎、書記局が神津・石井・私・上原、組織局が神津・坂田・私・高槻・克ちゃんと任務分担された。私は、神津さんと一緒に関西など各地方委員会や自治体労研・教労研といった産別労働運動も担当した。なお救援対策分野は、別組織の赤燈社を設置し比留間先生が責任者だった。

首都圏の地区委員会は、三多摩は学対がエンちゃん、労対がハルチ、南部は学対が坂田、節男、千代治、労対が会沢さん、中東部＋西部は、学対が克ちゃん、上原、労対は高槻さんが担当することになった。

ここで特記しておくことがある。74年暮れのブント大会で、組織の要を押さえる統制委員の選挙があり、神津・立花・比留間氏の３名が選出され、三上氏が落選した件である。この無記名秘密投票による統制委員選出は、党内民主主義の確保と、職業革命家を創らず、官僚組織化させない（党常任活動費を支給しない）という叛旗派の「前衛党主義」の否定、反政治・死滅する党派の試行の一環であった。どこでも大口を叩くので三上治は叛旗派最高指導者などと思われているが、三上治の実際の組織内での信頼度はこの程度だったのだ。

仏派幹部の専修大の中井さんの葬儀後に、三上氏が「叛旗も他の党派と同じになった」という捨てゼリフに、私らが怒り「他の党派と何処が同じなのだ」と大ゲンカをしてたら、先日死去した戦旗の荒が「アメリカではボランテイアでも給料をもらっているんだぞ」と横から口出しをしてきた。その発言は後の戦旗（今は市民団体らしいが）と荒の遺族の財産争いを予感させるが，荒らしい戦旗派創始者としての権利主張だった。

元戦旗派の残党が書いた『40年目の真実』には、お金と自供問題、男女問題と左翼組織の官僚組織化、腐敗構造が描かれ、連赤問題や中核自衛隊等の日本共産党の末路と何とよく似ていることか。他党派の党派組織のダメさ加減を知るたびに、つくづく常任費廃絶、党派の解体を選択した叛旗派の先駆的な正しさを実感する昨今である。

後世伝えられる三上治問題なるものの発端は日常的な「ささいなこと」から始まったと私は考える。ブント大会後の７５年頃、新大久保の蒼氓社には、神津と、石井君、上原、私らの書記局員が、日常組織指導や全国指導、他党派との連絡等を担当し、電話番等で日中は常時事務所に詰めていた。

だが組織最高指導者を自任する三上治氏は、何故かいつも新大久保の駅前のニュー山手というパチンコ屋にいりびたっていた。携帯電話もない頃で、私か上原が着電の度にわざわざ事務所からパチンコ屋へ「味さん電話だよ」と呼びに行くことが頻繁にあった。

まだ若く、倫理的であった私たちが、獄中にいる仲間のことを少しは考えろと、味さんに文句を言いだしたのが、後の三上問題の発端のように思える。

その他、私たちが命がけでカクマルとゲバルトをしている早大解放闘争の最中の「革マルとの戦いでうちのかみさんが怖がっている」との能天気な発言や、「叛旗の組織メンバーより、吉本の集会に来る人たちを大切にしなくては」との組織人として筋違いな発言などがあり、三上の日常組織活動と言葉にも活動家なら誰でも違和感を覚えたはずだ。

丁度その頃、中大寮の下川グループが会いたいというのでお茶の水の喫茶店であったら、「高槻、上原は叛旗じゃない。俺たちの方がはるかに叛旗内容を読み込んでいる。高槻と上原を叛旗から追放すれば５０名以上の部隊で叛旗に行く」とのこと。私はこいつらの脳みその構造を疑ったが、「叛旗派をなめてるのか」と言って帰ってきた。

似たようなことは高橋克ちゃんの法政大学でもあった。叛旗正統派と称する連中が、克ちゃんの組織的追放を申し出たそうなのだ。

叛旗派は、初期より三上治氏が下獄中のためもあり、当初は神津・原・黒田・比留間先生の４人を最高指導部とした。遊撃隊のメンバーや大衆運動の指導部として、三多摩では、電通（立花（下獄中）・垣内・坂田・関・備前）、農工大（桂木・岡田・節男・山崎）、東京経済大（エンちゃん）、成蹊大（島村）、都立商（私）、元中大で三多摩反戦連合の高橋豊、新宿反戦連合では、武田・石井、首都圏学生では、中大（会沢（下獄中）・高槻（下獄中）・上原）、法政（高橋）、成城大の矢部、青山学院（林・柳・譲二・深沢）、明治学院（秀人（下獄中）・デロ）等々の中核メンバーで構成されていた。

彼らはいずれも第２次ブントからの活動家であり、赤軍派や仏派、荒の戦旗派と分派闘争を戦い、それぞれの拠点では日共から革共同両派、解放派等々と熾烈な党派闘争を経てきていた。

吉本シンパやノンセクトと違い、大衆運動の発展には党派選択もやむなし、党派軍団建設も当然であり、革命的前期から革命的昂揚期への移行の条件を探るため、全共闘の戦いの質を市民社会の深部へ波及させるとの意思統一をもって結集していた。

79年代初期の叛旗派活動家は６０年安保ブンド、雁の大正行動隊、SECT6などを超えるのだという問題意識を持続させ、意欲を持って闘争と組織活動に参加していた筈である。[1]

私で言えば、三多摩では、都立商短で解放派、東経大では共産党、砂川では中核・4トロ、早稲田や学習院でカクマル、東大駒場で解放派やカクマル派、日大文理では文理戦線という悪質ノンセクトと党派闘争を経てきていた。

当然ながら叛旗派の歴史は活動家レベェルでは、大衆運動と武装闘争、党派闘争の歴史でもあった。これらの実際の闘争の歴史を捨象して、叛旗派の本や新聞の内容をよく読みこなしている者こそ正統叛旗派だというシンパ連中が、叛旗派のまわりに沢山うろついていることに愕然としていた。

私にとっての三上問題とは、これらの輩と三上氏はどこが違うのかという感覚から始まった。実際に三上氏が組織決定で権利停止処分され、単独者の政治などを言い出すと、この種のたちの悪い吉本シンパ連中だけが、いよいよ出番だとばかりに三上の近くに集まってきたのである。

三上問題はこのように、実際に大衆運動、武装闘争、組織問題、党派闘争に向き合わない無組織性・無歴史性、経験を思想化できない、しない指導者批判として表れた。

だとすれば、三上氏は叛旗派などに所属せず、一文筆家、一評論家、一思想家として、パチンコ屋ではなく、図書館にでも通って学者レベルまで猛勉強すればいいではないかという疑問であった。

叛旗派とは何か？　自立組織とは何か？知識人と党派活動家との違いは何か？

情況派と叛旗派との違いは何か？長崎浩と三上治の立場の違いは何か？　私には、三上は吉本をかつぎ、情況派の古賀は廣松をかついだ差しか見えない。この急所を今でも三上氏は理解していない。

三上氏は、６９年秋の戦闘団問題で、情況派との分岐をはっきりさせるべきであった。第二次ブントの赤軍派、関西地方委員会（後の烽火、RG)、神奈川左派、仏派、日向派、西田戦旗、竹内ブント、叛旗派、情況派等の大分裂は、大衆運動との関係、党の存在についての観点から考えてみたい。

私見では、大衆運動と無関係に、スコラ論議に入っていたのは、関西ブントの榎原のRG、旭凡の神奈川左派、荒の日向派である。彼らの論争はRGの日向革マル批判と日向による関西ブント政治過程論批判であり、RGは政治過程論の大衆運動主義、過程として党の批判に「関係主体論」で反論し、左派は毛沢東の影響から党＝現実の共同体＝軍隊なる実態のないスコラ論議で、日向の土俵に引きずりこまれたのである。

革マルとか日向派等は後退期によくある党物神で生き延びるハイエナのような存在であり、大衆運動の高揚期には、こそこそと消えていくのである。第二次ブント諸派も、６０年安保ブントの敗北期と同じく日向派という革共同に似た罠に捕まったのである。

７３年４月の早大文学部学生大会防衛で叛旗派とWACはカクマル２５０名の全国動員部隊をコテンパに粉砕した。また、同年６月４日には、叛旗派１００名のゲバルト部隊は解放派１５０名と一緒に、革マル２５０名の全国動員部隊を粉砕し得た。そのとき、大衆運動と無関係な日向派は、わずか８名の部隊しかおらず、屈辱的に叛旗派の後塵でウロウロしていた。

上原と私は指揮者のＥに「今日見たことを荒に言っておけ」とからかった。誰一人として大衆運動を経験せず、組織化も指導もできず、早稲田の革マルの影に隠れた、学習会左翼＝戦旗日向派のなれの果てを見た。

大衆運動の現実から召還していたのは、赤軍派、仏派も同じである。赤軍派は論外として、仏派は仏氏本人に言わせれば、「政治局員を含めて全員が自供した」とのことである。だが、それを共産主義意識の欠落、弱さという総括では、赤軍派の森恒夫と変わらない。大衆不在の、社会ビジョンのない、北熊本の爆弾闘争そのものの検証をすべきだったのだ。

あえて言えば叛旗の７１年１１・１９新宿交番焼き討ちも、よく似た構図である。明学の秀人さんが大反対し、推進の克ちゃんと大論争になったらしい。私は逃亡中だったので、雀荘ゾロの会議（１１・１９の戦術会議。共同共謀正犯で大量逮捕）に参加していないが、叛旗は大衆を背負ったら頑張るが、大衆不在のゲリラ戦、テロ行為には弱い組織体質である。その後の自供問題を考えると、秀人さ

んの判断の正しさを裏付けていると思う。

第二次ブントの党内闘争とかみ合っていると思わなかったが、烽火派と西田戦機派、竹内ブントらは第二次ブントの原則的な大衆運動主義者の流れを引いていたと思う。今では彼らが統一しているらしいが、私には不自然なことではない。情況派も、後に遊撃派に行く、三里塚９．１６被告であった和光大の０君等は、口先だけの川田洋、長崎浩や石井医師らに批判的であったからだ。

８年ほど前、何かの集まりで情況派の古賀に会った時「叛旗派は何故私等を嫌うのだろう。私たちは叛旗派が大好きなのに」と言ってきた。「だから大嫌いなのだ」と言っておいた。

政治をプラグマチズムに考える輩から見れば、叛旗派と情況派の違いなど許せる範囲かもしれない。しかし、私たちは政治と個人の関わり方、つまり政治への入り方と出方の原則性で相容れないのだ。もっと解りやすく言えば、彼らの政治とは、自民党から共産党、両革共同、自分達という旧来の左翼観であり、私たちは、党派そのもの、政治そのものを根底から否定する衝動に根拠を置いたので、情況派の政治好き、三上の思想好きに違和感を持ったのである。

三上氏は今も葬儀などで顔を合わすとそのたびに、「俺は神津が可愛くてしょうがない」「健や会沢、上原らが神津の周りにいるので安心だ」「しかし俺が辞めたから叛旗が潰れた」「叛旗派も前衛主義になった」等々と言っている。困ったものである。

私は、叛旗派という＜党派を死滅させる最後の党派＞を作ったと今も思っているし義に殉じている。叛旗派の辿った軌跡、言ってきたこと、やってきたことを生きる糧にし、３０有余年の後半生を生きて来られた。例え党派という看板を外したとしても、私の生きてきた軌跡と判断基準は依然として、第二次ブント及び叛旗派の１０年の中に存在している。それは高槻さんの後半生がみごとに証明している。

さて脳天気な三上氏は、ブント同盟員会議での権利停止処分を公的会議で了解した。だがその夜に吉本さんに相談に行き、「そんな程度の政治運動だったのですか」と説教され、「単独者の政治」「恣意的自由」と称して、「単独者の政治集会」なるものを強行したのだ。

もとより政治組織の内部問題や自分の政治の出所進退について、共に闘ってきた同盟員に相談できず、いくら吉本さんとはいえ部外者の人間に相談し、自分は何の責任を負わず、１人で脱走せざるをえなかったことを「政治思想は間違っていなかったが、政治指導は間違った」等々と放言し、「健や上原等の中堅下士官のクーデター」と私たちを勝手に所有物化し家父長に子供が背いた的発言で問題の本質をはぐらかそうとしてきた。

実際、７６年の春、単独者政治集会を強行せんとする三上氏を翻意させようと、世田谷の三上氏の自宅へ、立花、坂田、克ちゃん、上原、節男、私等々で行った。三上氏の奥さんが出てきて、「あんたらは家の人にさんざん世話になって、育ててもらった恩も忘れて」と馬鹿な事を言った。三上はさんざん自立集団と言っていながら、その実態理解は親分子分関係だったのかとつくづく情けなかった。また三上氏に育ててもらってもない。

６０年安保から一貫して三上氏を支えてきた比留間先生や、中大社学同の幻想から三上氏に幻想のあった高槻さんも、三上氏に強く異議を唱えていたが、困惑と消耗が激しかったように思う。確かにこのことは叛旗の中大社学同以来の人間関係や人脈に深い傷をもたらした。中大は無論のこと、三多摩も神津氏を始め、学対であった黒田氏も中大学館出身であり、新宿反戦連合も中大出身の比留間さんが創立者であり、南部以外では、人脈的に中大ブントの流れをくむものが多かったのである。

特に事情も知らない中大ブントの先輩筋からは、「お前ら味さんに何が文句あるのか」とか「もともと味さんのいいかげんな事はわかっていたはずだ。」とかの類の話をさんざん言われた。「だから中大ブントは学内活動家しかつくれなかったのだ」、「中大ブントには情況派と叛旗派の区別がつかぬ連中がいて、慈恵医大の亀（情況派の池亀・一条）あたりにかき回されたじゃないか」、「叛旗派結成時の中心メンバーは三多摩ブントだろう」と喉まで出かかったが我慢した。

確かに、三上氏は組織的・政治的に無節操な人であるが、私にとって１０歳も年上の大人であり、私的にも逃亡中の結婚式に立ち会ってくれ、いつも「健、健」と言ってやさしくしてもらった。　怒りやすい私を優しく諭してくれる大事な先輩でもあり、叛旗派の明るく、陰険にならない組織体質は味さん個人の人格にも負ってきた部分があると思う。

しかし、人にやさしく自分にもやさしい味さんは、組織的に「いい加減」で

大甘だった。

これは三上氏に何度も言ったが、「大道無門論文」は第二次ブント及び叛旗派の歴史の清算であり、プレハーノフの「武器を持つべきでなかった」の類に等しい総括である。ブント大会での権利停止処分は、叛旗派創始者に対する私たちブント同盟員のせめてもの恩返しと思っていたが、三上氏には通じず何の反省もしなかった事が情けない。

三上が突然言い出した革命戦争批判は赤軍派や連合赤軍を批判すると見せかけて、組織決定により私たちが実践してきた叛旗派の武装闘争史を全否定する低次元な内容だった。組織的決定時には三上はその場にいなかったのか、何をしていたのだと言いたい。

また共同体論・前衛主義批判は革共同を批判すると見せかけて、神津思想の根幹であった叛旗派の結集軸を否定する歴史の冒涜だった。三上は共同体論を認めてきた自分が恥ずかしくないのか。ブント叛旗派が三上の言うべ平連的寝言で形成できる訳がないだろう。

「私はもともと政治関係など持ちたくなかった。１人で自由に生きたかった」等々の「大道無門」での発言は政治活動家、特に政治指導者が言って許されることではない。たとえ１人でも三上氏の背中を見て、人生を賭けた人がいたらどう責任を取るのだ。また、

三上氏は「１９７０年代論」で、神津氏の「関係のかくめい」論が現実の政治組織で具体的な問題として浮上してきたときに、「これは形を変えた前衛組織論だと思った」と言っているが、冗談じゃない。そんな三上のアナクロな個人主義こそ、時代状況、歴史的経験を抑ええない評論家の役立たずのタワゴトである。

叛旗派の反前衛主義・反レ-ニン主義の特徴は、「革命の主体は労働者である」という当たり前の原則論と、レ-ニンが「労働者は自然的には労働組合意識しか持たない、コミュ-ン、半国家、プロレタリア独裁から国家への廃絶に至る共産主義の実現、価値法則の止揚に至る道は革命的インテリゲンチヤによる外側から外部注入が必要」とする現実論のはざまで、スタ-リン主義やファシズムが登場してきたという歴史的総括から登場したのだ。

第二次ブントでは赤軍派や戦旗派等々と党派闘争の果てに叛旗派結成があり、その後の叛旗の武装闘争で、長期下獄者も大量に生み出した。さらに私が学対であり、砂川反戦鉄塔建設でも一緒に苦労した日大文理の星（安田）君の三鷹駅の飛び込み自殺、同じく私が学対であり、公私とも信頼してくれていた学習院の池田（李健裕）君の６．１４早稲田闘争逮捕による発狂（２００７年死去）、９．１６三里塚での自供が原因の松山商大の津田雄二郎君の自殺等々多くのつらい思い出もある。更に進行している11.19闘争の実刑裁判、９．１６東峰十字路闘争での私たち８名の裁判、とりわけ９．２０の公団焼き討ち闘争による私と沼尾君の現住建造物放火罪は長期実刑が弁護団から確実と言われていた。

そのような叛旗派の負債を引き受けるという立場も責任も考えも一切思考内容に組み込まずして何が単独者の政治だ。三上氏でなかったら、蓄積された怒りで半殺しにしていると思った叛旗派同盟員は１人や２人ではないはずだ。

実際、三里塚闘争の自供者に怒り狂った同盟員は多数いた。近年になって、ほとぼりが冷めたと思っているのか、三里塚９．１６東峰十字路闘争で逮捕され、私たちを官憲に売り渡した青山学院の「海老蔵」こと早稲田大学教授になっている高橋順一が恥ずかしくもなく元叛旗派と公言している。

私は高橋順一が、それなりに学問の世界で頑張っていることを好意的に見てきた。しかし、三里塚闘争で私を含め叛旗派の多数のメンバーを官憲に売り渡し、あまつさえ他党派のメンバ-のことまで自供し、現地農民、三里塚青年行動隊の存在まで自供した高橋順一が、その総括もせず、どの面を下げて、元叛旗派であると公表して、雑誌「情況」等に対談等で登場したり、三上氏や吉本氏と対談しているのだろうか。

吉本さんはともかく、高橋順一の犯罪性を周知している三上治の無原則性はあきれたものである。そのような三上氏の無原則が包容力と誤ってとらえられ、自供問題や責任感のない無原則的な活動家を大量に生み出したことこそ犯罪的なのだと三上氏は知るべきである。

確かに吉本さんは宮顕や徳田の非転向を状況と無関係で閉じた世界に終始したものとして、非転向の転向として批判した。そして転向した中野重治の「村の家」を転向文学の最高峰として、封建的劣勢の日本の大衆と向き合った最大の成果として評価したことは周知のことである。

それゆえ叛旗派は日共や新左翼のような自供問題を転向一般として取り扱わず、

吉本さんの転向論の影響を強く受け、「インテリゲンチャに起こった社会総体のビジョンを捉えられないことによる思考変換」として、思想問題としてとらえてきた。もっと簡単に言えば、逮捕・獄中で孤立した際の思想的広がりと深さでどれたけ大衆の原像と向き合えるのかということである。　では叛旗の自供者や組織脱走者は本当に敗北に向き合ったのか？　そのことこそ私たちは問うているのだ。

後に早大教授になった高橋順一は三里塚での己の敗北から何を学びとったのか？　私は彼が自供後、組織を離脱し、それなりに苦労して、埼玉大学へ入り直し、学問の世界に終始していることは、１つの総括として、現実に向き合っているものと好意的理解をしてきた。

しかし最近になって高橋順一が、多くの雑誌インタビューで全共闘の思い出や叛旗派であった頃と言い始めるのを見ると、つくづくダメな奴だったと思う。叛旗派の被告団は他党派から自供問題で追及され、自己批判し、９．２０公団焼き討ち・現住建造物放火罪では私と沼尾君が完全黙秘し、すべてを引き受け、青年行動隊や他党派の波及を止めることによって信頼を回復させていった。

高橋順一が新左翼一般を批判するのなら、自らの行動と思想と生き方で批判するべきである。一言多い叛旗シンパや吉本信者より、黙々と戦いに向かった中核派の諸君の方がはるかに信頼できるという現実を私たちは越えようとしたのではなかったのか？現実の場に下りてこられない世界でいっぱしの発言をしているとまた転向するだけである。

笑い話を１つ。ある会合で今は大学の先生になっている沼尾君と高橋順一が顔を合わせたとのこと。高橋が「沼尾君。お互い大学の先生になれてよかったね」と言ったらしい。沼尾君は「一緒にするな」と一喝したそうだ。沼尾君は３８歳まで孤立無援の裁判闘争を戦い、働きつつ夜学に通い、苦学して予備校講師になり、発表した論文が認められ、大学に招かれた。高橋順一ごときと一緒にされてたまるかとの思いは、私にはよく伝わる。

＜三上治問題・補足＞

三上治は２０１４年に入ってのインタビューで「私は叛旗派の諸君には旗ザオ以上のものを持たせなかった」ととくとくと書くが、私が述べてきたようにまったく事実無視のふざけた話だ。

また三上は神津批判を繰り返し、あたかも「神津氏が武装闘争を担わず、逮捕・獄中闘争を経験していないから、活動家の生活困窮や被告の苦しみを理解できない」風に書いている。だが神津氏の一度も休まぬ無給の組織活動がなければ、叛旗派自体がつぶれていた。

なぜ武装闘争を最前線で担った叛旗の最も戦闘的活動家であった私や高槻さん、長期下獄した克ちゃんを始め、叛旗被告団の全員が誰１人として三上氏を支持せず、なぜ全員が神津氏を支持したのか？　頭を冷やして考えてみろ。また離脱後の三上氏の回りに集まったのは、組織逃亡者や自供者ばかりだった事実をどう総括するのか？　恥ずかしくはないか？

叛旗派は三上のごとく、ベ平連や構改派、吉本シンパを相手に何かをしたのではない。三里塚や早大解放闘争を見るまでもなく、叛旗派は赤軍派を始め、武装闘争に向かった、ブント各派や中核派、解放派を相手に、闘争してきたのである。

各自が特に被告団が闘争の最前線で生活維持を模索しているのに、三上が特権的位置から「本当は１人になりたかった」とか、組織人なのに「生活問題は各人の恣意性に任せるべきだ」等々の評論家風の寝言を言い出しても、誰も聞く耳を持たなかったのだ。

さらに三上の集めた組織カンパ金の私的生活への流用や、今の住居を親族に提供してもらっている等が発覚した。その上で三上は奥さんの司法試験受験への協力を理由に、自ら組織活動制限を申し出た。誰が司法試験を受けようが勝手だが受験勉強はいわば趣味の問題であり、組織人の三上が活動停止の理由とするような切実な生活問題ではない。

殆どの活動家が生活維持のため四苦八苦なのに、指導者だけの特権的主張はおかしいと誰もが思うだろう。どんな貢献的な組織指導者でも特権的自己正当化が認められる訳ではないのに、いつもダラダラ活動し自分には大甘な三上氏の活動制限申請には、フザケルナ、理不尽に政治活動を制限するなら組織を辞めろとの声が出てくるのは当然だろう。

このような組織指導者とは思えぬダラダラ主張の延長に、大道無門や個人的政治活動論がでたのだ。そんな無節操な自己正当化を通すと、現場運動も急務

の救援活動も終わる。誰も三上の駄弁を信用しなくなるのは当然だろう。

公開されていないが、その頃に救援基金捻出を目的に叛旗メンバーとシンパで始めた裏事業があった。その当事者のメンバーから保釈された私は高級料亭に招待された。そのなかの誰かが「健さん。子供が生まれたから次の闘争参加は勘弁してくれ」と願い出て、裏事業参加を組織活動制限の正当化理由とした、

私はこんな武装闘争に参加もせぬ奴らが、金儲けで羽振りのいい姿を正当化している姿を見て許せぬと思った。比留間先生や神津氏に「こんな馬鹿なことは今すぐやめさせろ」と怒って進言したことがある。この裏事業の顛末も、関係者に報告して欲しいものだ。

私は自分の五感を駆使して、本書で叛旗派時代の見聞と問題点を記してきた。だがあの激動の時代に叛逆する党派組織を維持するのは、並大抵のことではなかったはずだ。若輩者の私の知らぬことも推測のいたらぬ点も多いと思うので、この冊子刊行を機に先輩関係者諸氏に知られざる事実を記していただきたいものである。

第三章　叛旗解体

７６年６月18日の三上治単独者の政治集会阻止に対しては叛旗派は統一して行動した。だがこの総括問題あたりから、叛旗解体の序章が始まったように私は思う。１つは政治集会への対応であり、２つ目は吉本さんへの対応についてである。

中央委員会では、私と坂田氏、克ちゃんが、「これは分派・党派闘争である。三上氏の政治集会はゲバルトを含めて断固粉砕すべきであり、吉本さんが三上氏を庇った場合は、吉本氏もゲバルト対象である。」と主張した。高槻さんは集会断固粉砕はいいとしながらも、三上氏への思いで沈痛な面持ちであったと記憶する。菅原横目は吉本さんの登場自体に、動揺していたようだ。

ただこの段階での吉本氏への思い・評価は私と克ちゃんとは全く正反対であった。私は学習院大で「吉本隆明研究会」を呼びかけ(死んだ池田(李)が中心になって組織し、叛旗系メンバーが結集して、「共同幻想論や吉本政治思想」の勉強会をするなど、思想家としての吉本さんを高く評価し、獄中生活でも吉本隆明の著作の数々が己の支えともなった。

しかし、政治行動、政治組織、一活動家の立場から、一知識人として吉本さんを見ていたのである。吉本さんがあいまいに三上氏の政治行動に加担するならば、吉本さんのためにも、断固として政治の何たるかを示すべきであるという判断であった。

それぞれ吉本さんへの思いはあろうが、政治集会を断固粉砕するという意見は、中部・東部の上原や南部の明学の部隊、三多摩の節男やエンちゃんや備前等々叛旗派の大多数から支持されたと思う。

部隊は明学に結集し、叛旗の赤ヘルメットを着用して出発を待っていた。直前に、立花氏が来て、「武装は無論、ヘルメットもとり、集会に参加しつつ抗議する」という方針を伝えてきた。前夜に神津・立花氏が吉本さんの自宅に行き、今回の三上政治集会への参加を中止するように説得に行っており、その最終判

断として上記方針が伝えられた。神津、立花氏は当時の最高指導者であり、その政治判断であるから、私と坂田氏はしぶしぶ従ったが、克ちゃんの怒りはなかなか収まらなかった。

集会抗議行動では、壇上に、神津・立花・坂田・克ちゃんらが三上を取り囲んで抗議し、私と上原、えんちゃん・備前等々が部隊を指揮して、会場設営や受付をしていた中大闘争での自供者や三上問題以前の組織逃亡者をかき集めた三上集会協力者を追及した。

三上は叛旗創設メンバーながらブント大会で厳しい闘争局面からの脱落を表明し、権利停止処分された。同様に三上集会で周りにいたメンバ-は自供者など組織運動のクズばかりで、た。追及する私たちに何か文句を言える者は誰一人いなかったことを付記しておく。

叛旗解体への具体的流れは、７６年７月以降の各地区委員会の夏季合宿で始まったように私には感じられた。特に中部・東部・西部の合同合宿は指導的中核である組織局の克ちゃんや高槻さんが主宰者なのに、編集局の立花氏が強引に割り込み参加したのだ。

その結果、組織部隊の中心にいた克ちゃん、高槻、上原らが孤立していく印象を私は持った。私は組織局で産別労働運動の関係を担っており、元々の古巣の地区でもあり、合宿にオブザーバ参加していたので、この異様な雰囲気は何だろうかと思った。

個人的に立花氏は、私にとって、６９年の第二次ブント三多摩地区委員会からの指導者であり、家も近所で大変親しかった。私が獄中にいる時に妻が第一子を生み、大変だったので、中野区役所の伊達さん夫婦が、三鷹台に居て、妻の面倒を見てくれていた。

その関係もあって出獄した私は、吉祥寺に住んでいた。その周辺には新宿反戦の武田氏、電通大の垣内氏がいた。特にその垣内氏の奥さんのブクは三里塚現闘団以来の妻の親友であり、同じ電通大の立花氏も吉祥寺に居て、子供同士保育園が一緒ということもあり、家族ぐるみの付き合いも多かった。７５年の三上問題等を立花氏と保育園に子供を連れていった後、吉祥寺の喫茶店でよく話し込んだものである。

しかし、７６年の三上集会以降は立花氏は局面を判断してか、克ちゃん、高槻、上原、私といった叛旗主流メンバーと距離を置き始めたと思う。同時に、立花氏は私の邪推かもしれないが、南部では千代治、中東部では早稲田の三木（松田）や日大芸の岡崎、三多摩ではエンちゃんといった具合に、私の下の世代で各地区の現場中心カードルとの結び付きを意図的に強化し始めたと思う。

それに伴い、特に、中東部での反高槻、反克ちゃん、反上原の動きが激しくなり、南部の節男君もとばっちりで批判されていたように思う。本当に嫌だったのは、彼等が、最初から人の顔色を見て、敵か味方かという関係を作ろうとしたことである。

選択するか否かの政治路線はなく、時代閉塞状況を追い風に何も行動せぬことに同意を求め、行動せんとする者の心理を分析し引き下ろす、立花氏らの叛旗派らしからぬオルグ方法に心底から陰湿な嫌な感じを受けた。私は三上集会問題のあと口数が少なくなった高槻さんを、横から批判する連中に「誰に向かってしゃべっているんだ」と怒り狂っていた。

私や上原、節男は以前から「自分に向き合わないこと」を公言していて、傲慢で内省がなく、単純な暴力主義者と見る人もいた。逃げた連中に聞くとあのまま私たちと付き合っていたら、中核派や狭間派のように「爆弾を持たされる」という恐怖感があったそうだ。

三上問題に続く、同盟の分裂は、７６年８月の中央委員会で立花氏が「このままでは活動継続が難しい」と言ったことに、神津氏が「だったらやめればいいではないか」と対応した時から、対立が一挙に表面化した。そこで神津・高槻・克ちゃん・石井君・坂田・私　対、　電通立花・青学横目との中央委員間の亀裂を生んだ。

後に純粋吉本主義の横目らの「最後の場所」グループに急接近した坂田氏は、当初は反三上・反吉本だったはずで、私は極端な変化に驚いた。私たちは中央委員会多数派だったが７６年当時の陰惨な内ゲバ全盛の風潮には誰もがうんざりしていた。

私たちの周辺でも三多摩を除いて、各地区段階では思考停止タイプが多くなり、叛旗存続主張は徐々に孤立していったように私には思える。大衆運動主義の私

たちに、組織上部の立花氏が自分の方針を示さずに「方針を出してみろ」というのだ。かかる革マル派のような情けない連中に、自分で考えろと反論することが多くなっていたのである。

特に関西地方委員会の元青学の柳を責任者とするグループは、三里塚被告団の中で、「裁判には出ない。また金も出さない。しかし分離裁判もしない」という、ふざけた対応を開始した。そのため他党派や青年行動隊からは叛旗は何をしているのだと攻撃された。

敵前逃亡した柳たちは何の反省もなく「俺たちをオルグしてみろ」という、全くの非自立的対応りを見せた。組織内逃亡者が居直り他党派から攻撃されるなか、叛旗の旗を掲げ続ける被告の山崎・沼尾・天野・岡田君と私には、はらわたが煮えくりかえる日々が続いた。

丁度その頃、私はちょっとした個人問題が起きて、７６年９月・１０月の２か月間組織活動を停止した。私が次に組織に戻った時、叛旗派はおどろくべき混乱の局地にあった。

叛旗派最後の分裂はまことに奇妙なものであった。組織の中心メンバーが他の中心メンバーに党派継続の根拠を示せ、方針を出せと叫び、それに中堅活動家が合流する図式である。組織中枢が自分の結集根拠を示せなければ、組織維持が無意味となろう。

そのように振る舞わなかった残留メンバーに対し戦争官僚・党派主義者・前衛主義者と批判する。これでは内ゲバ世相を追い風にした三上逃亡劇への追随ではないかというのが、正直な感想だった。叛旗派で何をすべきかが、各自の切実な課題となってきた。

その頃に反立花だった坂田氏は立場を急変して神津批判の急先鋒となり「会社が倒産する時に労働者は何をしてもいいのだ」と言う始末だった。私は坂田氏に「どう見たっておたくは一労働者ではなく、取締役だろう。馬鹿を言うな」と怒鳴ったことがあった。

ついでに坂田氏は生え抜きの叛旗派中枢幹部ながら、組織に入ったり出たり休んだりが忙しい人だったことを私は知っていたから、「またいつもの病気だろう。自分で吐いた唾は自分でちゃんと始末しろよ」と皮肉も付け加えておいた。

７６年秋くらいから、大部分の叛旗活動家は、再度の内部対立、時代閉塞状況下の大衆運動の不在に消耗して戦線を離脱し、各自の切実な持ち場に戻って行こうとしていた。

叛旗残留組の私たちは、自分たちが引き起こした事態の結果である、裁判闘争・下獄者対策・救対活動は何が起きようと責任を持って残そうと考えた。その余の叛旗派という党派の伽藍は一回解体させ、内的な必然性と外部条件がそろえば再建すればいいと考えた。

そこで７６年１２月に「叛旗解体・再生委員会」を１２名のブント残留同盟員の呼びかけで結成した。旧中央委員の神津（政治局）・石井（三多摩）・克ちゃん（法政）・高槻（中大）・私（三多摩）と、編集局で苦労した山崎（三里塚　農工大）、南部地区委員会の会沢氏（中大）、節男君（三多摩　農工大）　中東部地区委員会の上原（中大）、三多摩地区委員会のえんちゃん、多田さん、峰さんが名を連ねた。その他メンバーの動きは各自に任せた。

叛旗派６年の結果、同盟員に限れば、最後まで残った私と行動を供にしたメンバーは三多摩地区委員会と中大ブントの関係だけであった。ここから再出発が始まったのだ。

「叛旗解体・再生委員会」の党派解体・被告団防衛という方針は清々しかった。私たちは直ちに旧事務所解体・新事務所設置、叛旗派の財政・名簿・物品の保全に入った。この体制の延長で、「叛旗解体」「叛旗紙全縮刷版」等々を刊行し、互助会が残るのだ。

私たちは党派解体・被告団防衛の筋は何があろうと貫徹する考えで、敵対すればゲバルトで対応する方針を公言した。その被告団を含む迫力に押されてか、私たちに敵対するものは誰一人として登場しなかった。解体・再生委員会に吹き飛ばされた連中は何をしたのか沈黙したのかよく分からぬが、長い時間かけて連絡してくる関係者は徐々に多くなった。

第四章　　解体以降

７６年１２月の叛旗解体集会で叛旗解体を確認した私たちの最大課題は、闘争の大義にかまけて目を背けてきた市民社会へのつらい着地方法だった。それと並行して裁判闘争、下獄対策、救援体制の確立が待っていた。大学中退で学歴もなく、手に職もなく、帰るべき家もなく、途方にくれていた私たちは、毎日のように新大久保事務所に集まった。党派解体し相談場所を残したのは、互助会へ続く絶妙なアイデアだった。

そのうち徐々に各自の仕事展望が固まってきた。 神津さんは校正のバイトを始め、石井君は喫茶店の雇われ店長、食料品問屋に職を得た節男君が毎日試供品のインスタントラーメンを持ってきて皆に試食させていた。植木組合に勤め始めた沼尾君、峰さんや三重野さんは印刷関係、会沢さんは弘済会で労働運動を始めた。山ちゃんは塾に勤め、克ちゃん、高槻さん、東北大の後藤君は写植の職業訓練学校に通い始めた。私は、八王子の経理の職業訓練学校に行きついた。高校教員の多田さんは、教育社闘争に加わっていた。中国語を勉強し直している青学の本郷君も来はじめた。

消耗していたハルチ君も復帰して、紆余曲折があるが、上原、エンちゃんとペンキ屋グル―プを形作った。余談だが、えんちゃんと高校の同級生で、神奈川大学で襲撃してきたカクマルを殺し、狭間嘉明の防衛隊になり、改造拳銃所持で逮捕状の出ていた解放派のＴ君も一時期ペンキ屋グループに参加していた。

大久保の解体・再生委員会の事務所で毎日のように近況報告と討議を行い、政治討論を重ねつつ、叛旗解体資料集や解体以降などの本を次々に出版し、三里塚裁判や高橋克ちゃんの１１．１９闘争下獄対策を続けた。

国破れて山河ありとい言うが。叛旗派に全身全霊を賭けていた私たちにとって、１０年遅れの市民社会は浦島太郎のように驚きの連続であった。愚痴をこぼすメンバ―に、私は「俺たちが学生運動をしていた１０年と同じように、必死で仕事をしていた人達の１０年もあるのだから、いつまでも自分が主人公と思うことは止めよう」と言っていた。

「黙々と市民社会で仕事を、納得できないことを克服しながら、志を持ち続けよう」という思いがその頃のみんなの気持ちだったように思う。そこでは市民社会では先輩である先年亡くなった都立商短以来の私の友人であった元解放派の新宿区役所の井上君や、料理上手で呑み会好きな明星大の大山さんの存在も大きく私たちを支えてくれた。

そのころ中野刑務所から出獄したばかりの高橋克ちゃんが叛旗派の早期再建を言い始め、他の私たち全員が「克っちゃん。今はそんな時代じゃないよ」と反対し、なだめた頃である。克ちゃんの反天皇制、三里塚を結集軸に叛旗を再建するとのプランは、悪いけど私には当時の後退期の中核派の路線と区別がつかなかった。路線や課題が不明確なまま組織を作る手法は、今までの叛旗の歴史を歩んだ者が了解できる訳がなかった。

叛旗解体後は、社会生活では不器用だった高槻さんにはつらい日々だったようだ。運転免許をとろうとして教習所に通っていた高槻さんと話をしていたら、突然に「毎日、教習所の場所が違うんだよ」と言い始めた。「先生 (私たちは高槻さんをある種の尊敬を込めて先生と呼んでいた) それはおかしいよ」「でも池袋の KM 自動車で大手らしいぜ」と言っていた。だが Km 自動車が公認で、高槻さんの通った大文字の KM 自動車は詐欺会社であった。料金は安いが一発試験所と呼ばれ、鮫洲試験所で試験を受けるための練習所にすぎなかった。

結果、高槻さんは金を投じても運転免許を手にすることはできなかった。職業訓練学校を出て勤めた印刷所では、もともと口べたな高槻さんは、気難しい古参の印刷職人たちと折り合いがまずく、日々精神状態が悪くなっていった。「会社の前に行くと気持ちは行かなくちゃと思っても、足が動かなくなるんだ」と言い始め、「高槻さん。無理して行くことはないよ。また別のよい職場を探せばいいじゃないかと私たちは言っていた。

叛旗派の流れで最後に高槻さんと話をしたのは、１９８０年代の前半頃で、たしか節男君と一緒に大久保の喫茶店で会ったと思う。だがその頃の高槻さんは言葉がなかなか口を突いて出ず、時間をかけて一言一言絞り出すようになっていた。

昔の快活な冗談の上手い高槻さんを知っている私らには、話を聞いていること自体がつらい、痛ましいことであった。高槻さんは、第二次ブントからの党派闘争の歴史、特に対赤軍派問題、三上問題、最後の場所問題の流れを押さえ、「今の自分は何なのだ」をはっきりさせたいと、何時間もかかって絞り出すように話し続けた。

特に叛旗解体のあと政治活動をやめることは、今なお獄中にいる赤軍派の諸君やぶっとばした他党派の諸君、死んでいった活動家の諸君に申し訳ないではないかという趣旨の話を繰り返していた。その問題意識自体は税理士を目指して模索中だった私も全く同じだったので、同感だと相槌を打ったものだ。

高槻さんが私たちの前から姿を消したのは最後に電話で話した直後で、1986年私らの三里塚裁判闘争の判決直前だった。救援活動のやりとりが高槻さんを追い詰めたようなのだ。

三里塚闘争裁判では、私に８年、沼尾君には６年の求刑が出ていた。私たちは裁判闘争で事実を争っておらず、「私たちは他党派のような軍事空港反対ではなく、農民の義に立ち上がった七人の侍であり、機動隊殲滅は犬だって餌をみたら追いかける類の話だ。現住建造物放火罪については裁判でも一切黙秘する」という対応だったので、弁護士からは叛旗派は長期実刑まちがいないので、保釈金をちゃんと用意しておけという話だった。

保釈金集め活動の中で、高槻さんに可能な額でいいからカンパしてくれないかと電話をしたら、なんと当時のお金で５０万円もの大金を一個人で振り込んできた。私たち被告団は緊急協議をし、こんなには要らないとあわてて返金をした。気持ちだけでよいと言ったのに、被告団としての私の言葉が、そこまで高槻さんを追い詰めていたのかと思い愕然とした。そこで私は高槻さんをしばらくそっとしておこうと思い、連絡を停止した。

私たちは東峰十字路裁判の結審までは解体再生委員会、それ以降は叛旗互助会として、毎月１回第一木曜日に叛旗派の69年からの拠点である大久保に集まり続けた。木曜会の集合場所は大久保で転々としたが、何と現在の「としちゃん」に至るまで４０年近くもの間ずっと大久保で脈々と続いているのだ。

先輩筋からは何時まで過去にこだわるのかと勘違いされたりもしたが、私らは叛旗解体・再生委員会を経て、今は叛旗互助会なのだ。過去にこだわるつもりはさらさらないが、すがすがしい気持ちで打てば響く気心の知れた昔の仲間と、何でも話して気楽に飲むのに誰にも遠慮は要らないはずだ。井上陽水ばりに、楽しいことなら何でもやりたいだけだ。

だが東峰十字路闘争から４１年経って、他の多くの党派は四分五裂していまだに内紛を続けているところも多い。今では三里塚被告団などで、組織がバラバラになった他党派からは「叛旗はすごいなぁ」とか「いいなぁ。こんなに親身な関係が残るのは、いいよなぁ」と言われている次第だ。

突然に神津さんのところに連絡が入った３年くらい前から高槻さんとの関係が復活した。特にこの２年ほどは昔の快活な楽しそうな高槻さんの笑い声を聞くことができた。２０年以上も誰とも音信不通だった高槻さんを叛旗互助会の出版物が勇気つけていたこと、長い時間が掛かったが互助会が残ったからこそ高槻さんと再会できたのだ。私はその一点だけでも、何十年も互助会をやってきたことはよかったなとつくづく素直に思える。

２０年以上も仲間との音信不通が続いたせいか、高槻さんの頭の中では時間が止まっている処も見られた。久しぶりに会った被告団の山崎君に「山ちゃんと言えば、大利根月夜だな。昔みたいに歌ってくれ」と言って苦笑させたりもした。

最後に高槻さんと会ったのは、２００９年正月２日に日野の神津さんの家で、会沢さん、上原、松井(五右衛門)、三重野さんらと新年会をした時だった。酔った松井が年甲斐もなく、警察官を挑発して選挙ポスターに何かいたずら書きをして、日野警察に連れて行かれ、残ったメンバーは松井を助け出さなくてはいかないし、ここで高槻さんが昔のスタイルで警察官相手にひと暴れしないかと心配もした思い出が最期となってしまった。

ここまで叛旗史の細部にまで触れてきたが、名前を出されて懐かしい思いの方も嫌だ迷惑だと思った方もいるだろう。だが四十年も前のことで、どんな事実もすべて時効の話だ。思い出話で名を出すぐらいは笑って許して欲しい。　書いている私は、叛旗派の一員として誰にも恥じることなく、果敢に戦い、最も重い罪を問われて、３８歳まで裁判闘争を引き受けてきた。

死んだ高槻さんが持ち続けた志と同じく、私がちょっとでも油断し反省したり後悔したりしては、死んでいった者や一緒に戦った仲間に申し訳ないという気持ちがこの原稿を書かせた要因のひとつだ。吉本さんが書いた「僕が倒れたらひとつの直接性が倒れる」という詩句に免じて、許して欲しい。

私が心理的に特に辛かったのは、叛旗解体の２８歳から三里塚裁判結審までの３８歳の１０年間であった。その１０年間は、長期下獄に耐えうるための精神の武装を解かず、市民社会での折り合いも付けなければならない日々であった。それを支え続けてくれた神津陽氏を始め大久保で集まり続けた互助会の諸君の

存在に感謝し、６０歳という若さで亡くなった高槻さんへの花向けにしたい。

小山健　2012年12月３日記（改訂2014年１１月１日記）

＜少し長めの註記＞

註１：私の出自・創価学会的環境から反逆まで

私の大阪府藤井寺の実家は、復員軍人の父と母が町で最初の創価学会員であった。私の家には、引揚者、在日朝鮮人、部落の人達や多くの貧しい人々が日々出入りをしており、私は幼い頃から共産党の支持者よりもっと貧しい人達と付き合っていた。父も母も貧しい暮らしであったが、非常に倫理的で、それらの人々に対して献身的に支えていた。

そこで私の見た風景は、一家心中、結核で幼い子供を残して死んで行く親に泣きじゃくる子供たち、家族８人が４．５畳で暮らす生活であった。この貧困と差別に対する激しい怒りが、私の口先だけのインテリ左翼・共産党嫌い・ボランティア嫌い・労働者本体嫌いの資質の原点である。下層大衆に依拠せんとした谷川雁への共感（谷川雁の全集が創価学会系の潮出版社より出されたことは単なる偶然ではない）が、その後の私を支えてきたのだ。

高校生になった私は創価学会の関西高等部長となり、創価学会の高校生を連れ出して、各地の被差別部落の中で小中学生に勉強を教えていた。そこで関西ブントの人達と出会い、論争になり、何度も話す中で、マルクスやレ―ニン・階級闘争論の洗礼を受け、長い目での公明党・創価学会批判を受け入れた。

大阪府立富田林高校でも安保ブントの生き残りで、現在もなお矢田部落で解放塾を主宰されている黒田先生（安保全学連中央執行委員で自民党の偏向教育批判で私の母校を解雇された。数年前の同窓会で40年ぶりにお会いした折に、「お前を教えたことが、私の長い教員生活の誇りだ」と言われたことは私にとって最大の賛辞である）の影響も受け、活動の軸足を高校の社研に移していった。

１９６７年の１０・８　羽田闘争の８ヶ月前のことだ。富士大石寺（日蓮正宗の本山で創価学会はその信徒団体の１つであった）の会議で、私と８０名位の関西高校生グループが公明党を罵倒し、自民党政権の武装蜂起による打倒を訴え、私は創価学会を除名された。

註２：他党派との交流と解放派などへの疑問点

６９年に上京した私は、すべての闘争に参加することを自分に誓い、アスパック闘争でも党内闘争の関係だと思うが、たった１日で帰ったブント方針には従わなかった。

解放派が翌日も闘争を続けるというので、学友と一緒に関東学院大学に行った。青ヘル５００の部隊の中で、赤ヘル１人の私に、解放派の指揮者の狭間義明が「お前はなんでここにいるんだ」とびっくりして聞いた。

私は「ブントが帰ったので、明日自分１人でもアスパックを戦いたいのでここに来た」と言うと、武闘派の彼にふさわしく感動して、「よし、明日は部隊の真ん中にいるように。絶対に守ってやるから」と言われた。次の日、青ヘルの中にたった１人の赤ヘルで警察も驚いたらしく、盛んに「あの真中の赤ヘルを逮捕しろ」と何度も叫んでいた。

他党派との人間関係で言えば、彼ら解放派の人々との交流が多かった。叛旗派は八派全共闘枠から締め出されてはいたが、三多摩地区の各大学や中大、青学、明学では主流派であり、砂川・三里塚・早稲田等の政治・社会的拠点では、大きな政治勢力であった。

砂川では対中核・四トロに対して、フロント・プロ学同・解放派・叛旗派で対峙していた。三多摩解放派のキャップは東大の豊島で、三里塚でも青年行動隊フラクで解放派のキャップは武蔵美の村上で、共同行動をとっていた。早稲田学内では２０１１年の１月に立川の拘置所で首を吊って自殺した松崎がキャップであり、全国動員時の解放派の現場責任者は近年解放派内部の内ゲバで山武派に殺された明治の長田（荻野）であった。

私は東大駒場で、叛旗派の拠点づくりをしていたが、反帝戦線東大班とシンパ組織の駒場戦線（東大Ｋ戦線）を組織していた。しかし、砂川闘争で共闘していた解放派のステッカーの上に同一集会のステッカーを貼るという、あっては

ならないセクト主義的行為を反帝戦線東大班が犯してしまったことがあった。

事態を知った私は、すぐ東大の解放派に自己批判しに向かった。解放派のキャップは東大の並木で傲慢で横柄な男であった。彼は、３つの条件をだしてきた。１つは、今回の不始末に叛旗派として正規に自己批判文書を提出せよ。２つ目は、東大での叛旗派の活動は認めるから、青山学院での解放派の活動も認めろ。３つ目は、解放派全学連を認めろ。ということであった。

私は１つ目については、全くのセクト主義であり、あってはならないことであり、真摯に自己批判をする。今後こんなセクト主義行為は一切ないように責任を持って指導する旨の自己批判書を提出する。しかし、２点目の青山学院での解放派の登場の問題は個別青山学院の事情があり、ここで決めることではない。東大は解放派が一元支配しているわけでもなく、カクマル、民青、ブント系各派がおり、青山学院大は叛旗派が一元支配しており、同一条件ではない。また、３つ目の解放全学連は党派全学連であることは現実に明確であり、それを認めろというのは今回の問題と同じく、セクト主義的対応ではないか。むしろ党派全学連を止揚して、大衆的な活動集団にしていく努力がすべての党派に課されているのではないか等々を話した。

だが並木と称する東大解放派の中堅官僚の活動家は質が悪く、新撰組の芹沢鴨みたいな男で、出刃包丁で私を脅してきた。私は解放派程度の脅しなど何ともなかったが、後に狭間内部の内ゲバで殺された永井が出てきて対応し、私の話は分かったと鉾を収めてくれた。

私は殺された中原一（笠原正義）氏とは、１９６９年１１月昭島署にて１０日間ぐらい同房で過ごしたが、党派の指導者は、どこの党派であれ、それなりの人物であった。余談だが、同時に中核派の東京反戦の世話人であった橋本秀次郎氏も隣の房であり、二人ともカクマルに殺された。２人ともすばらしい人物であっただけに残念でならない。

６９年時の都立商科短大の解放派は、社民的色彩が強く、初期マルクスに依拠し、反レ-ニン、反外部注入論、ロ―ザ主義等で、社会思想研究会（社思研）に巣食っていた。ブントの行動についての解放派の評価は「陽性のレーニン主義」という感じだった。理論面について、特に三多摩地区の「叛旗」には一目置いている感じであった。

私は解放派については、気まじめで、若干日和見主義で、社会党等全くの労働者の苦痛を食い物とする労働貴族の集合体に幻想を持つ、社民のなかの極左という印象であった。

ブントの明るく、労働者物神から吹っ切れた、ハチャメチャな破壊主義、とりあえずやって見る、学校当局を無茶苦茶責め立てる、妥協しない戦いぶりに最初は戸惑いつつも、学内の解放派は徐々に変っていった。１年生の大多数が過激化（彼らは学校側から小山一派と言われていた）し、ストが常態化、学校が毎日お祭りのような状態で、ヘルメットも色んな色が現れ、解放派もすっかり色あせた状態になったが、最後まで仲は良かった。

解放派全体の組織体質がだんだん変っていったのは、７３年の早稲田解放闘争あたりからである。6・4にカクマル全国動員部隊を解放派と一緒に粉砕した時、うずくまっているカクマルのヘルメットをとって頭を集中的に鉄パイプで攻撃したり、持てないぐらいの大きい石を倒れているカクマルの頭に落とそうとしたり、解放派は狂っていると思った。私は必至で解放派のテロ・リンチを止めた記憶がある。

たとえカクマルであろうが、彼らとて当初は階級の廃絶の思いを共有しており、テロやリンチの対象であるはずがない。カクマルの早稲田での学内支配のためのテロ・リンチから早稲田学生を解放するための戦いが一義なのだ。そういう意味では、中核の法政大や解放派の明治大でも、その後をみていたら、どっちもどっちのレベルの酷い話が多かった。早稲田解放闘争と別の形で、法大解放闘争や明大解放闘争もありえたのである。

1975年頃、井上君の叛旗との関係（私が主催していた叛旗系の自治体労研に解放派の井上君が関わった）を問題にした解放派幹部と会ったら、１９６９年の解放派の面影はなくなっていた。国家は暴力装置で、武装で権力奪取、組織・前衛党に対する批判意識やローザの弱さを克服しなくちゃいかんと言うものだから、面食らった覚えがある。これじゃカクマルと赤軍派との合体じゃないか、中核派と変わらんとの正直な感想を持った。

解放派の敗北根拠は、浅い国家論にある。ロ-ザの民族国家の軽視、世界プロレタリア-トと世界ブルジョアジ―との対立の図式化等、国家論抜きの経済主義的な観念的世界観であり、これじゃムッソリ-ニのファシズムやヒトラのナチズ

ムに勝てっこない。

戦前の天皇制や日本的転向の総括が抜け落ちていく。総じて歴史的な総括が抜け落ち、薄っぺらなマルクス原理主義になるか、現実の闘争の中で、自然発生性に拝跪してしまうことになり、修正主義や極左主義に陥り安い習性をもっている。

解放派には国家論がないというより、薄っぺらな経済国家止まりの国家像のため、レーニンの理解も、一面的な国家暴力装置論に流れ、組織論がないから、ちょっとカクマルと内ゲバに入れば、相手に似たカクマル型の宗派主義になってしまうのだ。

何はともあれ、自由民権運動、幸徳秋水、大杉栄、2.26 事件、戦後初期の日本共産党から安保時の共産主義者同盟の流れの中に大衆運動、武装闘争、日本革命運動の現実がある。戦前、権力闘争から逃避し、一度も国家や大衆と向き合わず、責任も負わず、書斎・大学の中でぬくぬくと育った労農派と労働貴族、民同・社会党の中から何か可能性を探る、解放派の出発点からして間違っているのだ。私など一度たりとも社会党や民同に幻想など持ったことがない。

滝口弘人などの初期解放派は６０年安保闘争の敗北による、共産党の民族主義、安保ブントの一時的壊滅、ハイエナのごとき革共同に絶望し、社会党の下部組織である社青同の中で、安保ブントのように戦いの中で理論を探していこうとするある意味での大衆運動主義だった。この点ではって０年安保ブント解体によって行き場を失い，反前衛主義を掲げた独立社学同、関西ブントとの蜜月関係もあったのだ。

もっとも今の解放派は長い年月苦労を共にした仲間内での内々ゲバで殺し合い、各々がせっている現在何を言っても無駄に思える。今の解放派の姿は白昼の連合赤軍である。死んだ滝口や中原、狭間、永井等は仕方ないとして、生き残っていると思われる樋口・石橋・福島・高見・五辻・豊島・高橋・八十島等は、党派史をどう総括するのか聞きたいものである。現状では死んでいった末端の小田切や松崎等も浮かばれまい。

労働者階級の解放は労働者自身の事業であるという初期マルクスの当たり前の理屈と、革命運動の実践の果てにレーニンが辿り着いた「労働者はそれ自体では労働組合意識しか生み出さない」という経験哲学をどうとらえるかという問題こそ重要である。

史上初めて、マルクスの学説を掲げて、プロレタリア独裁による過渡的国家、半国家による、階級の死滅、国家の死滅をめざし、コミューン型国家の形成に向かった１９１７年のロシア革命。彼らが理想に燃え、目指した最初の出発点としてのコミューン４原則が何故１つも実現されずに終わったのかを検証すべきなのだ。少し詳しくソ連史を述べよう。

「マルクス主義」のコミューン４原則とは何か、次に示す。

１）常備軍の廃止。労働者による全人民総武装
２）公務員、議員の輪番制とリコール制度
３）三権分立の廃止とコミューンによる立法・行政の実行機関
４）公務員・議員の給与が労働者の平均給与を超えないこと

ソ連を国名と勘違いしている人も多いが、ソ連とは、各地のソビエト (ロシア語でコミューン、評議会という意味) の連合体であり、当初は世界革命－世界ソビエトに向けた、過渡的国家としての、ソビエト社会主義連邦であった。

レーニンは国家の廃絶失くして階級の死滅なし、国家の死滅と資本賃労働という価値法則の死滅、階級の死滅、前衛党の死滅、その過程的推進軸のプロレタリア独裁、行政と立法の一致体としての労働者・農民・兵士の評議会による直接民主主義の実現を目指した。

世界ソビエト連邦の樹立に向けて、世界革命、世界革命戦争、その実践的存在である、世界党 (第三インターナシヨナル)、世界赤軍の必要性を説いたのである。最初の試練である、ブレスト＝リトフスク条約。ドイツ帝国主義との休戦条約に、忠実なレーニン主義者 (ブハーリン、イネッサ・アルマンド、コロンタイン等のほとんど) が世界革命戦争によるドイツ帝国主義との革命戦争を訴えた。有名なトロッキーの講和も戦争もしないという路線の破産 (ドイツ帝国主義の攻撃) を指摘し世界革命戦争の実行を唱える。

レーニンはボリシェビキ左派と左翼エスエルに対して、ロシア大衆は戦争の

中止を求めていること、ブルジョア条約は時が来れば、いつでも破って世界革命戦争を再開すればよい等を述べて、講和を訴えた。しかし、レーニンはこう注釈するのを忘れなかった。ドイツ労働者はロシアボリシェビキを世界革命の裏切り者と言う権利があること、その汚名は、全世界労働者と世界社会主義者、特にロシア社会主義者の今後の双肩にあると説いた。このような世界革命への弁証法的含蓄を示したのは、たった一人、レーニンだけであった。

世界革命とコミューン四原則の志向と現実の格闘は、その後も、ドイツ革命に呼応した、ブレスト＝リトフスク条約の破棄によって、ロシア赤軍のヨーロッパ進撃で実現に向かった。しかし、歴史は、国家の壁は、国家の枠を大衆が超えること以外に世界革命は不可能だと教えている。ポーランド進撃の敗北と日本赤軍の敗北は100年以上隔てているが根は同じである。国家と市民社会の止揚は国家を超える階級の自立、存在なくして不可能なのだ。その意味では冒頭に掲げた吉本隆明の問いに、いかなる左翼も誰も答え得ていないのだ。

このことは、白軍や日欧米帝国主義国家の反革命攻撃という条件下であれ、ただレーニンだけには自覚的にとらえられていたことが、スターリンでは合理化されていった事態こそ検証されなければならない。

ここでは、トロッキーもローザと同じく、国家像が経済的か政治的かの違いはあれ、観念的であること、行政的であることが致命的であることを指摘しておきたい。

なぜ世界革命が、先進国でのみ先端的課題となり、後進国では、国家形成運動、開発独裁に敗北していくのかが問われなければならない。

その伝で言えば、世界革命をめざし、先進国での社会主義革命、労働者国家での第二革命、後進国でのナショナリズム革命の統一、三ブロック世界同時革命を志向した共産同赤軍派と反米愛国の京浜安保共闘とはどこで繋がるのだろうか？

悲劇は妙義山山中での連合赤軍であり、また北朝鮮での世界同時革命を堅持した岡本武の収容所での獄死(?)である。今の解放派や中核派もカクマルも、今は亡き赤軍派、戦旗派もこの観点で解かれなければならない。

その観点を堅持した叛旗派の戦いは、カクマルとの大衆的党派闘争に全力を賭けたのであり、主体はあくまで早稲田の学生であり、その視点から、三里塚でも政治化していく、戸村参院選や軍事空港粉砕ではなく、土地の強制収用に農民の生活を実力で守ることを支援したのである。

農機具屋の戸村一作や北原あたりが中心になること自体認めるわけにはいかなかったのだ。戦う主体は土地を耕す百姓であり、田舎インテリが上げ底化することを粉砕することと権力と直接、持続、実力闘争を日常化することで産み落とされる共同性こそ、階級形成であったのだ。

註３：ブント赤軍派との関わりと訣別

私の関西ブントとの関わりは高校時代からはじまり、68年の御堂筋闘争での輝かしい姿も見ている。関西ブントの中心メンバーが赤軍派になっていて、６９年８月中旬の上野の上京で連絡が復活した。とりあえず関西に帰って足腰を固めろとの指示だった。

ちょうど大学は夏休みだったので関西に戻り、同志社大で物江(滋賀大学)と若林に会い、４・２８闘争のRGの副隊長であった岡本武(京大、岡本公三の兄、ハイジャックで北朝鮮。金日成に従わず強制収容所で死んだ?)と、京大で暫く活動した。

その後の大阪戦争・京都戦争を戦って、再上京した私は、９月の全国全共闘大会では田宮高麿(大阪市大、赤軍派軍事委員長　ハイジャックで北朝鮮へ。北朝鮮で客死)の指揮で、連合ブントとゲバルをした。その後は田中義三(明治大学。ハイジャックで北朝鮮へ。その後タイで逮捕され日本へ護送。獄死)と明大の松陰神社の寮を拠点に過ごし、１０・２１闘争を準備した。

１０・２１闘争では、小隊長に任じられ(赤軍派時代の私は●という組織名であった)、●●を投げる任務を与えられた。私が預かった隊員の二人は桃山学院大学生と在日の浪人生だった李君であった。その二名はその後、私の下宿から大菩薩峠に向かい、福ちゃん荘で逮捕された。さらに李君は森支配下の第二次赤軍派にあって、M事件という銀行強盗で逮捕されていた。私はこの８月～１０月の復帰経験で、大言壮語で行動が伴わぬ今の赤軍派は本当にダメだと見切りが付いた。

代々木にあった赤軍シンパで黒ヘルのアナキスト夫婦の隠れ家にいながら、

私は何をしているのだろうかと思った。関西ブントの政治過程論に依拠していた私は、大衆運動の最先頭で戦う筈だったのに、１０・２１闘争は全く１人の大衆もおらず、テロに近かった。

６８年１０月御堂筋での関西ブントの学生２０００人と赤ヘル反戦３０００人の勇姿を身近に見て、私は６９年４・２８闘争の１万人の大衆部隊とRG５００人の再現を夢見た。だが夢は夢のままで終わった。私は本当に空威張りの赤軍派がつくづくイヤになった。

関西ブントは、大衆や諸党派に戦略・戦術を先頭で示し、大衆運動の型を提示すると思っていた私は、「こんなテロみたいな●●闘争はおかしい」と率直に感じた。私の関西ブンドの単純な理解は、「俺もやるからみんなもやれ」と大衆に扇動して最先頭で実践することであった。　そうであるなら、●●による闘争は全員死刑覚悟の現代版「死のう団」であるが、貧困や差別からの解放が「死ぬこと」では笑い話にもならない。

もとより死ぬことも、生きることも自然過程であるのなら理解もできるが、新宿の町はずれの機動隊や交番を●●で襲うことと革命の関連は全く不明であった。ブントの方針だった中央権力奪取闘争と拠点の政治ストの関連などまったくなく、ふざけた方針だと怒りしか残らなかった。赤軍派の戦略・戦術は、私が夢見て来たフランス革命やロシア革命の街頭のイメージと余りにもかけ離れていた。

関西ブントの流れで第二次ブントに関わった私は、大学の関連で偶然にも三多摩に流れつき、三多摩ブントに出会い、叛旗派の流れにつながることができた。

しかし、多くの関西ブントの活動家は、赤軍派の影響下で育ち（塩見・高原・八木・上野・田宮・藤本・堂山等は関西ブントの中でも一流の活動家であり、大衆運動の指導者としても光輝いていたはずだ）、今さら第二次ブントの他分派や他党派に行くこともできず、赤軍系ノンセクトとして前身を隠して転身せざるを得なかったようだ。

９．１６三里塚東峰十字路闘争、その最先頭で戦った日中（通称　日中と呼ばれ、日中友好協会正統本部という毛沢東派）であったが、半分ぐらいは西・複素数グループと呼ばれ、彼らは同志社大の藤本敏夫全学連委員長らと近い関西ブント・

赤軍系ノンセクトで、一部を除いて同志社・早稲田や関西の高校の元赤軍系の活動家であった。西グループは叛旗の現闘小屋と近いこともあり、思想的にも近く、人間関係も感性的にも相性がよく、最後にはだれがどちらの党派かの区別が解らなくなるほど仲が良かった。

私は赤軍派で活動した３ヶ月間も、学校では、自治会書記長であった。９・２９闘争で解放派の委員長がNHKに火炎瓶を投げ、逮捕・自供して、戦線離脱をしたので、解放派は委員長をブントに明け渡すことになった。

私は急遽自治会委員長になるや否や、即座に全学闘争委員会を結成して、佐藤訪米阻止の全学バリケードを１１月１日に実行した。私なりに「中央権力闘争とマッセンストライキ」という第二次ブントの戦略・戦術を実行しょうと試みたのだ。

バリケードストライキには、私と同じ１年生では大部分の活動家が参加した。だが旧指導部だった解放派は中心的活動家の武闘派のみが参加しただけで、その結果解放派のザル組織は二分解した。また今だからいえるが私の西立川の下宿に、大菩薩峠へ向かう赤軍派の中央軍の隊員５名が宿泊していたこともあった。

大学バリケード３日目に警察に包囲されて、私は逮捕された。昭島署に逮捕・勾留中に11月５日の大菩薩峠での赤軍派壊滅と上野氏逮捕を知った。警察は私が一時赤軍派であったことは知っているらしく、その後三里塚東峰十字路裁判では、検察官は「元赤軍派の小山」はと何度も言い、私が凶暴な人間であることを印象づけ、東峰十字路戦闘での残虐な行為の主犯として印象づけようとしていた。もとより何ら物的証拠もない推測発言だったので私や弁護士は撤回するように強く抗議していた。

第５章 叛旗派とは何だったのか

（よく昔の事情が分からぬ方のために、小山健が調査し作成した参考資料です）

正式名称：共産主義者同盟叛旗派 。

1970 年 6 月 11 日 第二次共産主義者同盟 (通称 第二次ブント) から分派・党内闘争を経て結成された独立左翼集団。以下、第一次ブ ント以降の歴史的流れをまとめておく。

1958 年 12 月 腐りきった日本共産党内の分派・党派闘争を展開 していた全学連指導部を中心として、結成された第一次共産主義者同 盟 (通称 第一次ブントあるいは 60 年安保ブントと呼ばれる。書 記長 島成郎) を源流とする。

1960 年安保闘争敗北後、第一次ブントは、東大本郷細胞を中心 とする革命の通達派 (服部信司 (後にマル戦派)・長崎浩 (後 情況派・ 遠方派)、蔵田計成らと労対指導部を中心とする戦旗派 (青山・陶山 (後中核派)・森 (後カクマル派))、全学連指導部中心のプロ通派 (清水 丈夫 (後中核派議長)・北小路 (中核派)、姫岡玲治、西部邉) ら) に 3 分 解する。

それらの動きとは別に、関西 (京都大・同志社・大阪市大等) では独自の安保闘争の総括 (政治過程論) を提出し、関西ブントと呼ば れる地方組織を維持していた。

第一次ブント分派闘争は、革命の通達派が「第一次ブントは、安保 闘争を階級決戦と位置づけず、日和見主義だから敗北したのであり、その理論的根拠たる姫岡玲治の国家独占資本主義論が誤っていたから である」としたが、池田内閣の登場、所得倍増計画に対応できず、理 論的に破綻し自然消滅した。

戦旗派は、第一次ブントは、学生中心の小ブルジョア主義であり、労働者本体に依拠し、世界観を共通認識とする強い党をつくるべきだ ったと主張し、後に革命的共産主義同盟に合流する。

プロ通派は、「第一次ブントは持てる力を出しつくしたのであり、基本的には正しかった。他の分派のごとく第一次ブントの革命的意義 を否定することは、湯とともに赤子を捨てる愚行だと他分派を批判し た。

プロ通派のブント継承の基本的立場は、関西ブントや独立社学同と 呼ばれた各大学学生に残存した第一次ブントの活動家の共通認識でも あった。しかし、プロ通派は最高指導者の一人の清水丈夫の裏切り的 な革命的共産主義者同盟の移行に伴い、消滅した。

このように第一次ブントの分派闘争は、戦わずして生き残った革命 的共産主義者同盟への戦旗派の合流、プロ痛幹部の移行、革命の通達 派の消滅と、各大学の社会主義学生同盟 (共産主義者同盟の学生組織) の独立化による Sect6 の登場、関西ブントの独自化に帰結した。

安保闘争後に安保ブントの後継者の立場をもっとも鮮明に示さんと したのは、吉本隆明や谷川雁の思想的影響を受けた東大山崎・早稲田 河野・中大福地 (上玲子として知られている) らの社学同事務局派であ った。安保ブント書記長の島成郎に頼まれて福地茂樹が議長となった 事務局は、革共同などの党派的主張を小馬鹿にし SECT6(セクトナ ンバーシックス) と無頼派的に名乗った。彼らは「二度と前衛という 奴らが現れなくする」「一切の啓蒙主義批判」を旗印とした。(詳細は「SECT6+ 大正闘争資料集」を参照せよ)。

だがこの Sect6 グループは社学同組織の維持拡大が目的ではなかっ たため、運動と組織の持続の展望を描けなかった。革共同グループの 台頭に焦る他グループは「腐敗せる社学同事務局派批判」を掲げ、結 集した活動家群 (東大、豊浦・佐竹・今井・専修中井、中大川口らの 広義の ML 派、医学連・東大古賀や明治の独立派、望月・石田・服部 ら後のマル戦派など) に実権をとって代わられた。

1962 年の大学管理法反対闘争後、関西ブントと各大学の社学同 が再建社学同を結成、後の叛旗派指導者となる中大の三上治 (味岡修) が委員長に選出された。委員長選出の背後には上のブント残党学生指 導者間の利害や思惑の調整があったようだ。彼らの共通認識は、戦わ ずして生き延びた革共同に対する反感がもっとも強く、第一次ブント の生命でもあった、「虎は死して皮を残す。ブントは死んで名を残す」の語に象徴されるように「運動から組織・理論をつくる」「組織を自 己目的化しない」「大衆運動の必要に応じて組織をつくる」が基本方 向であった。

65 年日韓闘争を経て、社学同と共産主義者同盟の再建が日程に 登り、東京段階ではマル戦派が共産同・社学同マル戦派として再結集 した。その動きに刺激され、松本礼二・さらぎ・専大中井、明治・中 大・医学連等が共産同・社学同独立派として結集した。関西ブントは この独立派と協議を重ね、共産同・社学同独立派と関西共産同・社学 同が合流して共産同・社学同統一派が結成された。

それに共産同・社 学同マル戦派が合流して、ついに 66 年に再建共産同＝第二次ブント が結成された。この年に三派全学連も結成された。

ブント再建大会（第 6 回大会）は、議長 松本礼二（東京 旧 ML 派）副議長 佐藤浩二（関西ブント）書記長 服部信司（マル戦 派）とみごとなまでにフラクション（派閥）配分人事であり、まことに 連合ブントに呼ぶにふさわしいものであった。

他方でこれらのブント再建構想に反対した者は ML 派に固執した。 社学同 ML 派に残留したメンバ -（佐竹（日韓決戦 渚論文で知られる）、豊浦、今井（東大安田講堂死守戦隊長・諏訪病院院長・民主党参議院 議員）、畠山・三戸部・鈴木・河北（後の京浜安保共闘）ら）は 68 年独 自に日本マルクスレ―ニン主義者同盟（通称 ML 同盟）を結成した。

さて全国的に新左翼の主流となった再建共産同は大ブント構想を掲 げ、俗称、三派全学連（革共同中核派・社青同解放派・共産同の三派 を言う）の主導権獲得を目指した。だが急拵えの寄せ集めのため、各々のフラクションの意見差異・体質の違いは相当に目立った。

とりわけマル戦派と反マル戦派の違いは鮮明であつた。マル戦派は 立正大・岩田教授の世界危機論に依拠し、「戦後政治体制の動揺の開 始」「日本帝国主義の国内攻撃の激化」「生活と権利の実力防衛」から「労働組合の労働者の階級的闘争組織への転換」を基本にすえていた。 このようなマル戦派の主張は、経済主義、一国主義と批判された。

67 年 2 月にブント統一派が主導してきたバリスト中の明大で、当局とブント系全学闘指導部のボス交渉による秘密調印が発覚し、学 費値上げ反対闘争はあっけなく終結した。この件は三派全学連内の中 核派浮上を促進させ、ブント内での東京系独立系の影響を低下させた。 他方で同時期の中大学館管理運営権獲得闘争は勝利し、中大学館は全 国の学生運動の拠点となり、後の叛旗派的傾向の下地が作られる。

関西や中大、明大などのブント統一派は、世界的視点を強調して いた。折からの米国の強硬なベトナム戦争の全面攻勢に伴い、パリ五 月革命、アメリカの反戦闘争、中南米のゲバラ・カストロ路線等々の いわゆる 68 年革命の波が拡大し、日本では全共闘運動の糸口となる 各大学のバリケード封鎖が拡大した。独立派の 68 年革命の世界性へ の着眼は、旧来の新左翼の議論には政治過程の独自運動や幻想過程の 政治指導が欠落しているという現場活動家感覚にも支持されて

いった。 だがこの蜜月も明大敗北で分解してしまう。

明大闘争敗北後の 1968 年 6 月に、ブント第 7 回大会が開かれた。議 長 佐野茂樹（佐伯武 関西ブント 後のレ―ニン研）書記長 空席？大衆運動部長 塩見孝也（一向健 関西ブント 後の赤軍派議長）学 対部長 高原浩之（坂 健一 関西ブント 後に赤軍派）等 関西ブ ントが主導権を握った。東京独立系の凋落（書記長ポスト空席はその 調整弁か？）と関西系の東京台頭と全面支配を観たマル戦派は、何を 危惧したのかブント大会 2 日目への参加をとりやめ、その大多数は組 織的にも第二次ブントから離れた。

ブント 7 回大会では、第二次ブントのメイン・スローガン、「プロ レタリア国際主義と組織された暴力」に象徴されるように、帝国主義 の攻撃に、経済過程、労働運動よりも、反戦闘争、政治闘争に力点を 置き、「日本帝国主義の侵略・反革命に、大衆のマッセンストと革命 的暴力の復権を対置せよ」という方針が定式化されていった。

7 回大会でブントからマル戦派は脱落した。だがその敗北の総括を 巡って、更に内部矛盾が拡大し細分化してゆくことになる。大きく分 ければ服部信司ら旧安保ブント残党の前衛派、成島忠夫ら三派全学連 世代の怒涛派、更にもっと若い早稲田の松井や東大清居らの L 協にマ ル戦派は 3 分解していく。

当時の運動の中で特筆すべきは、1967 年の 10.8 羽田闘争以 降、繰り返し街頭において展開された、「組織された革命的暴力」へ の学生・青年労働者（反戦青年委員会）の登場である。マッセンストラ イキの主体形成も、このような街頭での実力闘争の渦中から生まれる という合意があった。第二次ブントの 70 年安保闘争への陣型として、「中央権力闘争とマッセンストライキ」は新左翼全党派に広がってい った。

中央権力闘争を可能とする「軍事組織」、マッセンストを可能とす る地区党の建設。地区党を軸に、地域の労働者・学生・市民の目的意 識的な地区ソビエト、階層間統一戦線の建設を俎上に乗せた。

しかし、ブント第 7 回大会では勝利した関西ブントも、全共闘運動 の高揚と反戦青年委員会の指導、中央権力闘争とマッセンストの内実 を巡って後の塩見らの赤軍派的傾向が力を得て、急速に内部分解を始 めた。

68 年 12 月のブント第 8 回大会では東京ブントが優勢化し関西派 は後退を余議なくされ、議長はさらぎ徳二（東京 ML）、副議長は松本 礼二（東京独立）、書記

長は佐々木和雄 (渥美文夫 関西ブント) となった。

関西ブントの上京メンバー中心の後に赤軍派と称された人たちは、68年10・21防衛庁闘争 (ブントの有名な丸太闘争 中大から丸 太を担いで、防衛庁に突入を図った。後の叛旗派メンバーも多く参加) を主張した。筆者は関西で御堂筋占拠闘争に参加していた。この日に 中核・4トロ・ML 派・カクマルらは新宿闘争に向かい騒乱罪が発動 された。) 後、この対峙局面では70年安保闘争を戦えぬと直感的に 考えた部分は、大胆に赤軍派を準備し69年4・28沖縄闘争で、RG(共産主義突撃隊) で半ば公然と登場する。

ただし、筆者もそうであるが、69年4・28沖縄闘争の RG には、後の叛旗派の中大の会沢氏、松井 (五右衛門)、青学の柳らも参加して おり、第二次ブントの全フラクションが統一して参加していた。余談 だが、69年4・28の前日の夜、東京医科歯科大学でサーチライト に照らされた完全武装した第二次ブントの RG500名、中核派 10 0名 ML 派 50名の約650名の部隊 (4.28 闘争は6派共同声明 に基づく、共同行動であり、医科歯科大には少数であつたが、中核派と ML 派も部隊を出していた) の前で、上野勝輝 (京大、後の赤軍派) の、「日本帝国主義の侵略・反革命を日本の内乱・内戦へ」と火を噴くよ うなアジテーションには誰もが感動した。だが、これが第二次統一ブントの 最高次の武装闘争の最後だとはそのとき誰も思わなかった。

69年4・28闘争後、70年安保闘争を目前にして、共産同自体 の政治的、組織的統一が脅かされていったことは何度も強調すべきで ある。70年安保決戦に向けてすでに共産同のメンバーとして共同事 業として遂行される主体的条件は失われていた。後の赤軍派側は、現 在の階級闘争の局面は「革命的高揚から革命情勢への過渡期」であり、1917年ロシア革命の前にレーニンが指摘した武装蜂起の条件と同 一の条件が69年秋に現出すると予想し、秋の武装蜂起に向けての準 備を開始すべきであると主張した。

それに対して、後に叛旗派と称される側は、そのような情勢分析は「主観的願望にすぎない」と批判し、現局面は「後進国での革命的高揚 から革命情勢の過渡期であり、先進国での革命的前期から革命的高揚 期への過渡期」としてとらえるべきであると主張した。また、中央権 力闘争を持続させるためには、地域のマッセンスト、社会的拠点闘争 の広く、深い戦いが必要であり、国家を単なる暴力装置ではなく、国 家に単に武器を持って戦うだけでは国家には勝てない。

と主張した。

69年7.6明治大学和泉校舎で行われた社学同支部代表者会議、共産同の地区代表者会議を後の赤軍派が組織的に襲い、破防法で逮捕 状の出ている仏議長にテロ・リンチを加えた。結果として仏徳二議長 が官憲に逮捕された事件 (7・6明治和泉事件) で、赤軍系は組織内信 頼を失い第二次ブントから追放された。

筆者は69年6月三多摩で社学同に加盟しており、社学同支部代表 者会議への参加資格を得たが、当時、第二次ブントの分裂騒ぎや党内 闘争について全く情報も入らず、何が問題か理解できなかった。7.6当日には筆者は参加していないので、その影響もよく分からなかっ た。

その前の7月3日頃、神津氏から松本礼二を (松本氏は血友病で怪我 をしたら出血が止まらないので、誰かがゲバろうとしているとのあ いまいな情報であった) 防衛に行くようにという指示を受けた記憶が ある。

7月3日の会議には赤軍系の塩見たちが来ず、仏氏や松本氏と筆者は 初対面であった。当時19歳の私よりはるかに年上の連中の話が、「塩見の奴は昔から面倒みたのに歯向かって許せぬ」の類のグチばかり だった。私は第二次ブント指導部に対して、どうしょうもない古びた 奴らばかりだという感想を持った。

69年8月に開催されたブント第9回大会では、赤軍派は組織追放 され、関西系中央委員は全員が赤軍を生んだ責任を認めて坊主懺悔を したそうだ。ブントは赤軍派を「小ブル刹那主義」「召還主義」「軍事 力学主義」と批判し追放した。だが残存第二次ブントの指導部も殆ど が関西型政治過程論的発想に依拠しており、情勢分析の違いにより、赤軍派に「時期が早い、少し待て」という対応しかできない情勢認識 だった。

この赤軍派にまじめに革命を考えた第二次ブントの活動家の最も戦闘的な部分が、結集したとの評価が出ても不思議ではない。その 証拠に分裂直後の替え歌では「割れた、割れたブントが割れた。並ん だ、並んだ、叛旗・BL・情況、赤軍が一番きれいだなぁ」と揶揄され た。ブントには昔から、戦わなければ腐朽する、どうせダメなら最左 派で戦い切って滅びようという組織体質、思考体質が強くあるように 思える。

69年秋に向けて、ブントは「玉砕」をも辞さぬ決意で前衛的な「戦いの型」を提示することにこそ、ブントの存在意義があるのであ って、たとえその戦いで組織が壊滅するにいたってもそれは何ら恐れ ることでもないという「悲壮な

極左的観念」が広がっていつたように 思える。しかし、他方一方の耳には、「生活者の革命とは何か」「中央 権力闘争を持続させる戦いの再生産を可能とする道は何か」という声 もあった。

69 年夏段階での第二次ブントの内部フランクションは、在京関西ブ ントを中心とする赤軍派 (塩見・高原・八木・上野・田宮・花園・堂 山・物江・松平・望月ら)、神奈川左派 (旭凡太郎・村田ら)、関西ブ ント本体 (田原芳・新開・浅田・永井・田中・榎原・風巻ら)、さらぎ 派 (仏・佐藤・中井・岩崎ら)、ボルシェビキ派 (佐々木・荒・西田・ 米田・伊勢・城山ら)、赤軍系の竹内派 (中島二郎ら)、叛旗派 (三 上・神津ら) 情況派 (松本・一条・古賀ら) 等と細かくは 8 派に分裂 していた。元関西ブント系は、関西本体・赤軍派・竹内派・神奈川左 派・ボリシェビキ派と大きく 5 分解した。元東京ブント系は、旧 ML 系のさらぎ派、中大基盤の叛旗派、明治の古賀らの情況系と大きく 3 グル―プに分かれていた。

叛旗派は一貫して、赤軍派的見解を「主観的願望にすぎない」と批判 した。そこで「冷静に階級闘争の局面把握を」「全共闘・反戦青年委 員会の運動の質を市民社会の深部へ」「国家は単なる暴力装置ではな く、共同幻想の産物であり、無化する方法を検討」「社会的拠点闘争 で大衆の直接・持続・実力闘争」「社会的な統治能力の獲得」等々を 主張していた。

本文にもあるように、69 年秋 赤軍派で世界の果てまで観念は飛び、現実の場面で「死」を直視した私は、10・21 で赤軍派に見切りを 付けて反転して叛旗派に結集して戻ってきたのだ。

＋叛旗派のシルエット

思い出深い叛旗派各人のシルエットに入る前に、少し前書きを記し ておこう。69 年春に私が上京し都立商科短大に入学して最初に知り合ったのは、当時ブント三多摩地区委員会を建設中の神津氏の奥さんの文さんだっ た。 私は大阪の藤井寺から上京する際に、ブントに入って活動家に なると宣言しており、両親に反対されて、仕送りを断たれても勝手に 飛び出そうと考えていた。そこて調査

し首都圏にありながら授業料が年間で 9、600 円と破格に安く、新左翼の拠点でもあった都立商科短大に 進んだのだ。

都立商科短大は長いあいだ社青同解放派の拠点で、三派全学連の執 行委員も出していた。同大の入学式で日の丸掲揚に抗議し、入学式を 混乱させ、多くの新入生との討論会を始め、入学式を中止に追い込ん だ私に、早々と自治会執行部だった解放派からのオルグが入った。

と同時に学校の事務局に行くと、事務員の女性 (文さん) からメモの ようなものを個人的に受け取った。メモには「今夜 8 時国分寺の喫茶 店白十字で待つ」とあり、何だろうと思って行ってみると「横柄なお やじ」が居た。その「横柄なおやじ」が神津氏であり、私の活動と身 上調査をしたらしく、次の日から「立川駅」でビラくばりをやらされ た。

文さんは、学生運動の経験がない私に、ビラの書き方、謄写版の使い 方、学生大会の資料分析の仕方等多くの初歩的な活動の仕方を教えて くれた。また、解放派の諸君もセクト的でなく、元気がいい一年生が 入学してきたということで、自治会の書記長に立候補しろと道筋を付 けてくれた。同大の特徴は、教授たちには日本共産党員が多かったが、学生は昼間部・夜間部とも共産党・民青が居ないのか、登場してこないか分からないが、在学中に 1 人もみなかった。

69 年秋、学園祭で ふざけて、解放派と私たちは、日共と民青をおびき出そうとニセのス テッカ―を張り、まちぶせしていたが、ついに民青は 1 人もあらわれなかった。

自治会選挙でも私は 4 期連続、選挙によって 90% 以上の支持を 集めて当選した。大学は短大で二年で普通は卒業なのだが、私は四年 間も在学し I 期目は書記長になった、後には三期連続して委員長に選 出された。特に最後の期は、何と東京拘置所から立候補して大学自治 会委員長に選出されたのであった。

西部運が 1960 年 東大自治会の選挙でホリシェビキ選挙と称し て投票を操作したことを書いているが、私たちは一度もそのような操 作したことはない。時代の熱気もあったが、常に大多数の学生やサ― クルからの支持を受け続けていた。後に私の後任になる鍵和田 (後に 水落の妻になる) も選挙で大多数の支持を受け、二期連続自治会委員 長を務めたはずだ。

69 年 6 月大学立法粉砕の全学ストライキをほぼ 100% 近い、圧倒的な 学生の怒りの支持で可決して、全学生徒のほとんどが明治公園の全共 闘系の大学立法

粉砕闘争集会に参加した。

当時解放派のキャップだった原田氏が中央線の車内で、「おい、大 丈夫か？こいつらこんな恰好で火炎瓶が飛び交うとこへ行かして」と心配そうに言った。なるほどわが校の参加女性のほとんどがハンド バックとハイヒール姿だった。集会場についたら機動隊の検問がすさ まじかったが、「何をするの」という多くの黄色い声に機動隊も戸惑 って手を引いていた。

私が入学して以来、1969年度中は学校にはほとんど授業らしい 授業はやらせなかった。入学直後のオリエンテーションの段階で、カ リキュラムの選択権を学生に寄こせから始まり、学校当局はカリュキ ュラムや時間割りも組めない事態となった。高校時代からの活動家も 多く、折からの時代の熱気もあり、敵対する民青もおらず、教授の中 には、共産党なのだが中核自衛隊くずれや毛派系の教授もおり、総じ て学生への対応は強圧的ではなかった。

私が入学した69年度は、学内ではクラス委員を中心に連日のクラス 討論、学館自主管理、学生による自主講座がずっと続いた。6月の新 宿フオークゲリラの西口の集会にも行ったり、みんなで集団バイトを したり、さらには党派活動もしていたのだから、今から考えれば、ほ とんど寝る暇もない忙しさだった。若いからかそんな日々を、毎日楽 しく齟齬していた。

私は、学校の地下の保健室で寝泊まりし、多くの学生も、学生会館や ワンゲル部のテント等で学内に寝泊まりしていた。たまに、昼どきに は神津氏が、文さんもいることもあり、学校に来て解放派をからかっ ていた。学対であった、黒田氏も労働者のかっこうして、解放派に「おまえら、労働者のオレを何とかしてくれんだろう。だったら、金 をくれ」などと言ってからかっていた。

共産同叛旗派結成までの準備過程に関しては、神津陽『極私的全共闘史 中大1965~68』が最も詳しい。神津氏らは68年5月にブント三 多摩地区委員会を結成し、兵器生産輸送阻止実行委員会と三多摩学生 行動委員会の組織化を開始。11月に三多摩地区理論誌「叛旗1号」を刊行し分派闘争の推進を掲げ、全共闘運動から安保決戦まで闘い抜 き、70年6月11日の共産同政治集会で戦旗派と分離し叛旗派となる。

叛旗派結成当時の三多摩ブントの拠点は、電通大の寮で、福井・垣 内・坂田・関・備前・大野等がおり、三多摩地区委員会では、電通大 の坂田氏、備前君と農工大の岡田君と私は仲が良かった。

70年叛旗派結成にあたってつくられた遊撃隊は、実際は圧倒的な 戦旗派対策の内ゲバ部隊だった。神津氏が最高責任者であったが、実 践的には全体を黒田氏が統括し、坂田・高橋豊・武田・石井君あたり が牽引し、三多摩では私や節男や成蹊大島村・亜大桑田ら、中大は上 原・小柳、青学では柳・深沢・譲二、明学はデロ・加藤・人見ちゃん、成城の矢部君ら50名超の、学生中心ながら最強のゲバルト部隊であ った。

叛旗派は最盛期でも組織カードル約100名、党派ゲバルト部隊約300名、組織部隊500名ほどが本体だった。だがシンパ・大衆組 織活動家は多く約2000名程もいて、他党派が羨ましがった。その 中でも、特に、遊撃隊参加の若手メンバーは、その後の叛旗派の党派 活動、武装闘争でも最精鋭部隊で先頭をきり、組織活動でも叛旗派の 中枢各セクションを担ってゆくことになる。

私は、遊撃隊では中大の上原、明治学院大のデロ(菅野)とともに三 馬鹿大将と呼ばれていた。私は多分この三人が常に対戦旗派との内ゲ バで最前戦に立ち続けて目立っていたことに対するほめ言葉と思って いる。この三人が今も叛旗互助会の中核メンバーであることも、当然 かもしれない。

71年段階に入ると、叛旗派の三多摩地区は、石井君(中大・元新 宿反戦連合)をキャップに、私と節男君(榊 農工大)、えんちゃん(浅 川・東経大)、山本君(工学院大)の学生指導部ががっちりできあがっ ていった。特に自分に厳しく、僕たちにも厳しかった石井君のしっか りした組織活動の原則的展開により、三多摩地区学生組織はルーズな 組織体質を急激に変えていった。

私たち三多摩学対4人はたいそう仲が良く、北海道旭川に帰郷した 山本君も時々上京するが、他のメンバーはその後40年以上の人生を 最も近い関係で伴走してきている。特に節男君と私は共に税理士とな り、えんちゃんも経理畑に進み専門学校教師の道を歩んでいるが、仕 事上のつきあいもあり、現在でも濃密な関係を持続させている。この くらいで前置きを終えて、個別シルエットに入ろう。

石井君(吉岡)

石井君については、たくさんの思い出があり、活動家としての軌跡 も、三多摩地区からブント書記局と、ともに同じ現場で活動し、三上 問題や叛旗解体時でも一緒の政治判断、政治行動をともにしてきた。

石井君は、中大といっても、学内では理工学部の共産党系で、中大 ブントと

対立する立場にいたらしいが表立った活動はしなかったよう だ。その後、新宿フォークゲリラのころに街頭に出て、比留間先生が 組織した新宿反戦連合に結集するようになった。後に反戦連合の主力 部分は皆が叛旗派に結集づることになるが、人脈的には比留間先生、武田、氷山、ハルチらと近かった。

石井君について、一番印象に残っているのは、11・19新宿闘争での逮捕・自供問題である。当初私は全く石井君の自供を信じること ができず、あの革命的な原則的活動、鉄の組織規律を僕たちに叩きこ み、鬼軍曹と呼ばれた石井君が、敵の軍門に下ることを信じることは できなかった。電通大寮で共産党のスパイを摘発し、一晩中リンチを 加え、退学に追い込んだ石井君がよもや自供するなど信じられるはず がなかった。

立川の星監督の映画「続 塹壕」に石井君(吉岡)が警察官と渡りあっているりりしい姿の映像が何度も出てくる。ちなみにその映画では、私も含めて三多摩地区に結集している叛旗活動家のほとんどが映像に出て くる。私と自殺した星君の2人が地下の穴掘りと基礎の番線を結んで いる映像や、後の私の妻となるA子さんの18歳の頃の映像もある。

しかし、石井君が尊敬に値するのは、誰もが有り得ないと思った自 分の自供問題に、誰よりも率直に向き合い、試作を重ねた末に原則的 活動に戻ったことだ。保釈後も周辺の関係者の厳しい目にもめげず、活動を継続したのである。関係的には倫理的な活動家であった奥さん(おめめちゃん・新宿反戦連合)との関係がもっともつらかったと思う が、一身でその関係を引き受け続けた姿は感動的ですらあった。私は その後も一度たりとも、元指導者の石井君を不信の目で見たことはな い。

節男君(高橋)

節男君は叛旗派のモダンボーイであり、三多摩から南部地区に移動 したのは、実家が品川区にあったためである。節男君との思い出はつ きないが、彼のお母さんの実家の赤城山の牧場に遊びに行ったり、叛 旗解体後もスキーや温泉旅行にいつも一緒に行った。政治的にはあま り表に出て主張はしなかったが、節男君は当時の叛旗派では珍しく運 転免許の保有者で、結果として常に裏方・兵站部隊の責任者であった。 どの闘争でも堂々と包囲網を破り逮捕されなかったのは、度胸もよい が勘も冴えていたのだろう。

11・19新宿闘争の大量の火炎瓶は、彼が中心となって、農工大 から大量の硫酸を入手し、電通大の寮で造ったものである。(当時私 は三里塚で逮捕状が出て、電通大寮へ逃げていたので火炎瓶づくりを 手伝った)30リットルはあろうかというでっかい硫酸の瓶を電通 大の寮の敷地に埋めたりもした。当時の農工大には化学薬品があちこ ちにたくさん残っていた。余談だが、農工大のHさんが、入手中に硫 酸を誤って全身にかぶり大やけどしたのも確かこの頃である。

また、早稲田解放闘争でも朝起きたら、中大代々木寮の中庭に2台 のダンプカーがあり、みんなびっくりしていると節男君が夜中に入手 したとのことであった。そのタンプカーで夜中に道路工事中の工事標 識を大量に確保し、代々木寮で、対カクマル用の鉄パイプを鉄ノコで 切り、製造してもいた。後に私が早大で逮捕された際、取調官から、「道路工事標識を窃盗すると危ないぞ、鉄パイプぐらい自分らで買え よ。叛旗派だけだぞ、そんなことをやっているのは」と散々からかわ れて文句を言われた。

節男君がすごかったのは、早稲田闘争では、ほぼ毎日、鉄パイプや ブロックを入手してきたトラックに満載させ、私たちゲバルト部隊に 届けていたが、ある日トラックの周りを機動隊に取り囲まれているの に、「運転免許をトラックに忘れた」と言ってトラックに取りに行こう としたことがあった。

私は「あきらめろ。もう包囲されているから今行ったらつかまるだ けだ」と必死で止めた。節男君は全く平気で、機動隊に「すみません」と言って運転席に忘れた免許証を取って堂々と戻ってきたのには、正 直びっくりし尊敬してしまった。

叛旗解体のときも節男君らしいエピソードがある。彼は南部、上原 は中部、えんちゃんは三多摩、私は書記局と活動現場は違っていた。 私たちは「最後の場所」のような卑劣な派閥活動や分派活動等は一切 せず、連絡もとりあっていなかった。そのため、各人がどういう政治 的立場をとっているかも全くわからなかった。

結果として、叛旗解体寸前に蓋を開けてみれば、私と仲のよかった 連中はみんな一緒のグループ(解体再生グループ)に残っていた。その 時の節男君は、「俺はみんなから思想がないと言われ続けてきたが、ちゃんと判断してみんなの所に集合できたのだから、やっぱり俺でもちゃんと思想があったんだ」としみじみ言ったりしていた。何しろ節 男君は、説教じみた左翼倫理主義や階級意識形成論、啓蒙主義が大嫌 いで、理屈ばかりこねる奴は信頼できないという全共闘の行動主

義の 申し子のような活動家だったのだ。

また、節男君の自慢は吉本隆明の「試行」の「情況への発言」に取 り上げられたことだ。節男君が「吉本など政治的に利用したにすぎな い」「三上集会の時吉本をちゃんとぶっ飛ばしておけばよかった等々」と書いていたので、吉本は本気で怒って節男君批判の文章を書いた。

しかし、節男君は「こう書いたら吉本はこう怒るょなぁ」と初めから分かってやっていたので、予測通りの反論を読んで「吉本も思想は えらくても、現実感覚はたいしたことがない奴だな。叛旗派はその程 度の集団だと思っていゃがって」と話していた。

えんちゃん(水落)

えんちゃんは三多摩では私の弟分みたいな存在であった。新潟の三 条高校出身で、在校時にバリケ―ド闘争で補導されたバリバリの活動 家である。高校同窓生には叛旗では中大の大山(今井)、東洋大の丸山、立命館の O 君、解放派の T 君等々と多数の活動家がいるのだが、えん ちゃんは一目置かれる指導的立場であった。

東経大は当時の民青全学連の田熊委員長の出身校であり、共産党の 一大拠点校だった。だが三上氏の前の奥さんが事務員で務めており、三多摩学対であった黒田氏や農工大の岡村氏も学校職員に潜り込んで いた関係で、叛旗系の活動家も多かった。

中核派やベ平連等との新左翼統一候補として自治会委員長選挙に立候補したえんちゃんは何と共 産党を僅差まで追い詰めた。それに対する共産党の報復は激しく、報復テロでえんちゃんは国分寺近辺で歩けない日々が続いたが、71 年秋に叛旗派は東経大の民青を徹底的に粉砕した。

えんちゃんは生真面目な活動家であり、叛旗の理論も展開でき、未来の中心的活動家として嘱望されていた。71 年相模原闘争の現闘団 長をニチバンの金太郎と一緒に努め、三里塚 1・5 次収用阻止闘争、9.20 三里塚公団焼き討ち、10.21 立川交番襲撃(砂川闘争に呼応 して、立川北口交番に火炎瓶襲撃を計画。三多摩は節男君、えんちゃ ん、若林、埼玉は天野・K・Y、中大は上原・岡本・末高の 9 名が参加。

結果、上原隊のみが火炎瓶を投擲、現場逮捕された岡本が 1 年半の 長期下獄。)

にも参加している。その後の 11・.19 新宿交番焼き 打ち等々、叛旗派の武装闘争にはほとんど参加していた。私と共に 73 年の 6.14 早稲田大学解放闘争の被告でもあった。

三上問題や叛旗解体時でも一貫して私たちを支持してくれ、三多摩 地区委員会の責任者として、地区まるごと叛旗解体再生委員会に結集 したのはえんちゃんの功績であり、叛旗互助会の名付け親でもある。 解体以降は、ハルチ君や上原とベンキ屋グル―プの一員であったが、私が経理畑に行き、三里塚東峰裁判の判決後、税理士資格を剥奪され(裁判の判決文に、税理士として社会復帰を果たしているという一文 があり、検察庁が税理士会に、私の税理士資格を停止させろと要求し た)、専門学校の教師をやっている時、えんちゃんを呼び寄せた関係もあり、後半生は専門学校の教師生活を長く続けている。

近年、えんちゃんと私との親密な関係を知る人の多くから、「えん ちゃんが互助会にあまり顔を見せないのは、私との関係がまずくなっ たからか」と聞かれることがある。えんちゃんとは政治活動むろんの こと、私生活でもえんちゃんの奥さんは私の後任の都立商科短大の自治会委員長である絹さんである絹さんは私の女房のル―ムメイトで もあった関係でもあり、家も私が日野にいたころもえんちゃんは立川 と近く、一度たりとも人間関係が齟齬になったことはない。

ただ十数年近く前、元叛旗派の中枢で起こった感情のもつれに、え んちゃんが巻き込まれたことがある。その原因の一番の責任が私にあ るにも関わらず私が政治的に処理したことを、えんちゃんは人間的に 了解できず、今だに大きなわだかまりを持っているようだ。それでも 私との私的な関係は継続しており、えんちゃんのみんなに対するわだ かまりが解けることを願ってやまない。

神津氏とえんちゃんの関係は、なぜか神津氏がえんちゃんに好感を 持ってなかったこと、また、えんちゃんも神津氏に距離を置いていた こともあり、私が真ん中に入り、えんちゃんと神津氏の間をつないで いたという実感があった。

10 年ほど前ある企画を契機に海外旅行中の私の代わりにえんちゃ んが神津氏等に一方的に非難されたことがあり、私が帰国後に事態を 収拾し神津氏に「こんなことで叛旗互助会に亀裂を残さないでくれ」と言い寄り、神津氏も納得して鉾を収めたことがあった。

神津陽氏

記憶がはっきりせぬが８年ぐらい前に、神津氏が半年ぐらい自分が 事務局責任者なのに互助会への出席を渋ったことがあった。何で来な いのか連絡したら「健と顔を合わせたくない」と言われたことがある。 私は頭にきて、「子供もみたいなことを言っている場合じゃない。会 いたいとか会いたくないという世界ではないところで俺たちはつきあ って来たのではないか」と思わず怒鳴ったことがある。

神津氏は叛旗派の創始者で思想的結集軸であり、解体まで一度も活動休止しなかった最高指導者であった。私は叛旗解体まで一貫して神 津氏の政治判断を支持し、その政治指示のもとで動いてきた。反神津 の立場の人からは、神津家の執事、関東神津組の若頭と揶揄され、自 他ともに神津親衛隊を自負していた。ロベスピェールのサン＝ジュス トやレーニンに対するスヴェルドロフのような役割を自分に課し ていた。

しかし神津氏は、党派の指導者としては、原則主義で厳格な指導者 である点はよいのだが、組織判断においてはすべてに鷹揚な三上氏とは正反対で、人に対する包容力を表現するのが下手な人であった。そ のために余計な敵を作ったり、誤解を与えたりと、人間マルクスに近 い面がある。奥さんの文さんも「うちの人は党派の指導者向きじゃな いよ」とよく言っていた。小沢一郎に似ているのかなあと思う時もあ る。

神津氏との40年近くの付き合いでの思い出はつきないのだが、本人が表現したものも多いので、ここでは私の知る非公開の日常的なエ ピソードを何点か挙げておこう。

自治体労研で活動していた頃、杉並区役所職員で、早稲田のマル戦 だったMさんが、叛旗派に結集したいとのことで、年下の私だけでは 礼を失すると考え、神津氏にも来てもらおうと思った。Mさんは破産 したマル戦のことには触れて欲しくないとのことで、神津氏にも「絶 対に昔の党派活動のことを言わないでくださいね」と念を押しておい た。しかし、開口一番、「早稲田のマル戦だったらしいね」とズケズ ケ言うもんだから、どうしょうもないと思った。言ったらダメだとか、こんなときにそれはまずいという事が多すぎた。

駿台予備校の労働争議のときも、解雇された不当解雇撤回闘争で、一緒に解雇された東大の解放派だった高崎の解雇理由が「生徒とのス キャンダル」だったことで、あいつとは解雇の筋が違うと言うものだから、「そんなことを言っちゃいけないよ。共に組合で共闘して解雇撤回を戦っている仲間じゃないか」と言っていた。そんなこんなで、解放派のある筋から、「お前とこの親分を表に出すな。世間じゃ通用しないぞ。」とさんざん文句を言われた。彼らの文句の話が、割り勘」なのに勘定分を支払わなかったとかいう類の話ばかりで、私は謝るしかなかった。

態度が横柄で愛想笑いやおべんちゃらが出来ない神津氏は、生活面ではすこぶる評判が悪かったのだ。本人が今の年齢になっても、拾う・もらう・タダが人生モットーと言っているのだから仕方のない話だ。

仕事面でも校正は昔の魔歌の勝平さん、旅行会社も成蹊大の島村さ ん、弁護士事務局も中大の岡本さん、駿台予備校は慶応の福井君とい つた具合に知人友人の紹介仕事がほとんどだ。著述業や渋谷の教材販 売会社の出版社進出やその後の現代思潮社の後継話などは先方からの 依頼のようだが、それにしても私たちのように職安経由や新聞募集と いう仕事の探し方をせず、世間の荒波を受けていないことは確かだ。

叛旗解体以降に私らは必死の努力で生業を得たが、神津氏は思想的 にか生活方針からか一度も定職に就いていない。他の若手メンバーは 定職を得て年相応に生活のゆとりを得てゆくが、神津氏はガンとして 生活スタイルを変えない。この頑固さは叛旗解体までは若手メンバー の大きな心の支えで、信頼もされていた。だが市民社会へ着地する各人の社会的価値感と、神津氏の頑固さと の生活感覚のズレは徐々に拡大する。

神津氏は生活態度では面々の計らいは好きらしく、気を抜く時の呑み代は原則は割り勘だが、最後はある者が出せばよいとしていた。自分より困った者は助けてきたと言うが、アル中に近かった晩年の高槻さんが神津氏におごっているのだ。皆が定職に就いた今では、神津氏より貧乏な仲間はいなくなっているのだ。

以下に復元する様々な神津トラブル例は、どれも叛旗解体以降の何十年もの付き合いの中で生じた思い出である。互助会の活動では旅行や遊びでも割り勘を原則としているが、社会では中年の社会人として振舞う大半の連中と、定職のない神津氏との生活感覚のズレは厳然と存在し拡大していった。だが神津氏は確信犯的に生活レベルを上げず、自分の生活感覚に固執することが以下のエピソードの底流にあると考える。

昔、ハルチ、山崎、私、神津氏の4人で富士の河口湖に行ったとき の話で、私たちの中では「投網事件」と言っている。神津氏は、その ころ投網に凝っていた。事前に相談もなく大枚をはたいて4000円 程度の投網を買ってきて、私たちにも代金を分担させようとしていた。 私はくせになると困ると考えて、一番神経戦に弱いハルチ君に「絶対投網代金を払っちゃだめだよ」と強く言っておいた。

当たり前のごとく神津氏の機嫌は悪かったが、私たちは約束通り無 視していた。夕方、それに耐えきれなくなったハルチ君が「健さん。 俺、もう耐えられないから投網代分担金を払うよ」と言って白旗を掲げてしまい、神津氏の機嫌がようやく直ったという思い出である。

次に「熱海ホテル事件」なるものがある。夏の互助会の合宿で熱海の安いホテルに1泊したときのことだ。朝起きたら、神津氏が「誰だ。ホテルの冷蔵庫の酒を飲んだ奴は。ホテルの冷蔵庫の怖さを知らないのか?」と怒り始めた。私たちは早朝からうるさいので、朝風呂に逃げた。神津氏は、大浴場の中まで追ってきて、冷蔵庫の酒のことで怒 鳴っていた。部屋に逃げ帰ると、先日死去した大山さんが起きてきて、「朝からやかましいぞ。金の話ばかりしゃがって情けない」と大声で 一喝した。

その後神津氏は静かになったが、機嫌も悪くなったように感じた。 熱海の帰り、他のみんなは小田原の早川港に寄ってカニとりをした。 神津氏は、カニとりに参加したそうだったが、バツが悪く、きっかけを探しかねていた感じだった。昼食にみんなで行って、帰って来ると、神津氏は1人でカニとりをしていた。節男君が「神津さん。カニとり道具は自由に使っていいよ」というと神津氏はうれしそうだった。

同じく、「千曲川弁当事件」というものがある。これは、神津氏や 節男君、ハルチ君、大山さん、井上君、後藤君らと草津に行ったときのことだ。神津氏は手持ちのお金が少なかったためか、家から持って きた現物の酒や食料を担保にして場を切り抜ける算段だったようだ。 弁当代金を払えというと、家から持ってきた酒類を換算して、その代金を埋め合わせしようとしたのだ。

その後、頭に来た私たちは、もう物々交換には応じないと宣言すると、わかった今度からは現金で払うといった。夜、食事に行ったが、先に金を出せという私たちに、「そんなに俺が信用できないのか、大丈夫、絶対払う」というものだから、みんなも納得して食事した。いざ清算という段になって、神津氏が蒸し返して「この酒はそんじょそ こらの金で買える酒ではない。これを出すから少しは食事代金を引い てくれ」と言ったものだから、さすがのみんなも切れて、「ふざける な」と怒り狂った思い出である。

次に「下田の氷屋事件」がある。これは、節男君のおやじの別荘があった下田にみんなで行った時のこと。魚を釣ったので、氷屋で氷を 手に入れようとした時の神津氏の言。いざ代金と言われた時「水を凍らしただけなのに金を取るのか」と不満を言ったものだから、氷屋が 怒って110番をしょうとしたことがあった。あわてて私が支払って、その場を取り繕った覚えがある。

次に「草津の松村屋事件」だ。これは、夕方一足早く草津温泉から 帰るというハルチ君だけが、夕飯を頼まなかったことがあった。さて、夕方食事どきになって、やっぱりハルチ君も食事をしたいと言い出した。部屋に食事が運ばれてきた段に、みんなが、ハルチ君に食事を分 けてあげるから、現金決済で、ということなり、魚料理は200円、お新香は100円、味噌汁は100円等々、いちいち現金を支払いながら食事を分け始め、あまつさえ節男君と神津氏が残った50円玉を取り合ったものだから、仲居さんが、びっくりして私に小さな声で、「お宅ら、何処かの飯場からのお帰りですか?」と驚いていた記憶が ある。

1992年だと記憶するが、神津氏とハルチ君、私と妻とまだ小さ かった私の2人の子供、沼尾君の奥さんらとみんなで上原のいるタイ・サムイ島を訪ねる旅に行った時のことだ。神津氏は、観光地で写真を勝手に撮られて、1枚100円程度で売りつけられそうになった。 そんなものいらないというとタイの案内人は悲しそうな顔をして帰ろうとした。その人に向かって神津氏は、「そんな俺の写真があっても お前には邪魔なだけだろう。そこに捨てていけ」と言った。私はあわ ててお金を支払った。

再び、神津氏と上原と3人で、タイの南部の都市、ハジャイに行っ たときのことだ。神津氏がデパートでトイレに行ったので、上原が「おやじはうるさいからほって逃げようぜ」と言い出した。「上原、そんなひどいことをするな。神津氏は土地勘がないぞ」というと「大 丈夫、大丈夫。ホテルに帰ることぐらいできるって」。そんなかんな で私たちは神津氏を捨てて2人で街を楽しく散策した。案の定、次の 日から神津氏の機嫌が悪くなり、上原はどこ吹く風なので、私は神津氏の機嫌が直るようにと大分お金を使った。

神津氏との思い出はつきないが、世話になったことも付記しておき たい。私が

女性関係の訳ありで本当に困ったとき、神津氏が日野預かりという処置でまとめた。神津氏が懇意の不動産屋で自宅近くのアパートを手配してくれ、私は1年間ぐらい一人で謹慎生活を送ったことがある。人生で一番のどん底状態の私は、ちょうど大学受験に失敗し行き場のなかった神津氏の息子の陽君といっしょに不遇をかこっていた。

そんな人生の分岐点にいつも神津氏がいたように思う。私の人生の道行で神津氏が道標を果たしてくれたという想いがあるから、最近の神津氏の家出問題などで女房連中が神津氏の文句を言ったり、先輩筋から、「お前らが神津を甘やかすからだ」という類の話に、「そうは言っても」と神津氏をかばってしまうのだ。

神津氏よ。いったい何が起きたのだ!!

2011年3・11大震災の後に、神津氏は長年連れ添った文さんと別れて、家を出ることになった。同年7月ころに、私は上原、沼尾、後藤、福井、会沢さんらと神津氏宅の引越しと部屋の大掃除に関わった。私と上原はその頃、毎週休日は神津氏宅に通い部屋や倉庫の大掃除をしていた。私たち二人は、別れる真意が分からず、とにかく家を出るという約束が決まったと言うので引越しと大掃除を手伝ったのだが、本や荷物が八畳間と押入れに山のようにあるし、筋が分からぬことが多くて気分はすっきりしなかった。

神津氏と仲の悪かった隣家の文さんの妹に「同志婚と言っても、あっけないね」と嫌みを言われ頭に来た。後から聞くと地元の親族関係の揉め事で正論を言っても通らぬ事情も、神津氏の家出の引き金のようだ。

もちろん男女関係の内容は他人がとやかく言えるものではなく、40年も一緒に暮らした夫婦間の問題だ。しかし神津氏は最近『関係のかくめい 恋愛編』を執筆しており、自分の家出問題にも触れている。それは、自らの出処進退を明確にする叛旗派の原点に添っており、読み込んではいないが姿勢は評価はしたい。

しかし、私の直感的違和感は二つある。一つは、神津氏は生活問題について、今になって、「叛旗解体以降、私はみんなと同じ道をとらなかった」と語っていることだ。それはどのようなことを指しているのか不鮮明だが、多分、みんなのように市民社会に回帰せず、政治思想的帯域で生きてきたとの自負なのだろう。

だがこの領域では私もずっと神津氏に違和感を持っていた。特に駿台予備校の労働争議の関わりでだ。駿台予備校には最首悟、小阪修平、小野田譲二(元中核派政治局員遠くまでゆくんだ)、渥美文夫(第二次ブント書記長佐々木和夫)、山本義隆(東大全共闘議長)等新左翼の有名人も多くいたが、全員本名で講師をしていた。だが著作者名で予備校に入った関係もあるのか、唯一神津氏だけが駿台内でもペンネームを通してきた。

解放派からは一労働者として労働運動すべきであり、政治名を使うのはおかしいのではないかと指摘を受けたことがある。私ももっともだと思い、神津氏に、労働運動は生活の改善、権利主張が第一であり、職場の労働者とまず同じ目線に立つべきである。生活問題を一義としない労働運動は赤色労働運動化し、生活問題の政治化は叛旗の旧来の主張とも矛盾するのではないかと指摘したことがある。

そのころ同じ駿台予備校で講師をしていた沼尾君も、神津解雇問題が労働争議に拡大したきっかけは、論文科講師内での法学系主任の神津氏と論文科責任者の最首悟(元東大助手共闘)グループとの、論文指導方法のケンカから始まり双方が引けなくなったからで、本来の労働争議ではないという見方だった。

神津氏は70年の『蒼氓の叛旗』が全共闘世代のベストセラーになり、叛旗派を束ねる傍ら著述業も続けていた。その延長で定職に就かず何十冊もあまり売れぬ?本を出してきた神津氏には、生活利害を二の次にする精神の貴族的振舞いが多かった。

しかし、実際上の生活維持は奥さんの文さんにしわ寄せされて、生活上の破綻状態か60歳頃から続いていたようだ。神津氏は還暦以降は同居人になったと書いているが、子育ては終わったとは言え文さんからの同居人相応の金を支払えという要求はもっともな話である。

神津氏は叛旗派時代、職業革命家をつくらず、政治と生活を生きることを私たちに教え、かつ強いたのではないか?だからこそ、私も裁判闘争を抱えながら、職安に通い、職業訓練学校で手に職をつけ、黙々と市民社会で働き、来るべき長期下獄に精神の武装を解かず、耐え抜いたのではないか?

神津氏は自分なりに努力をしたのだろうが、実際の生活問題は文さんに預け、責任を持って対処してこなかったように思える。文さんもマルクスの妻のように、政治思想家として神津氏を許してきた責任があるように見える。そんな局面は叛旗解体以降の叛旗活動家に夫婦の危機として訪れ、必死で克服してきたのだ。

神津氏夫婦は兎小屋の跡地に六畳のプレハブを八個も勝手に連結して珍居を

るほど飛んでるカップルだったが、命懸けで金儲けをしたり生活を維持する守りの姿勢には弱かったのではと思える。

二つ目の違和感は、神津氏が家を出る根本的理由がはっきり分からぬことだ。女性問題は誰にとっても思想のネックであり、すねに傷があるものだ。三上氏がいくらごまかしても、その領域での数々のだらしなさは不信の種となっていた。

また、私も若い頃は何回か脱線があり、皆に助けてもらった。その領域での自己処理には原則的だった神津氏が『関係のかくめい 恋愛編』を書いた。だが昔のようなどんなに苦しくても家族を維持せよとのトーンは消えて、家族制度は必要なのか との根本問題に軸足が移っているようだ。

神津氏の家出は山頭火のような現世放棄だとの意見もあるが、そうだろうか。この十年間でも互助会に顔を出した新たな女性は殆ど神津氏の紹介だ。また五年ほど前に日本に入国した外国人女性を、経緯は分からぬが神津氏が助けたこともある。生活資力は弱くても、まだモテるし色気まで捨てているとは思えない。

だが仮に別の女関係の可能性があるとしても、生活態度は堅実な神津氏が70歳近くなって危ない橋を渡るだろうか？国民年金も殆どない老い先短い家出後の生活状態が、急に改善されるとも思えない。 家出後の反原発運動への接近や、DVD「ええじゃないか」発売など含め、真意がよく分からぬことも多い。

神津氏が家出の後に今後の生活維持が大変だと言うもんだから、多くの叛旗互助会メンバ-は、それなら生活保護を準備しろと助言した。 だが神津氏はそう考えてもいるが、田舎の老母が生きている間はでき ないと答えたもんだから、互助会メンバーは怒った。上原、えんちゃ ん、デロ、三木、節男、松井五、沼尾や私も大学は中退、家とは絶縁し てきたのだ。「何が、いまさら、おふくろだぁ」との怒りから、「何処 かへ行って帰って来るなぁ」「キルギスタンやトルキスタンの砂漠で 死んで来い」「多摩川でテント暮らしをしろ」などの声も出たが、さてこれからどんな生涯設計を考えているのだろうか。

最近では引越し騒ぎで靴箱が行方不明となり、引越し係に俺の靴はど こへ行ったと聞くもんだから、上原と私が「家族を捨てた人間が、靴の方が大事なのか」と怒り狂った。近頃の神津氏はトルストイの最後 の旅を気取ってるけれど、時折は子や孫とも接触し田舎にも一緒に行 っているようだ。

もとより私たちは神津氏に可能な限りの支援をすることを嫌がってい るのではない。詫びをいれて家に戻るのか、老母介護を軸に田舎に移るのか、生活労働を強化するか、スポンサーを探すのか、どんな道を選ぶのだろうか？今まで互助会で他メンバーにあれこれ言って来た のだから、神津氏には自分の余生でも自力更生の大道を歩んで欲しい と願うのみだ。

神津氏の家出後も、約束はよく知らぬが奥さんの文さんは日野の元の家に住んでいる。神津氏が私らより年長であると同じく、文さんも私の奥さんなど叛旗系女連中ではリーダー格だ。男組とは別にたまには女性連も集まって呑んでいて、神津さん家出は興味津々の話題のよう だ。文さんは叛旗系女連中では余計なことは言わぬタイプだが、国民年金も少ないなかで今後の生活展望をどう拓くかは私らも注目してい る。

上原（山森）

本論考中にもっとも多く登場する上原とは、くされ縁と言えるほど叛 旗派の結成から解体まで共に過ごし、解体以降も私と上原は神津氏の 助さん、格さん状態で両輪のように過ごしてきた。政治的にも私的に も、結果として、私と一番近い関係で生きてきたとも言える。上原は 叛旗武装闘争でもすべての戦いに先頭で戦いながら、逮捕歴が中大闘 争と6・14早稲田闘争だけであり、身体能力が高く勘もよく全領域 を見渡してメリハリの利く判断ができる驚異的な存在だ。上原は間違 いなく叛旗派の象徴的な人物の一人である。

最終的な76年の叛旗解体に至る流れでは、上原・高槻・高橋克っち ゃんらの中部地区が発端であった。上原らの代々木寮で育成された、濃厚なブント的運動体質が批判の的とされたのだ。批判者として出て きたのは吉本思想好きで組織中枢から離れていった立花さんの思想姿 勢に影響された連中で、彼らは行動主義と運動主義で思想は後回しの 中大的大衆行動パターンが嫌いだったようだ。

叛旗解体後、上原の富山市の自宅に節男君や神津氏と遊びに行った 翌年に理由は知らぬがお母さんが出奔、兄さんも離婚し家族解体に至 った。唯一、気を許し合えた父親も既に亡くなった。また1973年早稲田闘争で出所後に、自分自身の家族関係も一切断つと決めてその後はブレないで一人の人生を歩んでいる。

上原は叛旗解体後は、グズグズせず一人での生活自立に戻った。呑 み屋や電線屋や選挙屋など仕事を転々とし、タイ語を独習しサムイ島 にも15年ほど住んだ。帰国後のペンキ屋稼業も疲れてしまったのか、今は伊豆半島で月1万円で一軒家を借り切り、シルバーなどでの何でも屋で自活している。長い様々な職

歴がプラスしてかあちこちから仕 事が殺到しているとのことなので、その調子で元気でやって欲しい。

また、上原はキャッチフレーズづくりが上手だった。「チャップイ チャプイ」「世の中馬鹿なのね」とか「まぁいいか」とか短い単語で 時代相を表現する手法には、天才的才覚があった。私的にも上原は高槻さんと同じように「叛旗派にこだわり続け」、細い通路のような道 を駆け続けている。傍目にはかつての「特攻隊帰り、戦争継続者」の ごとく孤独な、折り合いのつかない人生を引き受けて歩んでいると思 える。

立花薫氏(福井)

中東部の上原や高槻さん、克ちゃん等は最初から立花氏と肌合いが 合わず、反目していた。私は現場主義で上原や高槻さんや克ちゃんと 感覚が近く、また三多摩地区の流れから電通大の立花氏との関係も近 かった。私と立花氏は近くに住んだこともあり、互いの子供の保育園も一緒だった。冷静に後から考えれば立花氏は上原たちが感じたように若干啓蒙主義的な要素があり、教養主義的側面もあったように思う。

叛旗解体のきっかけとなった場面を想起するたび思うことは、立花 氏は一度は深く入って幹部となった政治運動をかっこよく理由を付け て辞めたかったのではないか。誰からも後ろ指を指されず、心理的負担も負わず、辞めてゆく自己を正当化する方法を探し、党派不要論を 言い出したのだと今は私は考えている。

確かに、中核派のセンスに近いといころもあった克っちゃんや、そ の後のなりふりかまわぬ上原や高槻さんやの姿と、広告業界の第一線 ではなばなしく振舞っている立花氏の現在の姿は極端に違う。76 年の 頃の叛旗人脈の閉鎖的思想・生活状況で政治活動を続けていくことは、上品な立花氏には無理だったのだ。

案の定、叛旗を辞めた連中は「最後の場所」という政治を止めるに至った言い訳が詰まった文芸誌を何冊か出したら、消えてしまった。 残された被告や下獄者には、思想的に答えず何の責任もとらなかった。

数年前、間に入る人もあって、神津氏の了解も得て、立花氏と懐かしい吉祥寺で会った。立花氏は解体以降の自分の社会復帰の大変さをずっと語り、神津氏や私たちにも次の方針がなかったことを指摘し続 けた。

生活思想の面では立花氏は奥さんともども田舎の優等生タイプの上 昇志向が

残り、神津氏や文さんが歩んだ生活的自己放棄とは逆方向だった。だから叛旗解体後の前人未到で先は見えぬが試行錯誤で突き進 む冥府魔道のブント主義の道行きに、立花氏が思想的にちょっとつい てこれない感じは十分に理解できた。

だが神津さんも時代を同行した私たちも、修羅の道を好きで過ごそうとしたのではない。当時の叛旗派という組織の一員として、自らの言動と不可分な組織関係と不可避な組織責任を引き受けて来た結果な のだ。誰も好き好んでこんな茨道に入ったのではないことぐらい、福 井さんなら考えて欲しいものである。

私は最後に「福井さんも苦労したらしいけど、俺らは 10 年間苦労 したとか言える話ではない。東京裁判のような戦犯裁判を過ごして来 たんだ」と言っておいた。福井氏は自分が担当した学生運動分野で、自己責任の範囲で自己回収に努力したという。だが逆に私は自分の言動が招いた自己責任を遥かに超えた、組織責任を意図せず背負ってしまったのである。私の直接の組織上位者である立花氏が、自己が負う べき思想的組織責任から目を外し意識的に忘れんとする姿勢は醜いと 感じたし酷い話だとも思った。

叛旗派は外の人からどう見られていたか知らないが、神津氏が叛旗派思想の創立者であり、叛旗派時代は神津氏が最長不倒で組織的にも 行政的にも細部まで全責任を引き受けていた。これに対して三上氏は 組織実態とは断絶した、伝説化された外向けの名目だけの指導者だっ た。三上氏が本当の危機的局面で納得のゆく方針を出したり、組織的 指示を出したことはなく、節男君的に言えば「単なる神輿」に過ぎな かった。

叛旗派組織の骨格は神津氏が組織した三多摩地区委員会の指導部が担っており、初期は黒田氏、原氏、彼らの組織離脱後、立花氏が中心となった。坂田氏は 73 年初めころは消耗して、組織活動を停止していた。逃亡中の私に坂田氏が同情して、山形県のスキー場で一緒に住 み込みのバイトをしないかと誘ってきた。

その話を聞いた神津氏が坂田氏を「お前みたいな反革命分子に、健 と一緒に行動する資格はない」とめちゃめちゃに罵倒する場面があり、私は神津氏にそこまで言わなくてもと制止した記憶がある。

このように三多摩で神津氏にオルグされた彼らは、神津氏を叛旗創始者とする純粋な言いかえれば神津氏直系の活動家が多く、神津氏に何か批判的なことを公然と言うことなど解体直前までなかった。

比留間先生が後に、私と立花氏が反目し、最後はゲバルトを構えることにな

るとは夢にも思わなかったと言った。もちろん先生は神津氏と立花・坂田氏が反目することになることも、信じられなかった筈である。

高槻さんが亡くなった後に、10年ぶりに立花氏より「高槻氏への香典を送りたい。どうすればいいか段取りを付けて欲しい」と連絡が来た。互助会に呼んで神津氏をはじめ皆に会ってもらった。節男君は「久しぶりですね。吉祥寺の自宅を襲った日以来ですね」と相変わらずの毒舌を吐いていた。

立花氏は叛旗派解体期に自分が蹴落とした形の口数が少なくなった高槻さんの、自分とは真逆なその後の命運を伝え聞いて心底後ろめたかったのだろう。

だが立花氏が言った「最後の場所」とは誰のいつのどの場所なのだ、死んだ後に謝っても遅いのだ。逆にもし神津氏が立花氏のように一個人に帰り上昇志向に転じて名士にでも成り上がっていれば、間違いなく高槻さんは戻る場所も死に場所も探せなかったに違いない。

坂田氏(生島まこちゃん)

私見では叛旗派関係者の中ではタイプは違うが上原と坂田氏が一番破滅的な生き方をしており、私は、全共闘の末路の象徴とも言うべき彼らが好きであった。吉本さん的に言えば、私や克ちゃんは政治活動家として成るべくしてなったが、上原や坂田、節男君等は時代が要請した活動家のように思える。

坂田氏とは69年三多摩で一時、私の学対であったこともあり、大変親しく、逃亡中の私の面倒を見てくれたり、その後解体直前まで政治行動や政治判断を共有していたように思う。坂田氏は党派の活動家としては、ハチャメチャで特に他党派や成田の農民には蛇蝎のように嫌われていたが、他方日中の複素数グループの活動家等には大変好かれていた。

理由は簡単。坂田氏の言動は党派的ではなく、無政府的な個人主義の感じで、言いたいことを言うし、何よりも頭脳が明晰であった。特に三里塚では、農民の政治化、上げ底化に批判的で、戸村一作参院選に反対し激しく他党派や反対同盟を攻撃していた。叛旗現闘団の三里塚からの撤去作業を、坂田氏、山ちゃん、死んだ星君、私の4人で行った思い出がある。

坂田氏は活動家として、人間的に弱いところもあった。特に女性関係はめちゃめちゃにルーズであり、叛旗派周辺でも被害者が何人か出た。組織内の私たちは、関係修復のためにひどい迷惑を蒙った覚えがある。また弱っている人に対し厳しく問い詰める性癖があり、救対だった比留間先生等は、今でも飲むと「坂田を連れてこい。ただじゃおかないぞ」と言い出す始末である。

急に『最後の場所』に寝返った形の坂田氏とは、叛旗解体時にひどく対立した。だがその後、埼玉の私の家の近くに移ってきた関係もあり、バーベキューをしたり、行き来もした。坂田氏だけに責任があるわけでもないが、坂田氏の家族問題では、様々なとばっちりを受け、尻拭いもし、ずいぶんいやな思いもした。神津氏の上昇拒否とは違って、坂田氏は生活面でもずいぶんと破滅的であった。

最近では日中の活動家の相次ぐ死去で、葬式で会う程度であるが、あの坂田氏が「生きててよかった」と繰り返すものだから、「I人ぐらいは坂田氏の後ろ姿を見て育った人もいるのだから、ちゃんと生きてきたか考えた方がいいよ」と言っている。人や自分に厳しい神津氏や私を避け、表面は優しく接してくれるハルチや山ちゃんのそばに行きたがる、犬ころみたいなところがある。

頭脳明晰で、理論家としても活動家としても一流であり、天才的なところもあった坂田氏だけに、叛旗的な経験を現在の自分に引き寄せてもらいたいとつい思ってしまう。

ハルチ君(砂田)

ハルチ君と私の出会いもまた劇的である。70年の夏、私は全学闘争委員会のメンバーと集団バイトを立川の長崎屋でしていた。私は女性の下着売り場の棚卸の担当となり、作業はもう1人のおじさんと2人でやれということになった。そのおじさんと3日間ぐらい一緒に下着の数を数えたり、記録したりしていた。

バイトも無事終わり、お金をもらう段になって、お金と何か映画のチケットをくれることになっていたのを長崎屋の担当がケチったので、私たちは、ふざけるなと大暴れした。慌てた担当者は結局私たちにチケットをくれることになったが、私が、「一緒に働いていたのだから、このおじさんにもあげろ」といった。

バイトを終えて、私は立川南口にあった叛旗の三多摩事務所のルビコン社に行った。私がルビコン社に向かっていくと,何とそのおじさんも一緒についてくるではないか。ルビコン社で初めて石井君から、この「おじさん」がハルチ君だと紹介されたのだ。当時叛旗派は学生と労働者とは別組織で交流がなく、新宿反戦連合から三多摩の実家に帰郷し、ペンキ屋をしていたハルチ君は三多摩反戦連合に組織移行しており、日常活動では接触がなかったのだ。

ハルチ君は私との最初の出会いを思い出すたびに、これが全共闘かという感じで、怖いものなしの元気がよく、明るい、むちゃくちゃな活動家を思い出すと言っている。その後、ハルチ君は、私が三里塚9. 16戦闘後に地下生活に入ると、私と交代して砂川の現闘団の団長を務め、早稲田9.16闘争の被告になり、インフレ阻止闘争団長等を担い、叛旗解体から互助会へと関わってきた。

ハルチ君との思い出はつきないが、毎年、ハルチ君宅近くの狭山湖で行う花見も35年近くなる。正直言って、お互いに孫もたくさん生まれて元気でこの年まで生きられるとは思わなかった。

ハルチ君は小学校の同級生の教員の奥さんと結婚して、ペンキ屋一筋、上原やえんちゃんも一緒に仕事をしていた。今は娘の夫つまり義理の息子も、ペンキ屋の弟子として一緒に働いている。

ハルチ君との思い出も多いが一つは父親との愛憎物語だ。ハルチ君の父は旧制中学を出てプライドは高いが、競輪や酒におぼれ働かず、どうしょうもない親父で、70歳過ぎた頃にスナックのママに入れあげ、苦労をかけたお母さんと離婚するという話で、そのスナックのママとの話し合いにつきあった覚えもある。

ハルチ君の親父は戦争やハルチ君のお兄ちゃんの病気やらで、真っ当な人生に絶望したように見えた。父親は酒好きでたまに会うと面白い人だったが、その離婚後にはお母さんや兄弟姉妹間の仲は更によくなった。家族を捨ててきた私たちにとって、ハルチ君は古き良き家族の象徴のような存在でもあった。

ハルチ君はいつも何か悩みを持たないと不安なタイプで、特に例年仕事が雨でできない6月は情緒不安定になる傾向があった。ある日、一緒に食事をしていたら、急にハルチ君は「仕事がないんだょ」と泣き出した。私はびっくりして、「ハルチ君。奥さんは学校の先生だし、子供は立派に東京工大や中大に入ったし、何の心配もないじゃないか」と慰めた。

ハルチ君が家の近くでペンキを塗っていることを子供たちがちゃんと見ており、特に吉本隆明と同じ東京工大に入学した長男は、「お父さん。これからは俺が働くから心配するな」と言っている。ニートや引きこもりの多い子供たちの中で、苦労した人生の分だけ、ハルチ君にもいいことがあるな感動した覚えがある。

学生運動家上がりが多い叛旗派の中で、ハルチ君は常にしっかりした生活観をもった大人であり、常識人でもあり、みんな一目置く存在でもあった。都市インテリのひ弱なイメージを持つ人が多い叛旗シンパや他党派もハルチ君の存在にはびっくりするのである。

そしてハルチ君は外見が吉本隆明にそっくりなのも自慢で、私と2人して日比谷公会堂へ吉本さんを案内したことも遠い思い出である。

叛旗互助会の近況 2013年報告　　叛旗互助会幹事小山健

特筆しておくべきことは、神津氏の2011年夏の家出以降、互助会の副幹事を務めてきた上原の西伊豆移住だ。何が上原にそうさせたか不明だが、温かい土地で自然に囲まれて、その日暮らしをしたいと聞いた。象が死に場所を探すような事態になって欲しくないというのが私の気持ちだった。その上原に比留間先生が逢いたいと言った流れから、20年ぶりに伊豆下田・節男君の別荘での互助会合宿が8月末実施された。片道11時間？の渋滞も昔の仲間とのドライブでは時間が過ぎることも忘れ、話がつきることはない。

合宿も夜中3時頃まで、神津・ハルチ・私・上原・節男等で大論争だった。酒を呑みつつの徹夜の議論のテーマは「愛は何処へ行ったのか？」だった。愛を対幻想でも共同幻想でも、革命とも読み替えてもいい。

私はこの「叛旗武装闘争史」でさんざん言いたいことを言ったのですっきりしていた。武装闘争などと一番遠く見えた叛旗派と武装闘争の組合せタイトルは、吉本主義者に成り下がった多くの元叛旗派活動家へ「行為の共同性」を想起せよと言いたかったからなのだ。

叛旗活動家のほとんどが還暦を迎え、共同体験を自己意識として取り出し、開く作業が最後の課題となりつつあるのではと考える。自らの体験を秘匿せず、言葉にならない内部世界を、全存在を取り出せたら、それは1つのかくめいかも知れない。消えかかりそうなコミューンの理想(労働者の世界性、階級の死滅、国家の死滅)を捨てず、保持し、その出会いと現在の位置との不可避性を辿ることは私たちの義務である。

老後を迎えて各自の生活基盤も多種多様である。医者、社長、弁護士、税理士から生活保護予備軍まで多士彩々だが、出身階級階層を問わず、政治的・思想的出所進退を明確にしていく私たちの原理原則は不変だ。各自創意工夫しその経験や情報を共有する互助会は、だから今も健在である。

「死とは存在の共同幻想との出合である」という先人の言葉。そう であれば、どれだけ多くの友人・知人が共同幻想との出会いを求めて、かすりもせず、外れていってしまったのか。私たちは死だけ誰もが経験を一度はするが、死者だけはその死を共有することはできない。だ からこそ人は死を恐れたり、忌み嫌うことになる。自分の死が共同幻 想と出会う、共同体に出会うことを誰もが願い、ずれていく。問題は その共同幻想の中身である。私たちの共同幻想、愛は何処へ行ったの かは今、根源的な問いだ。私はこの小史にも記したがその回路を志向 し、その共同体的契機を探ることを放棄しない。

思い返せば、67 年羽田から 73 年のわずか 7 年間。30.000 人以上の 青年が逮捕され、現在も尚多くの死刑囚、無期懲役囚を抱え、国外逃 亡者もおり、死者も自死、内ゲバも含めて 500 人を下らない。神津氏の原稿名ではないが、『かくも無残な青春 !!』をも内包して、我らが「かくめい」は何処へ行ったのか？を問わずにはおられない。

正しい政治理論があったから私たちの戦いが生起したのではない。 戦いが先で言葉にできないもどかしさも抱えて、私たちは戦場に赴い た。叛旗共同体論は多分にそのような青年の内面を抱え込んだのだと 思う。

思い返すと叛旗紙の標語は大塩平八郎「若シ疑シク覚候ハバ我等ノ 所業終リ候処ヲ爾等眼ヲ開テ看ヨ」だ。

2014 年叛旗互助会・忘年会へのきれぎれの断章　　互助会幹事　小山健

残された時間は後わずか !! 自分しかできないことをする。 9 月互助会に元赤軍派議長の塩見考也 (一向健) 氏が参加された。2 時 間に及ぶ会話で感じた塩見氏に対する違和感は大きく 2 つある。

第一は赤軍派の総括が新たな綱領 (世界思想) で解決するのかの疑問だ？

第 二は塩見氏のモノの見方、切り口が 50 年前と変わっていない点だ。

日本の新左翼の復興を今も語る老人が多いが、可能性を持った新左翼運動は連合赤軍と内ゲバ事件で終わったという基本感覚が欠けてい る。SECT6 をもじれば、「二度と左翼、新左翼、共産主義、マルクス主 義、社会主義、前衛などという奴を信じるな」という心の底からの嫌悪感を現存する大衆に与えたのだと言う自覚が、責任者の塩見氏に全くないのだ。理想に燃えた青春の日々が、かくも無残な「仲間殺し」で終わった。これはただ赤軍派だけの問題ではなく、内ゲバに明け暮 れたカクマル・中核派はいうに及ばず、内ゲバと仲間殺しの両方をくぐった解放派にも同様だ。

社会に不正義や不平等が存在し、個と共同性が分断されている限り、人間の共同性への希求、関係への手さぐりの歩みは続くだろうが、少 なくとも社会主義や共産主義の名称では登場できないのは皮肉でも何 でもなく赤軍派の負の功績とも言える。赤軍派は新左翼とともに共産 党も社会党をも道連れに地獄の底へ運んでくれたとも言える。その当 事者が新たな世界思想 (さすがにレ - ニンはダメでマルクスらしい) で 共同性を追求すること自体が安直だ。

私見では関西ブントの人々は政治過程論で 60 年安保の総括をして以 来、東京の新左翼のように生活と政治をトータルにとらえられていな いように思う。結果、陰惨な内部せめぎ合いや内ゲバがブント系には 少なく、鬼っ子の連合赤軍の仲間殺し (ここでは決定的に京浜安保共 闘の影響が強い) が目立つのだ。彼らの政治への関わり方が武士と商 人、平民のような後進国型のエリート主義に似通っているように思え る。

多くの元赤軍派や関西ブントは政治活動の一戦から退いた後は、帰 農するが如く、商人、平民に戻り、政治・活動への沈黙を守った。彼らが今も饒舌に政治や革命を語り続ける塩見氏を嫌悪していることはよく理解できる。塩見氏は、まず一緒に苦労を共にした戦友との現在と過去との相互評価から再出発するべきなのだ。塩見氏は沈黙する彼らとの対話できる位置に身をおくことから始めることだ。これは叛旗 派を全否定し反原発爺に安住をめざす三上治も同罪だ。

塩見氏にしかできないことは、自分たちの運動がどのように生まれ、どのように発展し、そしてその理想が仲間殺しに帰結したかを具体的に明らかにすることである。目を背けたくなるような帰結から目をそらしているかつての仲間を一人一人を訪ね歩き、口をこじ開け、回想を記録すべきである。それが未来に起こりうるであろう革命を志す人々へ二度と同じ過ちを犯すことがないことへの警鐘になるだろう。 それが一時代を画して敗北した塩見氏の今後の仕事だろう。

私たちに残された心身健全な時間はあと正味十年位だろうが、バカ話のうちに時は過ぎる。各自が今後に取り組む仕事についても、忘 年会で話し合いたいものである。

あとがきにかえて

本論考は高槻さんへの語りきれなかった追悼の言葉であるが、十年 以前に書いた沼尾君への生きている弔辞が最初のきっかけだった。 ふと三里塚の 9.16 東峰十字路闘争前後の沼尾君との出会い、その後二人の孤独な長期下獄を見据えて支え合った日々の感謝の念を書き留めたこ とがあったのだ。

孤独な裁判闘争を支えてくれた叛旗互助会の同志、何よりも献身的 に被告団の苦労を背負ってくれた同じ被告の山崎君、そして共に戦っ た他党派の被告団の仲間、三里塚青年行動隊の現地青年農民の存在。

誰が言ったか忘れたが、「老後は困らない程度のお金と苦労を共にした友達だけあれば良い」という言葉。9.16 前後のわずか 10 日間の三 里塚と叛旗派に関わっただけの私は、裁判闘争と互助会を経て苦労した分だけ余りある多くの生涯を共にできる友人を手に入れることがで きた。「それだけで充分人生のつりあいはとれた」という実感の今日 この頃である。

2014.11.15 小山健記

＜付録＞

高槻修秘話

神津 陽

当日夜との急な連絡に関わらず高槻修君の通夜は 50 名もの関係者が 集まり、斎場の左右には叛旗互助会の花輪が並んだ。小山健君が我らの内の唐牛健太郎死すとの追悼文を書いたが、その中心軸はもう 35 年も前の記憶の数々だ。その点は通夜参加者各位も同様だろうから , 本文では私しか知らぬ最近の話を書く。

実はこの 30 年近く高槻君は行方不明の状態が続いていた。つい 3 年ほど前に、叛旗派解体以降 30 年を意識したのかどうかは分からぬ が、突然に高槻から私の郵便振替口座に入金があった。そこには長い 間の連絡不備を詫び、私の著書送付を申し込み、今後の指導をお願いしますと簡単に記されていた。

その後、池袋の安呑み屋で会った。手を大きく振り回す話し方や、大柄で威圧的な体躯やでかい頭は昔のままだった。しかし衣類は上下ともに着た切りだと分かり、衿口は汗が取れぬのか赤黒く汚れ、靴は後ろ側を倒して履いている。おまけに顔は酒焼けで、歯が一本もなく、持ち物は大型紙バッグだけだった。

まるで浮浪者じゃないかと言うと、金はあるんだが呑み代がかさんでねとニッと笑う。暮らし振りを聞いてみると、印刷所に二十年勤めてシルク印刷の仕上げ工で腕はよく、そこそこの給料は入る。また家はあるのだが子ども二人は独立し

妻は親や兄弟の介護で実家に戻ることが多いので、会社近くの三畳の風呂もトイレもテレビもない安アパートに住んで独り気ままに好き勝手に暮らしているのだそうだ。

酒の呑み方は昔と変わらず、つまみ類をどんどん頼むが手はつけず、ハイピッチで酒だけ浴びるように呑む。手付かずのつまみは私が食って店を出ると、一軒では収まらずハシゴ酒が続く。これはアル中の一歩手前だと事情を聞くと、池袋駅前で飲みつぶれて寝て二度も介抱強盗に持ち金を盗られたそうだ。

それから丸三年間ほぼ毎月連絡があって、合計50回ぐらい呑み代相手持ちでよく会った。大きめの衣類や本は随分と渡し、すっかり身きれいに変身した。

相談の主軸の一つは自分の動きと重なった叛旗派の総括問題だ。もう一つ家族対応の問題だったが、ここでは省略する。テレビは見ないが、模索舎や古本屋には通って資料は集め、繰り返し読んでようやく考えがまとまり話が出来るようになったと言う。

一年ほどして漸く精神状態も安定してきたので、2008年と2009年正月に日野の拙宅とその周辺で上原、今西、会沢、松井五、三重野などと呑んだ。2008年末の私の『極私的全共闘史　中大1965~68』（彩流社刊）出版記念会にも出席してくれた。大久保の互助会例会にも二度出て来て、本人が言うには互助会復帰へのリハビリ途中だったのだ。

叛旗の総括問題では『叛旗＜解体＞』なども全て読んでいて、三上治や立花薫らとの本筋の違いは明確だった。ただ中東地区独自雑誌発刊への署名が誤解を生んだ点では、不徳の致す所と反省していた。行き付けのカラオケ呑み屋の姉さんに頼んで、私の刊行物などは手数料を払ってオークションでも買っていたようだ。

高槻は愛情深く同志を大切にする信義一徹のタイプで、そのためか内輪もめも組織内部論争も嫌いだった。

69年11月の秋期安保決戦で逮捕された後に面会に行くと、中大でも進退で動揺したり情況派と二股かけた奴の噂は聞くが私は大丈夫です。純粋叛旗派なので心配しなくてよいですと、胸を張って話した。

高槻は叛旗解体・高橋克行下獄・東峰十字路裁判勝利の後は、一番近かった中部君はじめ中東部の叛旗派活動家とも絶縁していた。日本的人情では異様だが、宇和島では偏屈者の常である。初代藩主の伊達秀宗は不仲の弟と27年も会わなかった、私の同級生の兄も学生運動で親から絶縁され死に目にも会えなかった。

その点で宇和島藩士族末裔の高槻修の孤独癖も不思議ではなかった。かくいう宇和島出身の私の息子も家出宣言から二十年近く音信不通だが、住所は知っている。ひょんな縁で高槻の奥さんと話す縁があり家は出たが住所は分かるとのことで、私は戻るまで放っておけばよいとアドバイスし高槻の住所も聞かなかった。

ペルーで殺された赤軍派若宮正則は、私の親父の九島中学校の教え子だった。海辺部からは京浜安保共闘に一挙に5名参加していたし、弟の同級だった早大生は未だに行方不明だ。生活は自立し声を掛けぬ市内の叛旗活動家もいるが、身近に仏派の呑み友達もいる。

高槻は物心つく頃から埼玉育ちだが、そんな宇和島的資質は残っていた。問題はその後20年の闇だが、稼ぎがあって暮らせて呑めていれば、何をやっていても年月は経つのだ。だが高槻は松井五に歯医者を紹介されてもついに行かなかった。何よりアル中が心配だったが、市販の痛み止め薬を大量に飲んで朝はシャキっと目覚めて会社は無休だと威張っていた。六月はじめに締まりが悪くなり小便も大便も回数が増えたと相談があり、私は前立腺肥大だろうが大便の方は分からないと答えた。

六月下旬に症状が悪化し日大病院へ救急車で入り、即時入院だと告げられたそうだ。そこで私は息子さんへの連絡を勧め、一週間ほどして会社の近くの池袋病院に入院した。ガンだと告知されたときに母親の最期を思い出し自分もガンで死ぬのかなと自問していたが、入院一カ月余での予期せぬ死だった。

第一回の手術は予測どおり前立腺ガンで、院長に棒を取るか玉を取るか両方取ってもよいかと聞かれたそうで、私は棒は残せと勧めて本人も納得しカタ金を選び手術はうまく運んだ。だがその直後に奥の大腸・直腸部にもガンがあり、これは人工肛門を付ける難手術となるので家族で検討して欲しいとの話だった。

ところが院長の一存で七月下旬に第二回手術を行い、八月一五日には仕事復帰の予定だった。母の介護に田舎に戻った私が高槻と電話で話したのは、手術後の人工肛門を付けたときまでだ。その後に腸閉塞となり、更なるガン転移が告げられ、これではダメだと家族が考えて一八日に転院を決めていたと言う。

高槻の奥さんから一三日に帰省中の宇和島に、病状が悪く転院予定との電話が入った。虫の知らせを感じた私が帰京した一八日の朝に電話したら、早朝四時に死んだと報告された。すぐに南池袋斎場での葬儀予定のFAXが入り、慌て

て奥さんが喪主の一九日夜の通夜・二〇日朝 の告別式を叛旗派各位に通知した次第だ。

高槻修がアル中に近く好き勝手な浮浪者同然の暮らしだったことは、家族はむろん親戚も知っていた。だがガン入院で酒は抜け禁煙状態となり、逆に頭の回転は速く戻った。本人は無軌道な暮らしを痛く反省 し、生活態度を改めると誓い、家族が人工肛門処置に便利なアパート も借り家具も揃えた所だった。

奥さんの話では、私が「映画・連合赤軍」を批判して『情況』に書いた「かくも無惨な青春!」が近頃では一番面白かったと言ったそう だ。

高槻の親父は教員だったが長く中国に抑留されていた。宇和島で帰国者住宅に住んでいた高槻も古い左翼観に影響されていた部分もあ ったので、私もそれでようやく安心した。

高槻は頑固で家族ともぎくしゃくしていたが、入院後は急に話が通 じやすくなったそうだ。また宇和島出身の兄弟姉妹とも音信不通状態 だったが、入院後は全員と旧交復活したと聞く。最後の電話の折に私 が「ガンが家族や親族との関係修復になるとは皮肉だな」と言ったが、これで満足だったかも知れない。

(2009・8・20)

高槻とともに戦った中大時代

会沢伸憲

はじめに

僕は 1966 年に中央大学第二部法学部法律学科に入学した。クラスの 三割が公務員、三割は一般会社員、残りは僕のように昼間の法学部を落ちた連中で、ほとんどの人が司法試験を目指していた。今は大流行作家になっている北方謙三も僕と同じクラスにいて、ともにデモなど で戦った時期があった。

そのころの中大二部夜間部自治会は民青で、学友連 (二部のサークル連合体) は革マル、共青 (60 年安保時に二部自治会を握っていた構改系)、民青の三者の寄り合い所帯だった。僕は共青残党が主の第二 歴研に入り、明治維新の勉強を始めた。他方で学館闘争、原潜闘争、砂川闘争には個人として参加していた。

その第二歴研は 3、4 年生と別のグループで大石和夫が活動していた。後に彼は緑ヘルの共学同を作り、全国組織の責任者となる。歴研では後に三多摩叛旗となる宇田さんが 1 番の理論家で、何事も原典主義で説明してくれた。また 僕の憧れのマドンナもこのサークルにいて、第二歴研に足を運んで顔 を見るのが楽しみだった。

高槻との出会いと二部学生評議会結成

67年4月と記憶するが、僕は薄暗い中庭で日課のアジテーションをしていた。後ろでナッパ服を着た新入生が近寄って静かに話を聞いていた。彼が毛沢東は好きかと聞くので好きだと答えると、彼は明日から一緒にやりたいが参加していいかと問うので、ウンと返事をした。

この学生が高槻修で、その日から67年68年69年の三年間も、僕と高 槻は毎日のように一緒に様々な闘争に参加した。僕と彼は毎日顔を合わせ、戦っていたのに、深い話をすることは殆どなかった。決めたこ とを共に行動することが信頼の証で、話はあまり必要なかったのかも しれない。

67年秋の10・8後に、僕らは街頭闘争に個人で参加することの限界と学内闘争への組織的参加の必要性を感じて、毎日夜の中庭でアジテ ーションし、仲間を募り、集まった連中で勝手に二部学生評議会をつくった。それ以降の都内の街頭闘争の先頭には、党派の旗と混じって二 部学評の旗が翻ることになる。

当初のメンバーは会澤、高槻、三重野、秋田、須藤等で、後に学館で神津たちと付き合いのある城村や大和田さんも参加した。4トロの平野(現ロフト店主)や協会の小菅もメンバーに入った。

戦うことが目的なので理論はお題目程度の寄せ集めだったが、常に宇田さんがヒントをくれた。高揚する時代の波に押されてか奥、中山、島村等へメ ンバーは急速に膨れ上がり、活動家集団としては都内有数の規模となっていった。僕達の関係は指導―被指導の関係を追放した、闘いをともにする共同行動体として成立していた。

社学同に加盟し中大社学同二部支部へ

たしか68年に僕は社学同に加盟した。社学同の誰と話をしたかは忘 れたが、歴研の先輩の宇田さんに相談したことは確かで、社学同に入りたいと話したら段取りを付けてくれたとの記憶はある。

闘争はセクトがやる、指導するものだと多くのセクトが思っていたなかで僕らのノンセクト集団は奇異だったのかも知れない。革マルは僕に二部学評は解放派か中核派かブントか?と、折に触れては聞いてきた。僕は青年インター、革マル、共学同の集まりにも誘われて参加したことが あるが、あまりピンとこなかった。

中大昼間部の主流派が社学同で学園闘争を主導していたこと、全学連が再建

され街頭闘争でヘルメットの色分けが始まった等の理由があったかもしれない。ただ、宇田さんから第一次ブント、烽火、マル経ス主義戦線等の諸機関紙等をもらって、その解説を聞いていたのも判断材料になったと思う。時代の流れを同じように読んだか知らぬが、僕の数日前に他党派の青年インターの佐々木や井上も社学同に加盟し ていた。

中大社学同では同年代の前田、田村、原島との付き合いが主で、年長者の三上・神津らの記憶は薄い。中大闘争は前面で戦ったが、方針決定等には関係しなかった。いずれにしても学館の1室を二部学評が 拠点として確保70年決戦にむけて突き進んだのだ。同じ神田の明大、専修の二部との交流は活発だった。

明大上原から夜学連を再建しようという話が来たが、僕は名前が嫌だといったら、そうだねと夜学連再建はご破算になった。二部なので 労対の仏さん、中電の前田さんとの交流があり毎年2名程度のメンバ ーを全逓に送っていた。中大では平野が先遣隊で入り、その後に高槻 の全逓への派遣要請があったが断った。

正月明け頃からか1週間単位で三里塚現地で生活していた記憶がある。商学部社学同の佐々木と何度かは一緒だった。団結小屋に寝泊りし朝バイクで赤ヘルメットで武装して村を回り、最後に戸村一作委員 長の家により異状ありませ報告する繰り返しだった。4月前のある日 の夜どこかの倉庫に呼び出され、マル戦を追放しブントが前衛党にな ったと学対の山下(医科歯科大)から講釈をきかされた。

1968年・全共闘運動の世界性?

1968年は全共闘運動の最盛期だが、世界中がベトナム反戦闘争や大 学改革など新左翼運動で沸き返っていた。その時代の刻印を受けた武 装闘争は、敵味方の気持ちと気持ちのぶつかりあいで決すると思えた。 機動隊と連日ぶつかっていたが、相手を殺そうと思ったことは当時の 誰も無いはずだ。闘争の中で「武装」するがそれは意思、気持ちの表 現だ。僕の闘いの中で、大衆運動の中での党派単独武装の必然性はゼ ロだった。

僕と高槻は誰よりも数多くの戦いに参加し、時代水準の感覚だけは 誰にもまけない自信があった。だが党派闘争、党内闘争、党派理論は そうではなく自動律が働く。赤軍派などのマルクス・レーニン主義の 前衛党論は時代感覚を抜きにすれば宗教化するだろうことは、闘争を 重ねるうちに肌感覚で分かってきた。

全共闘運動の世界性を考えるときに思い出すことがある。バリケー ドの中で生活していたある日、目がさめると、目の前に真っ黒い顔があ った。やさしい目をした彼は腹が減っているようでカンズメを二人で 食べた。CIA のスパイがバリケードに入ったと騒いでいたのでバカじゃないのと思った。いろいろなドラマがあったバリケードのこんな生活は感覚の革命であり、水戸生まれの僕でも自分達は世界につなが っていると感覚できた。

ちょうど 68 年の 8・3 国際反戦集会の前頃で、夜になるとブント「国際部」の中大美研の工藤ペテンスキーがドイツ、フランス、アメ リカの「新左翼」SDS、ブラックパンサー等に学館から電話してい た。

8 月の中大講堂では米国など海外代表も加わり、過去のインター的結合を批判し「第五インターナショナル」結成を目指した国際反戦集会が開かれた。おそらくブント全体がまとまって最も輝いていた時期だろう。高槻は「全世界を獲得するために」のスローガンがとても気に入って、立看を出すときはその文句をいつも書き込んでいた。

防衛庁に突入し無線発信した

中大ブント指導部の複雑性をみたエピソードを記しておく。防衛庁闘争の 前日の 68 年 10 月 20 日に景気付けにと 10 名位で防衛庁に突入、1 階の無 線室を占拠した。屋上へ行こうとしたメンバーもいたが結局一番近く の部屋に突入たが、これが無線室だった。バリケードを築き、インタ ーを歌い終わり、はて次に何をしようと思ったら誰かが無線機を壊そ うといったら、それは罪が重くなると指摘したのでやめた。

僕はアマチュア無線をやっていたので、いくつかの無線機をスタン バイし全国の基地に向けて社会主義学生同盟は防衛庁を占拠したむね 発信した。中大二部から僕と奥、中大昼から松井邦男ともう一人、後 は明治等だった。防衛庁突入は高槻が自分がやりたいと申し出たが、結局僕がやることにした。

叛旗に近かった松井氏はこの方針は間違っているが、やらないで 批判してもダメだ等の話をし、最もだと思った。それが三上・神津の グループの存在を意識した最初だった気がする。この闘いで僕達が逮 捕される際に自衛隊員が殴りかかってきたが、機動隊はこれを阻止した。 ぶつかり合いの水準はこの辺だったのだ。

自分の何かを捨てるかのように戦った二部学評時代には、戦後の 擬制を撃て、団塊世代の受験戦争、家族帝国主義、様々な言葉が飛び交い、僕らもそれらの言葉をアジテーションで使った。言葉の内容は 話していてもよくは分からなかったが、苦しくも開放感のある学生時代であった。僕と高槻は、中大二部で最も数多くの闘いに出張った。そこで時代の感覚、闘争の手段と方法のセンスを磨くことが出来た。

世界赤軍の可能性はあったのだろうか。『2 つ 3 つのベトナムを』が 合言葉の時代に、ベトナム解放戦線の時代に僕と高槻は二部学評・社 学同でしゃにむに闘った。世界革命に至る可能性はあったかと自問す ると、1968 年の世界的な時代の激動の渦中では武装の水準が幻視 できた瞬間は、たしかにあったような気がする。だがブント赤軍派が 世界赤軍を言いだしたのは、68 年高揚の終了後の焦燥感の産物だと思 える。

69 年安田講堂陥落直前に高槻の作った二部社学同旗が振られた

「最後の旗が振られています。社学同中大二部支部と書かれていま す」。社学同に入ってからも僕達は党派的指導は拒否していたが、1969 年 1 月の東大闘争決戦をめぐって前田や久保井らと対立しつつ指導を受け入れ同意したことがあった。その結果の象徴的表現が、二部支部の旗のテレビ放 送だった。ここで初めて事情を書いておく。

僕達は法政のプロ軍と付き合いがあり、民青が立てこもっている列品館を一緒に奪還しようとの話がまとまった。学館に戻り出撃の準備 をし、昼自委員長の原島に一緒に行こうと話をしたら OK だったが、前田や 久保井へと話が伝わってブント学対ではダメとの決定になった。

それでも高槻と出撃準備していると、名前は忘れたがブント学対が飛んで きて、中大二部だけが行けば、ほかの社学同は日和ったと思われるからゆかないでくれと言うので、仕方なく同意した。プロ軍の法政の戸 村は怒り狂い、昼自の原島から戸村が会沢を探しているよとの伝言が あった。メンツがつぶれた先方の事情も分かるので、仕方なくその日 は学館地下のフロの浴槽の中に隠れていた。

僕も高槻もまだ東大決戦に思いがあった。神田カルチェラタン闘争方針が定まり東大には行かない、合流できないと分かったとき、高槻がつくった二部支部の社学同旗を明大二部の後に赤軍となる上原に渡し、俺達だと思って振ってく

れと頼んだ。

上原は義理堅く、安田講堂屋上で逮捕される直前にこの旗を振ってくれた。この中大二部社学同旗が落ちたとき、全国から注目されていた安田講堂決戦は終わったのだ。

69年安保決戦と叛旗派・情況派の分裂

69年秋期安保決戦前に、僕は個人的な人間関係の絡みで荻原邦之、山本啓、高橋滋らとブント学対として活動することになる。ある闘いを前にして精鋭部隊を作ってほしいと頼まれ、自分が学対として担当していた外語、独協、埼大等から10名程度の人選をし、日光の山奥で軍事？訓練を開始した。

東京に戻り奇抜な？方針を聞かされ、僕は断った。すると何をするかはお前にまかす、失敗したらキューバにすぐに脱出させると話が決まった。この流れは後か考えると情況派の動きだったのだが、指示はみな口頭であり私はまったく察知できなかった。

僕は69年11.17蒲田闘争でまた捕まり、今度は高槻も一緒だった。1年間の東京拘置所暮らしをした。70年のある日ラジオ放送が止まり、新聞は全部真っ黒に塗られていた。だが朝鮮、旅客機などの言葉の断面から、ハイジャック闘争のおおよその内容はわかった。

68年夏にいろいろな偶然でブント会議を襲って仏議長を官憲に逮捕させるに至った「赤軍派」数人を捕まえて中大に軟禁したことがあり、いろいろな雑談のなかで彼らの革命的ロマンを何度も聞かされた記憶があったからだ。ともかく69年で京極浩二郎の中大社学同時代は終わった。高槻は二部学評で最も勇敢に戦った活動家であり、二部社学同や二部学評の指導関係は自ずと高槻が代替わりすることになった。

さて東京拘置所から出てくると、僕の知るブントは情況派と叛旗派に分かれていた。分派闘争があったのだろうが事前に情報はなく、ともかく知らない間に分裂していたのだ。私が動いた学対仲間は後で情況派だとされたが、僕には「情況派」だとの実感はなかった。だからオルグ関係を含めて、僕は一度も「情況派」と言う言葉を使ったことはない。

僕の知る叛旗系ブントグループは松本礼二と三上治がトップで、学対グループ、中大グループ、三多摩グループで活動していたと記憶している。

要するに戦いの調整機関が「党」と言うていどの理解だったが、その「党」が分裂したのだ。中大は松井・岡本ら叛旗系や前田・田村ら関西系、久保井・仏系？が出たあと、その下の年代の連中が先述のブント学対？となったのだ。結局何が問題で分派したのか、僕はブント学対という指導的位置にいたのに、今でもよくわからない。

僕は拘置所を出たら雑誌『叛旗1号』を軸に活動しようと考えていた。出所まもなく呼ばれた学対会議で初めて情況派グループだと分かったので、僕は『叛旗1号』神津共同体論の考えに賛同していると答えて、中途退席した。

一連の過程は何が問題だったのか、学対責任者の池亀も説明せず今も判然としない。ただ、自分たち上記の中大ブント「学対メンバー」は、旗印を鮮明にした僕を除いて、全員が戦列を去り組織から離れた。彼らはこの叛旗・情況分裂劇で、心と言葉を失ったのだと判断する。

拘置所を出た僕と高槻は戦いの蓄積が作った兵士の感で、戦いは後退戦に入ったこと、ここでは「思想」が不可欠の糧であることを直感した。高槻が何度も自問し叛旗派であることを確認し、死ぬ間際に神津文書を頼りに浮上してきた秘密の理由はそれだった。

後退戦に生きなければならない戦士は「思想」なしには生きられないのだ。叛旗派の思想は原則主義的だったが、運動には行動主義が内在していた。今西、上原、デロらの優れた行動主義が内在していた。行動主義は高槻が生き延びることができた鏡でもあった。

拘置所を出てから70年代の高槻は、上原たちと中大代々木寮を基盤に闘い、叛旗派の仲代文人になり、更にもう一つ大きな時を生きることになる。彼は僕には後退戦のなかの世界赤軍兵士のように見えた。

僕は時代感覚を喪失した後、仕事に就き労組運動など別な形の闘い生活を模索することになる。だがしばらくした70年代半ばには、別の場所で戦っている高槻もまた何か基軸を見失っているようにみえた。

惜別に際して

何十年も音信不通だった高槻はその間左翼文献を読み続け、神津の文章がよかったといって互助会に顔をみせてくれた。神津の文章があって高槻と再会で

きたのだ、本当によかった。

久しぶりに朝まで呑んだ後、始発電車で別れたが、僕たちはあまり話はしなかった。彼にマジに質問されても、僕は何もいえないとの思いがあった。時代の中での行動は、個人に全て回収されるわけではな い。だが神津陽の表現は、伝えきれぬ高槻の心のなかの想いをどこか で回収していたのは間違いないだろう。

三回ぐらい集まりの中で高槻と会い、一般的な話をした。彼は私の仕事の様子を聞いたのか「京極さん、わが世の春を楽しんでいるようだね」と笑って言った。僕は「そうかもね」と笑って答えるしかなか った。

二人だけで話す勇気は、まだ自分にはなかった。高槻の過酷な 20 年 を思うと僕に言葉はない。誰も、それぞれの人生を生きる以外ないと してもだ それでも、少しずつ残された生を共有しようと思っていた が、急に高槻は癌で死んでしまった。さようなら我が心の中の革命戦 士、高槻修よ！

2009・12・5 会澤伸憲記

李 健裕 死去

菅 秀実

学習院大学全共闘で叛旗派の一員であった李健裕が 2007 年 6 月 15 日 に死去した。以下は、学習院大学全共闘でともに戦い、葬儀に参列した友人としての報告である。

大学入学まで

李健裕 (リ・ケンユウ) は 1950 年 7 月、米子市で裕福な在日朝鮮人 一世夫妻の次男として生まれた。米子では、佐田山健裕 (さだやま・たけひろ) と名のった。米子東高校時代は卓球部に所属、北杜夫など を愛読する高校生だったが、3 年生の時、ある事件で学校当局を批判 し停学処分を受けている。

69 年 4 月、学習院大学文学部哲学科に入学。 大学入学を機に朝鮮名 (日本語音読み) を名乗る。だが朝鮮語の読み 書きは全くできなかった。兄 (明治学院大全共闘) の影響で、吉本隆明やマルクスを読み始める。

活動家として

学習院大学入学時より、いち早く活動を開始。69年10月、学習院大学哲学科共闘会議による輔仁会館占拠闘争を闘う。同年11月、革マル 派の一元支配を突破した学習院大学全共闘の結成に、一年生の中心的活動家として参加。同年同月から翌年2月までの文学部長室占拠闘争、70年11月の院祭粉砕闘争などの実力闘争を先頭で闘う。

また、70年以降の入管闘争には当事者としてコミット。71年~72年の全共闘分裂に際しては、1、2年生活動家の中心的存在として全共闘存続に奔走。この頃、同志(黒沢、北岡)とともに叛旗派に結集(パ ルタイネーム・池田)し、全共闘をひきいて学習院大内における革マル派、右翼との過酷な闘争の先頭に立つ。

73年6月14日、川口君虐殺を機に前年から生起していた早大解放闘争に叛旗派として参加、逮捕。以後も叛旗派として活動。

病気との闘い

74年秋、東京で統合失調症を発病。以後しばらく、病気を抱えながら米子と東京との行き来を繰り返す。統合失調症との闘いは晩年まで 続いた。70年代後期から米子に定着、結婚。ジャズに傾斜、『スイン グ・ジャーナル』等に短文、短歌などを投稿、掲載される。靴小売、ジャズ喫茶経営などを手がけるが、いずれも失敗。

離婚後、再び、地方の民宿、居酒屋などでの仕事を転々とするが、80年代中期の長野での発病を機に、再び米子に帰郷。以後、ずうっと 米子に留まる。

80年代から晩年までは、入退院を繰り返すかたわら、米子の宴会場 皿洗いのパートタイマーと、障害者年金で生計を立てていた。その間、両親、兄も相次いで死去。

2005年夏、映画「LEFT ALONE」米子上映運動に地元有志とともに 参加。また、そこで協働した米子在住の作家・松本薫原作の市民シネマ「梨の花は春の雪」の自主制作上映運動を支援 。同作品は本年 8月31日に完成試写会が米子で行われるが、故人の席も用意される予 定。

最晩年は読書意欲さえ削がれるような心身状態だったが、それまで は、『資本論』、トロツキー、廣松渉などにも向かい、闘争への意欲を 持続させていた。

急逝

2007年6月15日朝、昏睡を発見され米子市内の病院に運ばれたが、午前10時50分、脳内出血のため急逝。見取ったのは、学習院大学全共 闘以来の友人で、1年ほど前から李を頼って寄寓していた後藤である。

無宗教でおこなわれた16日の通夜、17日の葬儀には、親類縁者・地元友人をはじめ、学習院大学全共闘の後藤・菅、同叛旗派の黒沢・北 岡などが参列、バックには故人が生前愛したジョン・コルトレーンの ジャズが流れた。誰もが「少年のような」と評する、心優しいキャラ クターだった。合掌

叛旗派関連年表

小山 健＋神津 陽

1958 年

12/10

共産主義者同盟 (ブント) 結成 。学生組織は社会主義学生同盟 (社学同) 。

1959 年

6/5

全学連第 14 回大会 ブント系が全学連中央執行委員 会を掌握 。

委員長 唐牛健太郎 、書記長 清水丈夫 (現在中核派最 高指導者)

1960 年

6/15

全学連 国会突入 樺美智子死亡

7/29

共産主義者同眼第 5 回大会 分派闘争激化。革通派・戦旗派・プロ通派・関西系に四分解 。

10/15

社青同学生班協議会結成 学対中執 滝口弘人 (佐々木 慶明) 解放派の骨格つくりが始まる

1961 年

5 ～ 6 月

ブント戦旗派、プロ通派の一部、革共同へ移行。

7/1

『Sect No6 』中大福地 、早大河野 東大山崎等が社学同再建アピールを発信。

9/1

吉本隆明、谷川雁、村上一郎同人「試行」創刊

1962 年

4/1

関西共産主義者同盟 (関西ブント) 結成

5/1

共産党 構造改革派除名。春日庄次郎等統社同 (フロント)、いいだもも等共労党結成。日本の声、統一共産同、社労同等に分解。

9/15

社学同再建、委員長味岡修 (後 叛旗派指導者)

1963 年

11/15

東大銀杏並木集会 参加の是非を巡って革共同は革マ ル・中核派に分裂。

1965 年

10/15

反戦青年委員会登場

1966 年

6/28

三里塚柴山空港反対同盟結成

8/18

ベ平連結成

9/01

共産主義者同盟再建第 6 回大会 (第二次ブント結成)

12/17

三派全学連結成 委員長 (ブント)、副委員長 (ブント + 解放派)、書記長 (中核派)

1967 年

10/8

第一次羽田闘争 京大生山崎君死亡 事件後「10.8 羽田」と呼ばれ .70 年安保闘争に向けての一大転回点となった。 当時は高校生だった筆者小山の激動の 10 年もここを発端 とする。

11/27

第二次羽田闘争 逮捕者 247 名 。

1968 年

1/17

佐世保エンプラ闘争 逮捕者 158 名 社学同日比谷公園 デモで 108 名逮捕。

3/29

ブント第 7 回大会。関西ブントが指導部掌握。マル戦派 脱落。地区委員会充実方針。

5 月

ブント三多摩地区委結成。兵器生産輸送阻止実行委、三多摩学生行動委準備会結成。

5/25

細谷火工闘争。三多摩から死の商人を追放せよ！

8 月

米軍タンク輸送阻止闘争。三派全学連分裂。

8/1

共産同三多摩地区委員会機関誌『叛旗』創刊 神津陽「共同体論」掲載。

10/21

社学同 防衛庁突入闘争 新宿騒乱罪発動 1012 名逮捕 。

11/22

東大・日大闘争勝利全国学生総決起集会 2 万人結集 1969/1/18.19 東大安田講堂決戦。

1969 年

2 月

砂川反戦塹壕建設。米兵ピストル発射事件起こる。

4/27

ブント・中核派に破壊活動防止法発動

4/28

沖縄闘争。ブント共産主義突撃隊 (RG) 登場 (小山健の 東京での活動家生活開始)。

第二次ブントの最高時の武装闘争逮捕者 998 名。

6/08

アスパック粉砕闘争 伊豆伊東 逮捕者 204 名 (小山健 参加)

6/15

大学立法粉砕闘争全国 10 数万人が決起。

7/06

明大和泉校舎で赤軍派はブント仏議長をリンチ。7.6 事 件。のちブントは赤軍派を除名。

9/05

全国全共闘結成大会 178 大学全共闘 2 万 6 千人結集 。

10/21

国際反戦デー。敗北後、叛旗派は戦闘団結成・情況派は 脱落。赤軍派前段階武装蜂起失敗 。

11/1

都立商科短大でバリスト (全闘委委員長の筆者 11/3 に 逮捕)。

11/5

赤軍派 大菩薩峠で武装訓練中爆発物取締法で全員逮 捕 。

11/17

70 年安保決戦。佐藤訪米阻止蒲田闘争 1177 名逮捕。

1970 年

3/31

赤軍派 よど号ハイジャック。

6/11

ブント政治集会で叛旗派と戦旗派分裂。のち連合ブント 叛旗派を除名 。

7/17

叛旗派首都労学政治集会 2.000 名結集。神津陽「< 党ー大 衆 > 構造の止揚へ」吉本隆明発言 。

8/04

中核派による法大での海老原君リント殺害 革マルとの 内ゲバ始まる。

12/08

連合ブントは関西・さらぎ・神奈川左派連合と、日向戦 旗派に分解。

12/17

ブント叛旗派政治集会 三上治「戦闘宣言から戦闘へ」。

12/18

京浜安保共闘 上赤塚交番襲撃 柴野君射殺される。

1971 年

1/20

叛旗派、共産主義者同盟機関紙「叛旗」創刊 。

1/25

赤軍派と京浜安保共闘の共同政治集会開催 連合赤軍へ。

2/22

三里塚第一次収用阻止闘争逮捕者 467 名 (叛旗派起訴 5 名)。

4/01
砂川・自衛隊進駐阻止共闘会議結成 (行動隊長小山健選 出)。
4/23~25
三多摩・神奈川・中部・西武・南部・北部埼玉各地区 反帝戦線総決起集会。
4/28
戦旗派との全面的党派闘争拡大へ。
5/19
反戦塹壕前砂川闘争
6/3
叛旗派政治集会「<かくめい>へ向かう綱領一戦略の創 出へ」三上治。吉本隆明、島寛征、下野順一郎。
6/15
中大学館解放闘争・1500名決起。
6/17
沖縄返還協定調印実力阻止闘争。青山通りでバリケード 戦。
7/26
三里塚農民放送塔強制収容実力阻止 (1・5次、起訴1名)
8/30
砂川反戦鉄塔完成。
9/16
三里塚第二次収用阻止闘争 三警官死亡 通称 東峰十 字路事件 (叛旗派逮捕19名)
9/20
公団焼き討ち闘争 叛旗派のみ逮捕 (起訴2名)
10/17
反戦塹壕前立川闘争 叛旗派立川駅交番攻撃 (逮捕2名)
10/21
沖縄返還協定批准阻止闘争。
11/15
麻布学園闘争全面勝利・山内校長代行退陣 (累計逮捕者7名)
11/19
叛旗派沖縄返還協定批准阻止闘争、叛旗派新宿駅交番攻 撃 (逮捕10名)
12/10
叛旗派政治集会 三上治「沖縄闘争の現段階と展望」, 神津陽「時間・空間と政治組織」

12/14
学費・学館闘争勝利全都共闘会議結成。
1972年初
1月
中大・法大・理 大・青学・明学で学費闘争。権力の9・16三里塚、11・19沖縄闘争事後弾圧に抗し叛旗派救援組織・赤燈社を創設。
1/28
叛旗派共産同政治集会 発言:神津陽・三上治・立花 薫。
2/19
連合赤軍 浅間山荘銃激戦 (~28日)。
3/07
連合赤軍リンチ殺人発覚 12名の遺体発見
4/14
叛旗派共産同関西政治集会 三上治・沖縄闘争と民族問題
5/13
叛旗派沖縄討論集会 基調提案・神津陽、発言・吉本 隆明、上原生男、中里効、金城朝夫。
5/15
第三次琉球処分=擬制的返還策動粉砕、沖縄闘争。
6/11
立川基地包囲制圧大行動・砂川反戦ひろば。
7/25
反帝戦線労働者集会。発言・藤田若雄。報告・光文 社・弘済会・教育社・テック・ニチバン。
9/10
相模原・米軍戦車搬出阻止闘争。
11/8
早稲田大学でカクマル派が川口大三郎君を虐殺。早大解放闘争始まる。
12/14
叛旗派共産同関西集会 発言:神津陽・三上治
1973年
1/1
連合赤軍委員長 森恒夫 東京拘置所で自殺 (小山は 獄中で知る)。
2/9
光文社闘争1000日突破・湖喜入氏一周忌闘争。

2/18
朝霞基地・横須賀基地 20 日連続闘争。
4/14
三里塚反対同盟幹部会が戸村一作参院選選挙出馬に反対する叛旗派追放を決議。拒否する 。
4/16
反インフレ連続闘争。4・16 関西烽火派の妨害を粉砕し愛媛地区反帝戦線結成 。
4/21
早稲田大学 1 文学生大会、カクマル妨害を排除して成立。
5/12
WAC(早大学生行動委員会) と叛旗派、カクマルから文学 部学生大会を防衛。
5/13
叛旗派全国反帝戦線大会・電通大調布寮。
5/15
沖縄闘争 沖縄・砂川・三里塚の内的連関を凝視し、民族一世界空間を止揚せよ。
6/4
解放派・叛旗派連合部隊三度の白兵戦に勝利し、カクマ ル全国動員部隊を粉砕。
6/14
叛旗派は早朝早稲田大に進駐。商学部 14 号館にて機動隊 に包囲され、64 名逮捕。
7/11
叛旗派政治集会 (武蔵野公会堂) 発言 : 神津陽・立花 薫、報告 : 早大闘争・赤灯社 。
7/16
商品投機・物価高騰策動粉砕首都圏総決起集会。
8/25
叛旗派反帝戦線第二回全国大会・杉並産業会館。~26 日、東大教養学部。
10/21
早大・インフレ闘争勝利、反基地・自衛隊闘争勝利行動。 反伊方原発連続闘争 (愛媛)
11/19
WAC 図書館突入。叛旗派不参加。

1974 年

1/24
首都圏反帝戦線連合討論集会「大学共同幻想の転質学費値上阻止闘争の位相」三上治
2/27
叛旗共産同政治集会「全ゆる擬制を転倒し、死すべき権力を透視せよ！」三上治
3/9 ～ 15
春期連続公開理論講座全 4 回
4/14
三里塚反対同盟 戸村選挙反対をする叛旗派追放決議。
4/18
叛旗共産同政治集会　神津陽 。
4 ～ 5 月
反インフレ連続 6 回闘争。
5/18
首都圏反インフレ行動委結成。
6/15
反帝戦線全国大会・明学大。
6/18
叛旗共産同政治集会「インフレ・生活価値破壊へ、日常圏～反撃せよ」神津陽、吉本隆明。
7 月
夏期連続公開理論講座全 5 回、報告者：神津陽・大川明・宮崎隆・三上治・吉岡忍 。
8/30
東アジア反日武装戦線 三菱重工爆破 8 名死亡。
10/5、11/13
刑法改悪阻止討論集会・赤橙社。
この年立教大・成蹊大・龍谷大・東洋大・慶応大・日大・青学大などで学園闘争激発

1975 年
1/1
叛旗 83 号「大道無門一革命派の基準と鞍部一」政治局名だが討議なき三上個人論文。
2/6

71年11・19沖縄闘争第一審判決、高橋・柳・大野・竹内同志に実刑。
2/12
83号の三上・大道無門論文による亀裂拡大し、叛旗政治集会は4月に延期となる。
2/20
三里塚現闘団 星君自殺。
3/9
73年の6・14早大闘争第一審判決で6名に実刑判決。控訴しないことに決定。
3/14
中核派 本多書記長 カクマルに殺害される中核派 カクマル絶滅宣言。
4/28
叛旗共産同政治集会、意見不統一のため再度延期さる。
叛旗88号、政治局「同盟回状」を掲載。
この頃、南部・神奈川労働者討論集会、青学大反帝戦線集会、明学大反帝戦線集会。関西労研集会。
6/30
理論誌「叛旗10号」発刊。神津陽・立花薫・坂田正彦と三上治の強調点の差が拡大する。
7/1
叛旗共産同政治集会　基調・立花薫、発言・三上治、大田区民センター
7/5
叛旗共産同関西政治集会　基調・佐藤哲。発言・神津陽、中之島公会堂
7/14
自治体労働者経験交流集会
7/23
教育労働者経験交流集会
8/23～24
全国反帝戦線大会（電通大）
9/14
叛旗派共産同大会（伊豆下田）。三上権利停止処分を大会決議（三上政治活動停止・沈黙を宣言）
10/15
叛旗紙97号、同盟内論争「三上治離脱問題」を掲載。
10/30
理論誌「叛旗特別号」発刊。総特集「同盟内論争の結果と展望」

この頃の叛旗派関係刊行物。
『Sect6 大正闘争資料集』,『吉本隆明講演集～根底への出立へ向けて』,『自立と日常』、『吶喊』、『青年団』、『希望』、『<かくめい>への越境』、「自体パンフ」など多数。
11/1
首都圏反帝戦線集会。
11/15
教労研討論集会。
12/12
叛旗共産同政治集会、立花薫「党内論争の帰結と70年代後期階級攻防の血路」、発言神津陽。
12/13
全国反帝戦線代表者会議。
12/14
自治体労研集会・自治体パンフ発行。

1976年
2/1
新聞「叛旗」104号より、タブロイド版へ移行。
2/6～7
叛旗共産同冬季合宿
2～5月
叛旗公開春季労闘講座全5回。
この頃光文社・教育社・弘済会・各自治体・教育労働などで争議拡大深化
6/15
叛旗共産同集会　基調坂田正彦、発言神津陽。光文社、教育社、学生、11・19被告団など。
6/18
75年9月共産同大会の決議と三上宣言反する三上治個人集会へ、叛旗派が政治的介入。
6/25
叛旗共産同関西集会　基調紀野悟、発言立花薫。
8/1
叛旗派中央委員会で神津陽、立花薫の対立公然化。
9/1
新聞「叛旗」116号刊行。事実的に新聞最終号となる。

9/5

叛旗共産同大会。澤田、叛旗派の６・１８介入に疑問提示。

9/26

叛旗共産同中央委員会。叛旗共産同指導部の組織統括機能停止。

10/9

叛旗共産同首都圏総会。立花薫が心的分派を表明。澤田同調。

10/24

叛旗共産同大会。組織体としての叛旗派の事実上の解体を確認。

11/13

立花薫が個人集会を開催。

12/19

叛旗解体政治集会：主催・叛旗派＜解体＞＝再生委員会。全出席者で叛旗派解体を合意。

12

「叛旗」紙休刊の御侘びと御知らせ・編集局。

1977年

1/22

叛旗被告団合同会議。12・19叛旗解体合意を全員が了承。旧叛旗派財政残金は赤灯社名義に移行し、被告団 が管理することを決める。

2/14

叛旗解体政治集会 杉並産業会館 。

2/11

解放派 中原一 カクマルに殺害される

5/4

71・11・19沖縄闘争への東京高裁判決。高橋克行実刑 三年半。柳・大野・竹内派執行猶予。

5/17

三里塚9･16東峰十字路闘争第45回公判。東山薫虐殺抗 議で開廷不能となる。

5/20

解体再生委員会の高橋克行、11・19沖縄闘争判決によ り下獄。

6/11

資料集「<叛旗>解体」刊行。叛旗派<解体>作業終 了。

1978年

3/26

第４インター・プロ青・戦旗派が成田空港管制塔占拠 闘争。

1979年

12/16

<叛旗>全縮刷版発行。叛旗新聞紙の1971年1月20日創刊号～1976年9月1日116号までの全バックナンバーを完全収録。

この間、全国各地の叛旗関係者が論集「＜解体＞以降、回覧集「月曜会誌」、同人誌「最後の場所」「越境」、個人誌「架橋」「言い出しっぺ通信」「燎火」などを自主発行している。

1986年

10/25

三里塚東峰十字路裁判結審 実質全員無罪判決勝ち取る。

12/01

叛旗解体再生委員会を叛旗互助会に発展的に再編成以降、現在まで叛旗互助会は大久保で継続している。

「叛旗派武装闘争小史・増補改訂版」発刊に際して

初版「叛旗派武装闘争小史」は好評で完売し、窓口の神津さんの話ではまだ問い合わせもあるらしい。そこで「高槻修秘話」神津陽、「高槻とともに戦った中大時代」会沢伸憲、さらに私がオルグした活動家についての「李健裕の死」菅秀実の三本を追加し、内容を見直し、判型を小さくして「叛旗派武装闘争小史・増補改訂版」を刊行することにした。本改訂増補版の発行責任者は小山健だが、編集・販売元は叛旗互助会・神津陽事務所に一任した。購入申込・入金・在庫確認などは、奥付連絡先にお願い致します。

2014 年 11 月 15 日 小山 健 記

叛旗派武装闘争小史・増補改訂版

初版発行　2012 年 12 月 1 日
増補改訂版発行　2014 年 12 月 1 日

著者　小山 健・神津陽・会沢伸憲・菅秀美
発行責任者　小山健
編集・販売元　叛旗互助会・神津陽事務所
定価　1200 円（税込）
郵便振替番号　00100-0-466942
直通携帯番号　090-5564-8483
メールアドレス akouzu@hotmail.com

叛